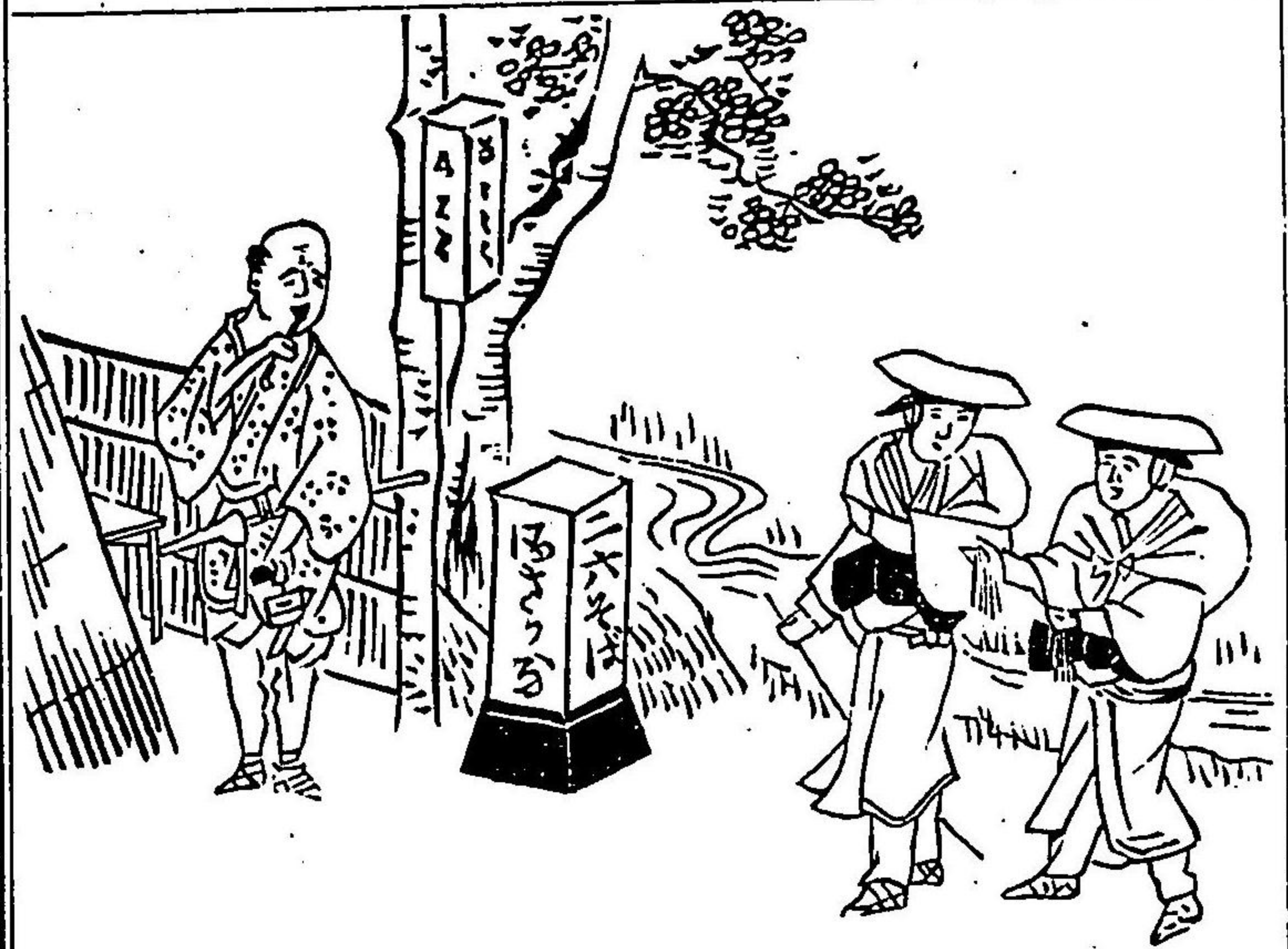


り歸^りヒヤア比丘尼だくさア彌次三^渡渡
 志やす彌次エ、いめへましい北八^人人^は荷^に
 を持^たせたるの^中中^かく、い、物^{もの}だ。是^{これ}でお供^を
 を連^つれた心持^{こころもち}だ。ヤアくこいつらアまん
 ざらでもねへ。彌次さん見^みねへこちらの
 比丘尼^{びくに}がおれを見て。アレいつそ。よこに
 こと。愛敬^{あいぎやう}がこぼれるようだ畜類^{ちくるい}め彌
 次^じ。愛敬^{あいぎやう}のい、のじやアねへ。アリヤア顔^{かほ}
 又^{また}ままりのねへのだ。北八^{北八}悪^{わる}く云^いぜ。此^こ
 内跡^{うちあと}になり先^{まづ}になり行く比丘尼^{びくに}はまだ年^{とし}
 も廿^に二三^{さん}今^{いま}ひとりいとしま十一^{じゅういち}二^にの小^こ比
 丘^{ちゆう}と共^{とも}三^{さん}八^{はち}連^{れん}。中^{ちゆう}も若^{わか}ひ。若^{わか}あなた。
 比丘尼^{びくに}が北八^{北八}のそばへよりて。若^{わか}あなた。
 火^ひのお座^ざりませぬか。北八^{北八}アイく今^{いま}打^{うち}て



○有^二無^一
 限^レ餘^レ情^一

わげやせう^ト摺^{すり}火^か打^{うち}を出^だし北八^{北八}サアおあがり。時^{とき}よか前^{まへ}方^{かた}アせけへ行^いなざる 比丘
 尼^に名^な古^こ屋^やの方^{ほう}へ参^{まゐ}り升^{しょう} 北八^{北八}今夜^{こんや}一^{いつ}所^{しよ}に泊^{とど}りてへれ。何^{なん}と赤^{あか}坂^{さか}迄^{まで}行^いなせへ。一^{いつ}所^{しよ}にしや
 せう 比丘^{比丘}夫^{それ}の有^あがたうお座^ざり升^{しょう}。モシせうぞお煙^{たばこ}草^{そう}粉^{こな}を一^{いつ}ッぶく下^{くだ}さりませ。とんと
 買^かいのを忘^{わす}れませ。北八^{北八}サアく煙^{たばこ}草^{そう}入^{いれ}を出^だしな皆^{みな}な上^あよふ 比丘^{比丘}夫^{それ}でいあなた。おこま
 りでお座^ざりませよ。北八^{北八}ナ。わつちやア。由^{よし}さ時^{とき}にお目^めへ方^{かた}のような。うつくしひ顔^{かほ}で
 なせ髪^{かみ}を剃^そりなせつた。やんよそうして置^おはかしひ物^{もの}だ 比丘^{比丘}ナ。わたしらが。たどへ
 髪^{かみ}が有^あたどて。誰^{たれ}も構^{かま}い人^{ひと}はお座^ざりませぬ 北八^{北八}有^あだんか。わつちらア一番^{いちばん}に構^{かま}うだ。何^{なん}
 どかまはしてくんなさらんか 比丘^{比丘}ナ。ホ、くく 北八^{北八}早く一^{いつ}所^{しよ}に泊^{とど}りてへ彌次^{やじ}さん
 此^こ先^{さき}の宿^{しゆく}へ最^もふ泊^{とど}ろふじやアねへか 彌次^{やじ}馬^ま鹿^かア。ぬかせ。あやよく坊^ぼ主^{しゆ}のくるが。と
 ぎれた。茶^{ちや}屋^やよ至^{いた}ると此^こ所^{ところ}より比丘尼^{びくに}のわき道^{みち}へ這^は入^いる。北八^{北八}コレくねめへたちや
 ア。ここへ行^いく。そつちじやア有^あめへ 比丘^{比丘}ハイ是^{これ}から分^{わか}れ申^ま升^{しょう}。わし共^{とも}此^こ在^{ざい}郷^{きやう}へ廻^まて
 参^{まゐ}り升^{しょう}から。野^の道^{みち}をさつくと行^い過^かる。北八^{北八}あきれ。ハ、くく。北八^{北八}手^てめへ今日^{けふ}

の大分つけがわりいぜ北八エ、とんだ目も逢た。こうはらなトウつかりして居る後往來北八アイタ、くくく目も明て通れ。たれたトふり歸り見れば旅僧彌次チット荷物渡志た。北八コリヤはじまらねへトふせうく荷を引さかたげ行儘願て吉田の宿も至る

旅人をまねく湖のやぐちかかと爰も吉田の宿のよねたち

此宿はづれより遠國同者との見ゆれ共少しさゝるたふう。志やべる手合五六人高聲一咄て行を聞ば。中も目引の立綱も肩の所綱から替りたる切を當たる裕を引張風呂敷包と米だてを脊おひし男チ、イ源九郎義經ヤアイ早く來さいのト耳聲跡のほうをふりかへりてト耳聲彌次郎北八ねかしく此義經と呼ばはる、男を見れば紺の紋付の廣袖裕カめる是も包と糸だてを脊ねひ顔は大あばたまで少し片小ひんはけたる男龜井兄なアヤ片岡兄なア。早くと足が達者だアのし。うらア。あくとのわかざれさアへ。石ころが

ばるつて。あるかれ中さぬ。かめ井静御前のとうまさつたアのし。義經ヤレ儲聞なさる。跡の建場で静御前が持病の疝氣さアねこつたと金玉ノウ釣上て。うつ死べいと。西風。東風に。さはぎやるあとよ。夫にハア六代御前が。牡丹餅さア三十斗も。うち喉たげで食傷のウーて。じたん。ばたん。切なかりやる。まんだ夫は辨慶は。團子のく

○徐御膳所ニ以

後

さアで咽喉のウ。つ、いたと涙ア灑いて。なきやつたげで。うらが新家に友盛殿が三人れウ。介抱して。やらやつと跡から連んで來申そへ。主たちやア。何もしらせようる走つて仕合せだアの彌次郎此咄をおかく跡になりさきになりてね目へ方ア何所へ行なさる。義經お伊勢様へ参り申そは。彌次先けから聞ばお目へ方ア義經だの。辨慶だのと云なさる。ごとう云こつたね。義經ハアそんな衆の聞やつたら。ねかしかんべる。コリヤハアわし共が國さアつん出て來るまへに祭禮が有申て。千本櫻といふ芝居のウし申たから。夫でハア義經だア辨慶だアのど。狂言さア。ねつ初めた時。忘れない様よと其名を。やつせし云つけた。くせさア。今でも戯けよ云のでれざる。彌次聞へやした。そんならね目へハ義經も成た。ね方と見へる。義經そうでござる其前よわし共が國さアへ。江戸芝居が來て天神様の狂言れウー申たが。聞なさる。玉けた理屈よ。あよがハア時平とやら五兵衛とやら云悪人殿が。さん言のウせられたげで。天神様の島流にならしやまど時。興も乗てね出やると。あよがハア見物れウしてれる婆ア様立も噂様立も。ヤレくいと

しばいこんだど。涙ア翻して。御門跡様は通らしやまど様よ。米だアの。鏡だアのと。舞臺さアへ。詩ちらかいて。悲しがるや。そこでハア見物の中から博勞の與五左と云づない人が舞臺さアへ。駈だいて。いやるよやア此芝やアならないぞ。あぜ天神様。島流しよせるのだ。最前お出やつた長樂寺様のゑんま様ア見る様なか公家殿が悪人だア。あよも天神様よ科アない。いかよ芝やだアとつて。ふとを馬鹿よしたこんだア。天神様の尻やア。此博勞の與五左が持の。時平殿のうらが相手だど。あよハア御年貢米の二俵べしも。さしやアける力れ有せなアだんて。誰もうつたまげて。挨拶のウせる人アな。見物もくちやうく。よ。與五左殿そうだ其時平とやらアしよびき出いてぶつた、けと。あにハア村中れ若いふとたちが樂屋さアへ刃込で。らんごくを遣ると思ひなさる。そうせると江戸役者の時平殿は。コリヤたまらないと。尻のウおつはしよつて。つん逃中た。夫からハア名主殿へ寄合付て。最ふ此村へ江戸役者ア入るなど談合のウして。わし共が其跡の芝やさアで狂言のウおつばじめ申たが。江戸



芝やよりかア。ぶち割る程流行申た。いばつて。とはずかたり自慢らしく咄もつて行ま、よ。いつの間にかは大雲寺に至る。此所の醴酒の名物なればか人々打連て此茶屋よ休む彌次郎兵衛北八の急ぎことを、打過るとて、
 いや高き御寺れ前の名物の
 是も佛になれしあまさけ
 斯て此渡りより早日も傾き暮よ近ければ
 いざや急んどて草臥し足を早めてたどり
 行道ぞがら北八 とうだ彌次さん持が明か
 ぬへに彌次 大きに草臥た 北八 何と夕べの
 泊りの中位の宿で有たが今夜のこういや
 せう。赤坂迄。わつちが先へ行ていひ宿を

取やせう。お目へ草臥たなら。跡から徐かよ來なせへ。宿から向ひて人を出させて置やせう。彌次 夫よかるふ。しかし宿のせうでもい、から。たばけ有そな内よしやれ。北八 春込山。ト此所より駈ぬけて先へ行彌次郎跡よりたどり行よ。程なく御油をかぶりたる如く塗立たるが袖を引てうるさ。ければ彌次郎兵衛やうくと振切行過るとて

其顔で泊だてなさは宿の名の御油るされいと逃て行ばや

彌次郎兵衛。餘り草臥ければ。先此所。はづれに茶店に腰を掛たるよ主れ婆々。アイ茶ア参りませ。彌次 モシ赤坂造の最う少しだのば、アイたんだ十六丁お座る。おまへ一人りなら。此宿泊しやりませ。此先れ松原へ。わるぬ狐が出おつて。旅人衆が能化され申。彌次 そりやア氣のねへ咄だ。しかし爰へ泊りたくても。連が先へ行たから仕方がぬへ。エ、氣ついこたアぬへ。やらかてくれよふ。アイおせ。ト茶代を立出行に聞さの聞し御氣味悪く眉毛よ唾をつ。彌次 ワリヤ啼やアがる。おのれけなから行くはるか向よて狐の啼聲コン引く。彌次 所迄來りし。是もこへ狐が出ると云咄しを聞てもし出て見る。打殺してくれう。

○狐話
無氣則
常話耳

○見股
問尻尾
是馬カ歟

も化されていつまらぬと彌次郎を待合せ連立行んと。北八 ちイ。彌次さんか。彌次 思ひ土手よ腰を掛け煙草吞居りけるが夫ど見るより。ト云彌次郎心付。こいつ。きやつめが北八。彌次 一所に行と思て待合せた。に化たなど思ひければ態とよはみを見せ。彌次 一へそんなで行のじやアぬへ。北八 ヲヤお前何を云ふとして腹が減たろう餅を買て來から喰なせへ。彌次 馬鹿ア拔せ。馬糞。くらはれる物か。北八 ハ、く、く、コレおれだいな。彌次 おれだもさまじい北八よ其ま、だ能化やアがつたちく生め。北八 アイタ、く、彌次さんコリヤせうする。彌次 何するもんか打殺そのだ。トうつかりした所を彌次郎その上へ乗。北八 あいたく。彌次 いたかア性体をあらはせ。北八 アレ尻へ手をやつてせうする。彌次 どうするもんか尻尾を出せ出さざばこうする。ト三尺手北八が手を後へ廻してまざる。北八 彌次 サア、先へ立てあるけ。ト北八をくおかしくわざとしばられてある。ト赤坂の宿に至る。早何れの旅屋にも客を留て門立。北八 居る女も見へず彌次郎の宿から向ひの人が最早出そふなものとうろつく内。北八 コッ彌次さんい、かげんよ解てくんな外聞のわるい。人がさよろく見てわりい。

○彌次
奮發

とをかつしやり升 北八 そんなら先へ這入やせう
 亭主又坐敷へ出來り 時よお客様
 へ申上り。今晚の私し方又少し祝事がお座り升から。御酒を一ツ上ませう
 手より酒
 肴持彌次 ね構ひ成るな何ぞお目出度とかの 亭主 ハイおさやうでお坐り升。私の甥め
 出る ね構ひ成るな何ぞお目出度とかの 亭主 ハイおさやうでお坐り升。私の甥め
 に嫁を貰ひました。今晚婚禮を致させ升からおやかましようお坐りましよう
 立て行北
 八風呂よ 北八 何だおどり掛る 彌次 この内に婚禮があると云とだ。コリヤ彌々。さや
 り上り
 つめが。ばぐらかそよ。きはまつた。もう水風呂へも這入めへワへ 北八 エ、お前もい
 、かげんよしな。さりと執念深へこつた 彌次 ヤイ、めつたよ油断ならぬ。此硯
 ふたも。こんな又味そら又見へても性の馬の糞や犬の糞だろふ 北八 ホンニ。そうだろ
 ふから。おめへ見えて居なせへあいつの有がてへ。おじぎな。よやらかしやせう
 北
 八手酌にてさつ。と肴掛る彌次郎れろのいト 彌次 いめへましい氣を。わるくさし
 がきたなくさど見ても居られずまじくして
 やアがる 北八 きづけへいねへ。一盃呑なせへ 彌次 イヤ、馬の小便だろふ。ドレよほ
 ひをか、して見せや。ムウ、こりやアほんとうの様だ。どうもこらへられぬア、ま

、よやらかせ 一盃ついで。呑
 酒だ、ドレ、肴ア。チット此玉子の色相
 が氣よくはねへ海老よじよふ。カリ、こいつの本とうの海老だ、ト引かけ
 つ。ねさるつ。さつ、と肴掛る此内勝手の方のわんがくれ音。がたびしとさわ、四海
 がしく取込さい中別座敷の早婚禮の盃事始りしと見へてうたひのこゑとる、浪静
 浪静よて國も治る時津風枝をならさぬ御代なれや。相又相生の松こそ目出たかりけ
 れ 北八 ヤンヤア 彌次 コウやかましひわへ 北八 やかましひい、が。ね目へ先刻から
 盃をはなさねへ。ちつとこつちへ廻しな。ホンニ馬の糞だの小便だのど云かと思や
 ア聞くも一人で喰やつさ、彌次 ねらア正直化された氣よ成て居たが。今思や
 ア。そうでもねへ。とんだ苦勞をさせやアがつた 北八 エ、お目への苦勞一たよりかア
 おらア縛れて髪ちさなめ合たハ、此内勝手より膳も出彼是する、千代も替はら
 じ幾千代も榮え榮ふる松梅の二葉の竹の夜をこめて老と成迄と結ぞたれしかるける。
 目出たひ、三國一の嫁を取すまゐた。しやん、ト手を打た、わな
 た方最ふね床をとりまじよか 彌次 そんなにしやせう 北八 コレ女中祝言は最ふ濟や

○ 嫁 遠
目 彌 次
窺 見 違
之

またか。定めて嫁こらうつくろふ。宿女 アイサ。むこ様もよい男。嫁ご様もえらゐ
 さりやう由でね座り升。ね氣の毒なとのあちらの坐敷。又寝やしやう升から。むつ事が
 聞へましょ。彌次。何だそんな手合と割床のあやまる。北八。こいつの大變。宿女。モウお
 しづまりなさるませ。ト出て行。二人も其まゝ寝かけると早ふをまひと隣の坐敷に
 色事にて貰ひし嫁と見へて中。初たい面と見へず。ぶつたりつめつた。彌次。エ、
 りして。いちやつく様と手に取るように聞へ。彌次。北八。寝もやらす。
 どんだめ合しやアがる。北八。ホニわりい宿を取た。人の心も知らせよ。何んだかか
 そろしくむつまじいな畜生め。彌次。サア咄聲がやんだからむつかしい。ト段々布團か
 の様すを聞耳立て。寝られぬまゝに彌次郎とつとねき立。北八。コウ彌次さん嫁は
 そまのそま間から差窺く北八もはだかのま、はひおきて。ト彌次郎が夢中。又成
 うつく志ひか。ねいらもちつと見せてくん。彌次。コリヤ静にして肝心の所た。北八
 ドレ。見ね。彌次。コレ引張な。北八。大でもちつと退なせ。ト彌次郎が夢中。又成
 けんと引張ぶものかトといぢるほづみ。バつたりふとまが。あちらの間へたをれ
 る。二人も共ふそまの上へころげる。むこも嫁もおしにうたれてきもをつぶし。
 むこ。わいた。コリヤどやつじやいなんせ。唐紙を打こいた。トはねおきた所が。
 行燈もひつくりかへ

して。真くら聞彌次郎は。ちやつとよげてそれが寢所へ這。北八。免なせ。手水も行
 込。北八。まご。してかのむこにつかまりせん方なく。ト呼たつる聲。又勝手よ
 とつて。ツイ戸まごひをしやした。せんでへ爰の女中がわりの。夜座敷のまん中。行
 燈を置から夫にけつまづいてね氣の毒だ。ア、小便がもるようだ。鳥渡行て来やせう
 こ、をはなしてくんなせ。むこ。いや早あされたか人達じや。夜着も布團も油。だらけ
 みなつた。コリヤおさん。だれぞ早う。おこしてくれぬか。ト呼たつる聲。又勝手よ
 来りそこら片づけるよ。北八も手持なくはづれしから紙をはめて引立やう。
 くと。よことばり云て。元の寐床るへ歸りまご。と寐掛る彌次郎。ねかしく。
 寐て聞。バやたらねかしや唐紙。共よはづれしあこの掛がね。
 北八も夜着打かむりながら。
 彌次郎の寢屋をむせうよかきさがし。我の面目うしなひしとて
 斯打興。トて。夜も更け行ま、よ。双方静まり。只あびさの聲のみ高くなりぬ。雞。れ聲
 万戸。よ響きて。引つる、課役の馬の嘶。さいさましく。とでに夜明ければ。彌次郎兵衛
 北八もねき出。あら増に支度と、のへ。早くも赤坂の宿を立出けるよ。此の宿の出端



より跡まなり先まなり行三人連れ旅人。是も江戸者と見えて。少し勇み肌の巻舌よて咄行を聞ば一人の男コウタベの泊ばねかしかつたなア。今一人ツレヨ何だか奥の間に泊て居た。やつらアきれきかねへ野郎共だ。宿の婚禮が有を羨ましがりやアがつて襖の間から覗き居て夢中よ成。とうく襖をぶつこかしやアがつた。大笑ひな。べら棒共だ。今一人夫から其聲よあやまるぞまア。あの騒ぎでおいちもろくに寝られなんだ。めへまじい一人の男をしてアノ一人の野郎め何だか宵よ宿の亭主を呼やア

○ 赤ッ耻

自首

○ 彌次

敗軍

がつて。この家の乱塔場じやアねへかと云やアがつた。わのべら棒めいどうでも氣が觸て居ると見へる。ト此手やい夕へ彌次郎北八が泊し家へ一所よ泊たど見へてを彌次コレ貴様達やア先刻からだまつて聞てりやア。ねめらぐことをべら棒だア何のこつた先れ男ナニこんた衆れとじやアねへこつちのとだ。彌次こつちのと云とがあるもんか夕べれ宿でれとをぬかそだろふ其襖をぶつこかしたべら棒と云たアおれがとだ。旅人ハアこんた其べら棒か彌次チ、其べら棒だ。旅人ハ、ハ、べら棒だ。からべら棒と云たがいひじやアねへか。彌次イヤ。こいつわろくしやれやアがる。旅人糞を喰へ。彌次何だ糞を喰コリヤ面白へ喰べひから持てうしやアがれ。ト彌次郎。眞黒されど合手のけつき盛れいさみ。サア持てきたからくらへ。彌次イヤ馬の糞のきれてやい馬の糞を杖の先よ掛け。サア持てきたからくらへ。ト三人掛て彌次郎を手込らひだ。旅人きらひと云とが有物か是非喰せよやアおかぬ。ト三人掛て彌次郎を手に込這北八イヤ最う御免なせへ。たれたも同前で御坐りやす。三人ハ、ハ、かんにてやろ。ト行過る彌次郎逆も叶はぬと。此内桐の木。中柴を打過山中に至る。爰の麻の網袋見て只口の内よぶつくさく。

早繩などを商賣ふなれば北八

御佛の誓いと見へて寶藏寺の南無阿彌袋のこ、の名物

斯て藤川に至る。棒鼻の茶屋。軒毎に生肴をつるし大平皿鉢見世先に並へ立て旅人の足をと、む彌次郎兵衛

湯で蛇のむらさきいろは軒毎にぶらりと下る藤川の宿

夫より此宿を打過の出はなれのあやしげなる茶見世も休みて北八何だか業てきよ。虫

がかぶる。婆アさん素湯の有めへか。婆ハア素湯の御座らぬ。水をしんせませうか北

八エ、薬を香のだの。コリヤたまらなく成た。時よ雪隠の何所にある。彌次何所よとつ

て。そんなよお家を見廻しても。雪隠か畳の上には有物か裏へいかつし北八ヒヤアつき

あたりよ見へるの。表へ出。雪隠へ行。しばらく用達て出てあたりを見れば此

だしおれ共中の上しろ物。只一人居る様子。北八北八モ御無心ながら。水を一

ッ手洗ふ内娘の北八コッ姉さんお目へ何を笑ひなさるそして一人爰居な

ッけらく笑て居る

○北八
腰間之
紫龍可
想像

るのか無用心なトわたりを見れ共外に人のなへ、きみのわりの何を見て笑ひなさ

るコレサ何を笑ふのだよウト娘れ手を取て引張にさそが振切もせず。やつぱり笑て

寄る。いつの間よワアイくあの人の氣違と色事をせる。ヤアハ、ト大聲を上げて笑

やら子供が見附トワアイくあの人の氣違と色事をせる。ヤアハ、ト大聲を上げて笑

びつくりしてよげのかんととる娘エ、此男め。はなさんく北八是は情けない

りよ引放さんとする所コリヤ我徒の若いお女子をどらへて何せるのじや北八イヤ

へ此娘は親父立歸りてせんものが何條女一人ある内へ這入らつせたとコリヤ承知なら

何よもしませぬ親父せんものが何條女一人ある内へ這入らつせたとコリヤ承知なら

んわい北八ナニサ今用達よいつて。ツイ水を賣た斗さ親父インニヤあれの氣違で御

座る。こなさん氣の違つたものをどらえて。なぐさみ掛さつせへたに違ひはあらまい

北八ナアニとんだとを親父インニヤ。そまんく氣違とあなとつて。ひゆつとこなさ

んが。やりからかめたに違やトよまい兎角云つせるな此分ではそまんぞくトわめ

かし大さわざをやらかそ。此内彌次郎表の茶見世も待居たりまぐ。北八手水も行って歸

らぬゆゑ跡から見に來たり。先程より此ようそを片影見居ておかしさこらえら

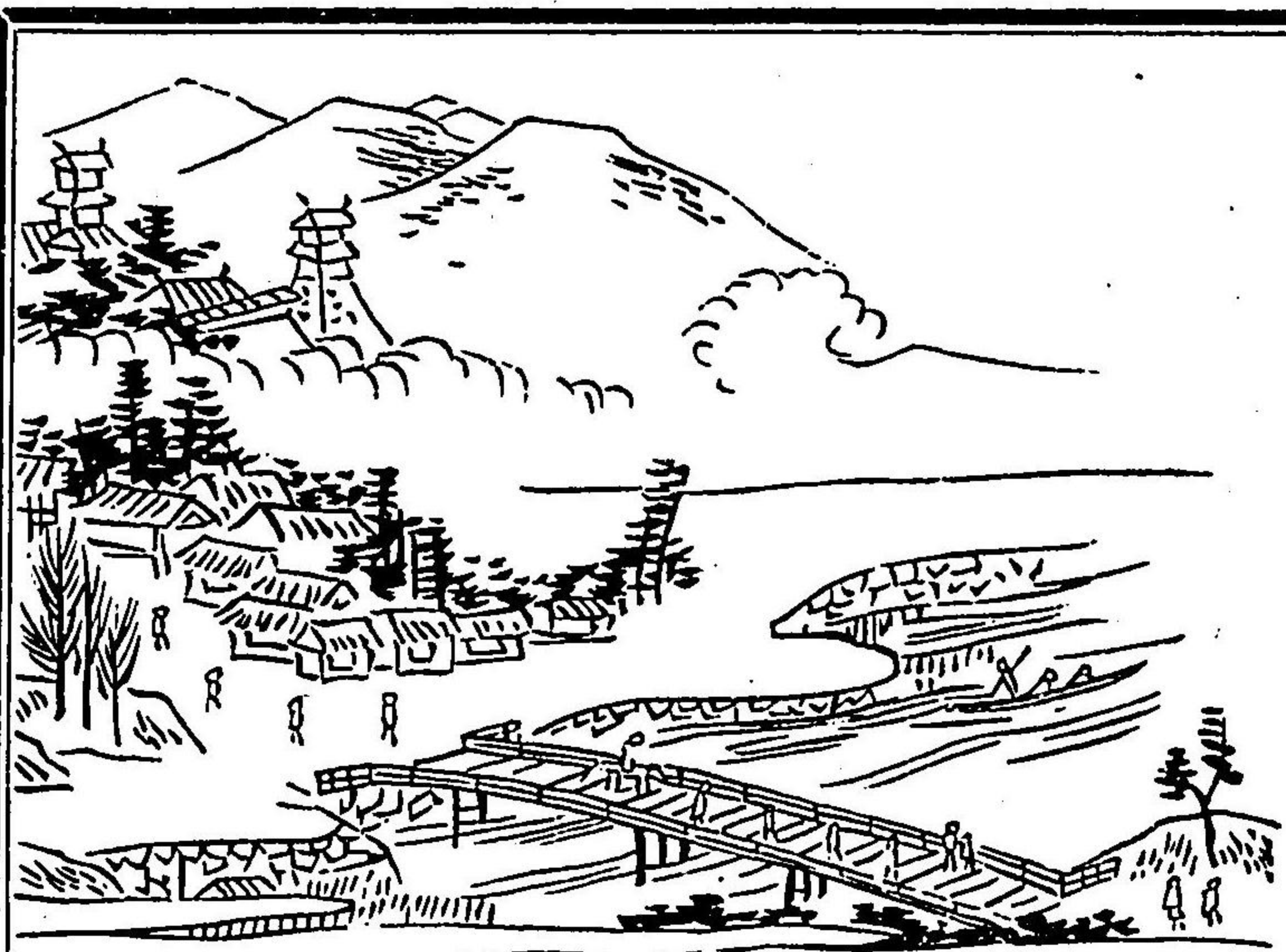
れずしかしも出掛てや彌次御免なせへ。わつちヤアこの男の連の者だがいさる聞

ろふトウそく出來り

○北八
之氣與
紫龍痺

やした。こいつめもあのよう見ゆても有やうのちつと氣がふれて居やす。了簡し
てくんなせへ。エ、此野郎め能世話をやかせる。アノ顔はよアレ見なせへきよろこ
くそる顔が證據。娘子は女丈夫だしも。イヤモ此氣違にはこまりはてやと親父イ
ヤくそうではあらまい。ナニあの人が氣違な者か。彌次 ハテサあの顔付を見なせへ
。アリヤくあの通りだ。北八なん 何だおれを氣違へだ。コリヤ面白。ハ、ア降のく。
アレく花れふぶきが散やたらり。うんさんたらり。かんさんちり。ちりか、るよ
ふで。おいとしもて寐られぬト、ヤアそこ居の女房共か。イヤ好女房じやよ
く。コリヤのはひは、ひ。さんなわるかぬなヤンヤア。彌次 アレ御ろうじろ。あの通
り其くせあの面で色氣違さ。夫だから女と見るとびろくして。やんよ恥を云のよヤ
ア理が聞へやせぬが。こいつめは。わしが弟でイヤモこんな因果なこたア御座りや
せん。親父 ハアこなさんか。そう云はせるとわしもかなしひ。見さつせる通りたんだ一
人の娘が此病でわし。おつきな苦患で御座る。彌次 さつてをり升。エ、此馬鹿野

郎め。何をげらく笑のだ。時に親父さん。おやかまじう御座りやした。親父 マツ茶
も呑で御座らつせへ。彌次 最うめへりやせう。サア氣違めうせおれ。ト彌次郎がちら
納まり。彌次郎北八を連れてこ、を
のがれ出掛け。果の大笑ひと成て
言釋たる娘のほんれ氣違ひに。こちや間違ひとなりし目違ひ
斯打興じて。こ、を立出行道とがら。彌次 コウ北八手めへもとんだ者だ。氣の違た娘
をとらめへて。どうしよう。思て業さらしな男だ。北八へ、面目次第もねへ。まかし
わつち迄を氣違ひとば彌次さんわりやアお前へ一生の出来だぜ。彌次 酒出も買ひやれ
時よ夫よ附て咄が有る丁度手めへのような氣間ぐれ者が。氣違ひの女をとらへて。ト
やらつ掛ると其女の親父が見附て腹を立。ヤイ此野郎め、人け内へとはり。な一よ
牛込やアがつて。娘をちよろまかそうとか。ソリヤア赤坂へいだのへト云と。手めへ
もまけぬ氣に成。イヤうぬ何た口ばしを。とんがらかして四谷鳶のようだと。茶かぞ
と先親父がナ、おれが四ツ谷鳶なりやア。うぬハ幡様の鳩だと云ふコリヤおか



是から又鳴海に鶴さんじやかませんかい
 な太仁ハ、くくサアいかうまるか 茶や
 女御機嫌よふトそれく挨拶する。内三
 暇乞して乗出。人の客々輕尻馬に打乗。
 やれもあれ共零す。彌次郎北八志バし此れ
 ていを見て女郎買の輕尻馬で
 歸るもおかしひと打笑ながら
 三味線に駒に打乗還るなり

岡崎女郎衆買に來れバ

斯て二人も此所を立出宿外れれ松葉川を打
 越矢矧の橋に至る

欄干の弓の如くに反橋や

是も矢矧の川も渡せば

夫よりうたふ坂町尾崎に郷。今村の建場も

○北八
 三文智
 惠叩底
 而出

つく茶やバ、名物砂どら餅お召なさりまアしお休みなさりまアし 北八 ナイ此餅
 の幾ら宛だ餅や 三文でお坐り升 北八 こいつの安い。こちらのうづら焼のいくらだ 亭
 主も三文 北八 イヤ是は三文では高ひようだ。ナント御亭主こうしなせへ。是を二
 文にまけてくんなせへ。其替りそちれ丸の餅の四文も買やせう 亭主こいつのへんち
 どちらもしてこそ 亭主 ハイようお座り升お取なされませ 北八烟草入から 四文あ
 んれいかぬ事故 一 錢貳文取出して 打喰らひ乍ら行く
 らバ丸のを買ふと思つたが二文有から此うづら焼もしやせう 彌次郎 打喰らひ乍ら行く
 彌次郎ハ、こいつの北八出かした。さそぐの亭主も肝ばかりつぶして居やアがつた 北
 ナントちゑのすさまじかるう 彌次郎へ、べら棒め。おれも其位なことを仕兼るのも
 かハ、くくく

わづかでも欲に耽る鶏焼き。三文程のちゑをふるいて
 かく興じ笑ひ連て西田海道より半里斗北の方名よしおふ八橋の舊跡を思ひて
 八橋の古跡を讀もわれくが。およばぬ恥を杜若なれ

程なく池鯉鮒に驛に至る馬士宮で泊ろうかお龜にしやうかなア。但しや岡崎能女郎衆ナヤトウ。彌次いめへましまし草鞋で足をいためた。ちつとの間だ草履で行ふ。モシ〜此藁草履のいくらだね亭主アイ〜十六文でふ升彌次こいつの安い〜この伊勢者よて商なひ〜亭主アイお安うおまそはひな。わたし所のぞうりの。ひゆつと丈夫の功者なり。ねからきりや致しませぬ北八根からア切めへが。先のほうから切るだろふ。亭主で。イヤおはきなされていたまらまいが。志まつて置なると。いつ迄もおますわいな。彌次ぞうだろふとして手前への所のぞうりの鼻緒が有て重寶だ。北八鼻緒のねへぞうりが何所も有物だ。彌次何にしる。安ひ物だ。トつるして有ぞう。イヤ此草履は。ちんばだ。はへかた〜の大き〜つて。こつちらはちめさいようだ。コリヤ八文宛よしちやア大きな方の安ひが。ちめさな方の高ひ物だ。ナント御亭主片つばの大きなほうの九文に買やせうから。こちらを七文よまけてくんせへ。亭主アイようお升お召なされ。彌次南無さん銭がたりない。一足買ふと思つたが。たつた七文計さやアねへから。アノ

こつちらの片々の方をばかり。買やせう北八ハ、〜こいつの大爆笑だ。おいらがまねをしようと思つても餅ならい、がぞうり片々が何よなるものだ。亭主お左様でお升一足れ召なさりませ。ぞうりも片々はなしての上げられませんわいな。彌次ナニ片方のうらねへか。〜とが田舎丈の物が不自由だ。北八エ、。江戸だつて。ナニぞうりを片々賣る物が有もんか。亭主何なら是よなされませ。是トやど一足で七文よまて上ませうわいな。彌次エ、馬のくつがはかれるもれか人じらしな。北八一足買なお目へ片ツ方買て。ぞうりもつりだ。彌次又先も行って片方買ふ。亭主ハ、〜十四文よ致しませう一足お召なされ。彌次貴様とつくよぞう云い、。トやうようれとよてぞうりをど〜斯て此宿を打過早くも八丁繩手左名毛明神をふしおがみ。今岡村の建場よ至る。此所の。妹川と云面類の名物いたつて風味よまと聞て

名物のまるしなりけり往來れ。客をもつなく妹かわれ蕎麥。夫より穴生村。落合村を過行て。有松に至り見れば名にしおふ絞りの名物色〜の

染地家毎につる。かざり立て商賣ふ。兩側の見世より旅人を見掛てお這入。あなたお這入。名物有松紋りお召なされサアサア是へ。お這入。彌次エ、やかましひやつらだ

やしあもの有松染よ人の身れ。油紋りし金も替ても

北八 ナント彌次さん浴衣でも買のねへか 彌次 おも入。見たをして。やるふじやアねへか 北八 よかるふ。たんど買う顔をみて。なぐさんでやろう

なれ共染地色々表又 彌次 コレ此紋のいくらします

つるある内へ這入 彌次 ト云よ此内の亭主と見へて將基を差て居るがよねんなくうてなりて

トすこしこの高云 彌次 ハイ。夫かな 彌次 いくら

とあつしやる。そこでかやうに致すかい 彌次 エ、小トれつてへ。コレ賣らねへか。直段のいくらた云 彌次 ハア儲やかましい人じや。そちらの方へ引替して符牒を

見せなされ。た、しれる物じやないわの 彌次 こいつのとんだ。商人だ符牒に。ウの

○亭主

眼光照

得兩個

之蘆中

シとエれ字が書て有 亭主 ナ、そうじやあろ。コウト三分五厘切ちや 彌次 高ひくま

けなせへ 亭主 ナニ。まけいイヤならまい。此手下將基よ 將基の 治兵さんマア商なひ

をまよまいか。あなた方が持て御座らつせる 亭主 好はいの迎も敵等のように買やしよ

まいハテ買いたうても金銀のあらまい。ない筈じや。わーが手よおはしまとじやて

彌次 何だべら棒め金銀が有まい人を見くびつたことを云アがる有から買ふ是のふん

どし丈で幾等だハ 亭主 何じやふんどし買ふ。イヤぶーつけせんばんな 彌次 こいつの

おいらを。てうしやアがる。賣物買物に無様も何もいる物か鼻つたらしめグ

る。亭主はつと心付そう 一い。是の粗相申ました。何なとまけて上ませすに。お

召下されませ 北八 そう云なさりやア。しこまた買つて上ずい。彌次さんお前へお袋

や。かみ様への土産よのあれがよかるふ。いくらだれ 亭主 へイト四匁八分でお升 彌

次 ソレそつちらのは 亭主 是の十五匁 彌次 もつとい、のはねへか 亭主 あり升共へい

はなア廿壹匁づ、こちらが廿貳匁。下のが十九匁宛でお坐り升 彌次 もつと是より

い、のがほしい亭主イヤ最う皆かやうな物でお坐り升彌次ム、そんなら大事にままつて置な誰ぞか買ひやしやうわつちやアいつち初手見えておゐた。此三分切を手拭丈切てくんなせへ亭主へイ左様かなト肝を潰し二尺五寸切て出せとんだやつらだそでにいひ三太郎にしようとしやアグつた。肝をつぶまなハ、時に大分道くさをした。ちと急めでやり掛よふト是より道を早め行程も早

旅人のいそげば汗に鳴海瀉。こ、も絞りの名物なれば

斯よみ興じて田ばた橋を打渡り笠寺観音堂よ至る。笠をいたゞき賜ふ木像なる故に此名有どかや

執着は涙の雨ぬれじとや。笠をめぐりたる観音の像

夫より戸部村山崎橋仙人塚を打過。やうやく宮の宿に到りし頃。早日暮前よて。棒鼻より家毎も客をとむる出女の聲轟し。あなた方アお泊じやおませんか。お湯もちんと涌ておまど。お合客のおません。お泊りなされませく。彌次泊り何方しよう。

鍛屋か。瓢たん屋か 北八向ふの内何だ鍵屋か 女モシお泊りかな 北八ヲイ泊やせう

旅籠のいくらだ 女ヲホ、くくくようおまど。お泊りなさんせ 北八何だいひか。只で泊るか 彌次虫れい、ト笠を取て這お湯をあげうず。お足がよぞれて。なけららや直に

お風呂へお召なされませト荷物而坐敷へ運ぶ。此内彌次郎北お茶あがりませ 按摩お療治をなされませぬか 北八療治もしてへが。マア腹がへつた 彌次うごんでも喰て

さや。こ、の名物だ あんま、左様なら後よ來ませずト立て行跡より二三人連ハイお泊でお座り升か是の常驛の御様子。手水鉢建立お心ざしをお頼み申升 彌次ハイ北八。そけへ上てくりや 北八是の少しながらト錢八文出してやると帳又ハイ私ハ十六部で石碑を建升。お心持次第お施主よ。つかつせへて下されませ 彌次何だ石塔

れ施主に附。いめいまゝの事を云て來る。ソレ持て行なせへト同八文をうり出してやる。入替りて此内れ亭主ひよくり 彌次エ、又八文か貴様の何の建立だ 亭主イヤ明日のお船で。お坐り升顔を出せば

か。又佐屋廻をなされ升か 北八直よ愛から船よしやせう 彌次船の好が。おいらアど

○ 仇討

をほめて呉た替りよ。是からわつちももんでもらをふ 彌次 ドレそんなら這入てこよ
 ふト彌次郎の湯入入行。跡よあんま 時に旦那方のちと常宿はお鶴でもお呼なさ
 れ北八 イヤ夫よりかア。隣のの三味この、娘が何人だの あんま あれは二三日前か
 ら爰の内よ泊りて居る替女でお升が。能聲だなもし。志かしきんだわしがじんくを
 旦那方へ聞せたい 北八 コリヤ善ろふ。やらかしねへ あんま 其替りわしもほめてがな
 けらにや。張合がない。唄ひしまつたら旦那ほめて下さるかな 北八 チャット承知く
 わんま ドレやりからかさふ ト北八がつむりをもみながら あんま シヤンくエ、
 く酔たくく 五勺の酒よ壺合呑だら様またよかる ト唄ひさして北八が耳中の
 こいつがさい前。我が頭を足げよひろいだのはつけ野郎め。かつたい野郎め。うぬがよ
 な野郎のろくでん行まい揚くの果よの首でも釣じやる ト云さして耳は穴よりゆび
 あんま やどさのせく 北八耳の穴をふさがれてうぬが 北八 ヤンヤく あんま シヤ
 くシヤンく ト拍子に係つて北八が頭をびし面白へく あんま 最一ツやろうか

○ 色無
 眼兩個
 替女何ッ
 擇

○ 是豆 盗人

いな 北八 イヤもう御免だ頭がたまらぬ あんま ハ、くゝゑろふ面白かつた 此内彌次
 り揚り此の様 彌次 和尙もつとやらかしねへ 北八 イヤおいらのもう湯入這入てこよ
 子ちらと見て トいひそて風呂場へ行。あんまの暇乞して歸ると。宿の
 うあんまさん。最ういひによ 女床を取来り布團を敷て勝手へ行彌次郎の早其儘ね
 かける此内北八風 チャ彌次さんもう寝掛たれ。時よお前へ隣り座敷のしろ物を見た
 呂場より歸り来て 彌次 替女なら眼があるめへ 北八 眼のねへダ。まんざらじ
 かとんだうつくしい替女だ 替女なら眼があるめへ 北八 眼のねへダ。まんざらじ
 やアねへ。今湯から揚つてくる時。一人の替女めが手水場よまごついて居たから小
 當りにわたつて置た。中くやばでねへしろ物よ 彌次 ドレく ト這起て乗出し襖
 ハ、ア後ろ姿の中くいきな風俗だコリヤア。此ま、でいおかれぬはへ 北八 イヤそ
 ういならぬ トい、つ、夜着を引かぶり心の内にい。おのれ今に這掛てやろうし。わ
 二人の替女も寝た様子夜も コナン 彌次郎そつとおき上り見れば北八の本どら
 志んくくと更渡り後夜の鐘 彌次郎そつとおき上り見れば北八の本どら
 襖をそつと明て隣坐敷へ這入見れば。替女二人の前後もしらす寝入な。彌次郎そ
 ぜのふとあるを這入らんとせしよ。さそがの眼のみゑぬ物とて用心きびしく風呂敷
 包を両手にあつかかり抱て寝て居るゆゑ是がじやまよ成て這入よく、彌次郎そろく
 此風呂敷包を取のけようとする替女目を覺し片手に包を抱へ片手よて彌次が手を

くつとござせぬ盗人よ〜お宿の衆〜
 捕へて〜ござせぬ盗人よ〜お宿の衆〜
 女が手をた、さばなして早々よこなたの座敷へ歸り。夜着をかぶりそしらぬふりして寝て入。北八のとくより目を覺しくつ〜と笑て居ると此内勝手より亭主かけつけ替女様とさつせへました。ござせぬわしが此抱て居る包をいんま。たれやらとろふと〜
 ありました。雨戸でも明て有か見てくれなされ 亭主 イヤ何所明てのいかりませぬ
 ござせぬ 夫でもいんまは盗人の何所から來おりましたらうな 亭主 ハ、ア襖が明て有モシ
 〳〵お隣のお客様方およつて御座らつせるか 彌次 ア、ウ、ムニヤ〜 亭主 ハ、アこ
 、よ落て有の何じヤ。イヤふんどしじやそらうな。モシお客様方は是のあなた方れで
 お座りませんか 〳〵大きな壁せるよ。彌次郎のはつと思ひ。そつと頭を上げて見れば。わ
 故おかしさもおかしく。さすがおれがのだ共云はれ 何だへそらうしい。ふんどし
 ぞもじ〜として居ると北八態といち悪くおき上り 〳〵何だへそらうしい。ふんどし
 が落て有どのドレ〜。夫かコリヤ彌次さんお前へのふんどしじやアねへか 彌次
 、なさないとをぬかしやアがる 〳〵北八が夜着の袖を引。亭主もさてる。イヤ最ふ
 旅れとでおざり升から。おたがひよお氣を付て御用心なさるがよい。替女様。もうお

休なされ ござせぬきみがわる〜て寝つかれませぬ。よふびて行て下さりませ 亭主 左様な
 ら 〳〵そこら立廻して出て行。彌次郎そつと手をのはい〜
 てふんどしをたぐり寄を北八おかしく吹出しながら
 替女どのに思ひ込し。是もまた戀も目のなき人よこそあれ
 すでよ夜もいたく更渡れば皆〜ようやく一すゐの夢を結わかつきの風樹木をなら
 し浪れ音枕に響て。つき出と鐘よおどろき目覺て見れば。早明方の烏ガア〜 馬れ
 な ヒイン〜 長持人 坂ハなア時々ナアエ鈴鹿のくもる ナアレ ぞつこひ〜 船出
 を呼 舟が出るヤアイ〜 此時宿屋の女お モシいんま一番舟でお升。御膳を上げま
 ぶ 彌次 たい〜北八サアおきや 〳〵二人のおき出て手水遣ふ内膳も お支度のよう
 しよう。彌次 たい〜北八サアおきや 〳〵二人のおき出て手水遣ふ内膳も お支度のよう
 おざりますか。船場へ御案内致しませよ 北八 夫ハ御苦勞サア彌次さん出掛やせう
 こ〜に支度志て表の方 御機嫌よう又お下りに 彌次 アイお世話成やした 〳〵暇乞
 へ出掛る宿れ女房。女 〳〵御機嫌よう又お下りに 彌次 アイお世話成やした 〳〵暇乞
 場へ行く亭主 船頭衆お二人様じや頼み升ぞ 彌次 時よ忘れた御亭主さん夕べお約束の
 爰迄送りやり 〳〵船頭衆お二人様じや頼み升ぞ 彌次 時よ忘れた御亭主さん夕べお約束の
 彼小便の竹の筒の 亭主 ホンニ。ちんときらして置ましたに。ドリヤ取て参り〜よかい

○狂歌

以テ換ニ笑

評ニ

おほ水れ

出るはづ

彌次のう

のたくり

いでし此

渡し舟

ト亭主の彼竹の筒を取歸る此渡し舟七里の海上一人前四十五文宛其外駄荷乗物皆夫ぞれに賃錢を拂ひ船に乗る此時亭主竹の筒を取て來たりサア様そけへなげ升ぞ北八何だ火吹竹か彌次是をわてがつてナとらやらかすのだ好くイヤ御亭主さん大きよお世話サア是て大丈夫だ。くくく

おれづから祈らず迎も神のみまそ。宮の渡しし浪風もなし

斯く祝しければ乗合皆く勇み立やかて船を乗出して順風帆を揚げ海上を走る事

矢の如くされど浪平かなれば船中思ひくの雑談あわこの掛けがねもはづる、斗

り高聲に笑ひのしり行程に商賣船。いくそうとなく漕違ひて酒のまつせんかいな

名物蒲焼の焼立。團子よひかな。なら漬で飯くいつせんかいなく彌次ア、能寝たは。

いつの間にやら。ごうぎに來たぞ。時よ小便がもるようだト宿屋の亭主ぐくれたる

前へあてがい小便をとる。此竹の筒の火吹竹の如く先の方に穴を明たるなれば舟の

ゆびんれ様と思ひ。竹の筒へ小便をしこみて跡で打明る事と心得舟の中まで直し竹

の筒へまこみければ先の穴より小便が流出て舟中小便だらけとなり乗合皆々肝をつ

し。コリヤく何トヤひな。水がゑろろ流れる乗合たれか土瓶を打。こかゑたそうな。

ツレく煙草入も紙入も。びつしよりじや。コリヤたまらんハ。ヤアお前小便じやな

トとがめられて彌次郎竹の筒をか北八エ、彌次さんどうした物だ。お目へ小便をと

るなら。そけへ揚つて竹の筒の先のほうを。海へ出して仕込れたのな。めつそうな舟

の中が小便だらけになつた。エ、きたなへく彌次おれん又こ、でし込で跡でぶち

まけるのかと思つた乗合イヤ早とやうもない。コリヤア。くさくてならんはい。船頭

衆く最ふ敷物は外にはなるか船頭だれじやぞい。小便をいたのは。舟玉様がけが

れる早ふコレふかつせいな北八エ、氣れきかねへ人だ船頭エ、ソレまだ竹れ筒から

落る。夫も投してしまはつせへな彌次イヤ是はそつちへやるふ。火吹竹になるふか

ら北八エ、お前へが小便した物をナニ火吹竹は成物だ。早く拭なせへ。らちれあかぬ

トいぢめられて彌次郎ふんぞまはづしそこらをつ

く内。北八のうとべりをひつくり返して敷直しサアく是でいる。どなたもおす

はりなせへ彌次コリヤ皆様御免なせへ。とんだばんくるはせを致しやしたトつあま

げかへりて。そこら取かた付る。乗合皆くよが笑し乗合きたぞく小便よこそ。ぬ

○五編

れたれ。船はつ、がなく桑名へきた目出たい。ト皆く是より上りて此宿
 によるこびの酒汲かはしぬ

宮重大根れ。太しく建し宮柱は。風呂吹の熱田の神の慈眼と。七里の渡し浪ゆたか
 んして來往れ渡舟。なんなく桑名よ着たる。悦びれ餘り。名物の焼蛤に酒汲替して。
 かの彌次郎兵衛喜多八なるもの頓て爰を立出。たどり行程よ。此頃旅人のうたふを
 聞け。流行唄時雨蛤土産よさんせ。宮のお龜が情所ヤレコリヤよヲしくよー馬
 士コレ旦那衆戻り馬。れらんせんか彌次よヲしよし馬士安ひよ。たんだ百五十でやら
 まいか彌次よヲしよし北八せうろく四文で乗べいが馬士其様よヲせよせ馬ヒイ
 長持人足舟のナア追手帆掛て走るナンエ早くサア熱田泊りたやナン。アエ
 八兵衛どうした馬でも呑だか。何だかはらぬアどつこぬ。北八何と彌次さん何も
 なぐさみだに。あうまようじやアないか。おめへの荷物とわまがのを一ツ所よして一
 人が引かついで。半日替りよ旦那と家來れ。まうちいせうだらう彌次コリヤ面白へ

夫よかるふ先己らから旦那を始めるぞ北
 八そりやアい、が今日は最ふ八ッだから
 七ツ替りにーやせう。勿論旦那と供のあ
 じらひは。たぐひよ番くるいせなしよや
 らかしやせうぜ彌次しれたとよト云つ
 りよ竹壹本をさいかくし。彌次郎が北八
 荷物と北八が包を兩方に縛り付て
 先づ年役にお前へ旦那よ。おいらは上下
 と云もので出掛よふ。ナントよつばと氣
 がきひて居るだらうト跡から荷を北八
 モン旦那へ彌次何だ北八能天氣で御坐り
 升彌次ナ、サ風がなぎで暖たかだ北八左
 様で御座り升トかかりにまじうれ。如く打
 かたりつ、。行程よ早くも



○彌次
之白粉
好今不
始温飢
粉尙愛
之ヲ

大福村。安中村を打過て。町屋川よ
差か、れ、彌次郎兵衛取あへず
旅人を茶屋の暖簾よ招かせて。登り下りを待屋川かな
斯打興じて。名尾村おふけ村またどり着。此邊りも蛤の名物旅人を見掛て火鉢の
灰をあふぎ。立。女お這入なさりませ。諸白もれ飯も御座りませ。お支度なさ
りませ。駕いかまひかひな。是から二里半は長丁場じや。安うして召ぬか
い彌次イヤ駕の入らぬ。跡は親方旦那を乗せ申して下んせ。戻りじや。やすめ。北八
旦那。ねひろめがれすさだ。駕そふ云と。モシ旦那安うしてやらまらぬかひな。彌次
安くてのいやだ。高くやるなら乗やせう。駕。そしたら高うして三百いただきましよか
いな。彌次いやだ。もちつと高くやらねへか。駕。ハアまんだ安ぬなら三百五十で彌
次。壹貫五百斗なら乗てやろふが。駕。エ、めつそふな。わしとも、商賣冥利。そなるに。
やつどの。いた、かれませぬ。せめて五百で召て下んせんか。彌次。夫でも安ぬから
いやだ。駕。ナアニ安ぬこんでいあらまい。そしたら別れよ七百くだんせ。彌次イヤ。

○此邊
安房皆
嫉妬何

面倒だ。何か。壹貫五百よりまからぬ。駕。はて。儲こまつたもんじや。夫よりち
つともまからまいか。彌次。まからぬ。駕。エ、何の事じや。駕かきの方から。直下る
と云いめづらし。ま、よ棒組壹貫五百でやらまらぬかい。サア旦那召ませ。彌次
夫で好か高く乗てやる替りに酒手をこつちへ貰はよやならぬ。合點か。駕。上ませ
ども。彌次。そんなら先へ行て壹貫四百五十文こつちへ酒手よ差引て。残五十の駕賃だ。が
夫で承知か。駕。エ、そんなこんで。あら。とひやうもない。彌次。そこで先縁切だ
ハ、北八。こいつの旦那が出来た。旅人を乗るつもりで。駕かきの高直段。かつがれ。計利
斯て朝飼川松寺を打過。富田は建場。至りけるに。爰は殊な焼蛤の名物。兩側に
茶屋軒を並べ往來と呼立る聲。引れて。茶屋よ立寄腰を掛ると。女。ね早やう御坐りま
した。ト茶をニッ汲て来る。彌次郎へ差出す。彌次郎。旦那の。北八。支度。好か。北八
束なれば。供。宜しう御坐りませう。コレ女中。れ飯を二膳出して。くん。女。ハイ。蛤
氣どりにて。

焼蛤也
事見老
子

でね上りなされやそか 彌次イヤ箸で喰やせう 女チホ、ト箱よりた。いろいろの様
笠をつかみ込め 彌次 コッ酒の好のが有かの。しかー諸白でいなくて片白はこまる
をぎ立て焼く内 彌次 江戸じやア厚味へ物の喰飽して居る體だから。道中の物い。ねつから喰ぬ馬
乗バ浮雲し駕の頭がつかへる。店の者共がね宿れ駕をね釣らせなさるがよふ。御坐
り升と。言居たが。成程そうそれバよかつた。ぶせうして乗ば乗もの。もふく道
中駕より。あきはてた。北八 是からあるめて行ふ善草履があらバ買てくりや。はき
つけぬ草鞋でコレ見や。足中が豆だらけな成た 北八 ほんまなア今日初て草鞋を。ね
はきなさつたなら古ひわかざれが再發した 彌次 どんだとを云是のあんまり足が。や
はらかたから草鞋の紐が喰へ込だのだ。ヤ時よ 蛤は 女ハイ只今上ゲ升 ト大皿に焼
さねて出し飯を二 北八 コッ彌次さん見なせへ色男の違つたもんだらう。コレく
隠持来てとえる 彌次 此の娘が前への飯の些と盛てらるがれこの通り山盛。餓鬼道れ一里塚と。云も
んだ。ア、厚味く 彌次 へべらばうめアノ娘が杓子當りの能のを。なれたれたと

うれしがるもねかかしい。ソリヤア手めへを。やそくそるのだから 北八 なせく 彌次
べて此街道では上下の者や俱の者への飯を山盛にして出とと云とだ。夫だから誰が
目にもねれば旦那手めへはね供と見へるから 北八 ハアそうか。いめへましい 彌次
、、蛤を持とくんなせへ 女ハイ ト又焼立の蛤大 彌次 ね前の蛤ならなを
味かるふ ト女の尻をち 女チホ、旦那様い。ようはたへてじや 北八 ねれもはた
へよふ ト同く尻をつめ 女 コレよさんせすかぬ人さんじや 北八 ぶふでもねいらをば
安くしやアがる たり寺の鐘かコチン ト女中あれは何時だへ 女 最ふ七ツで
御座り升 北八 一めたく約束の通り。是からおれが旦那様だコリヤ 彌次 郎兵衛
おれは最ふ馬にも駕にも乗あきた。是からそろくひろみませう。い、草履を買て
来やれ。はき付ぬ草鞋でコレ見や。豆中が足だらけだ 彌次 馬鹿を云。成程手めへは
足だらけだ。一つの足がいくつよも割て居るから 北八 イヤ旦那向つて手前へとは
何の事だ。此荷物もそつちよやろふ 彌次 ハテ現金な男だ。マアそつちよ置やれ 北八

○ 自_レ蛤_レ
方_レ入_レニ于_レ
懐_ニ彌_次
雖_レ貝_ト悦_ヒ
可_レ知_ル



イヤそらうのならぬ
トつきのけるを。彌次
に。焼蛤が盛てある皿をひつくり
に。焼蛤が彌次郎兵衛れふど
いとば 彌次アツ、
いると 彌次アツ、
てアツ、
ト懐中へ手
撮北ハアツ、
ト取落せば。蛤臍れ下へ
股引の上から金王 彌次
と蛤を一所又撮む 彌次
ア、アツ、
コ
リヤどうぞる。金玉がこけらア
ト云うち
股引の前れ合せ目を廣げ 北ハ
るど蛤はぼつたりと落る 北ハ
先の御安産でお目でたい 彌次
志やれ所じ
やアねへ。とんだめあつた女
おかけがは
御坐りませぬか 彌次
けがはせぬが。また
腹の内がびりくぞる 北ハ

膏薬のまだ入らぬども蛤の焼どに附てよむたはれ歌

夫より此所を立出。初村八幡を打過。七ツ家わくら川又至りし頃。四日市は宿引出
向ひて是のいはよう御座り升私しお宿をお頼み申上 彌次 わつちらア帯屋へ行やと
宿引 イヤ今夕の大名様。お二頭お泊て帯屋は両家共。お差合ひで御坐り升から。私
方よお泊下さりませ。ト云のうそ也御小身様れお泊で下宿の。わづかなれ共夫を云た
と思 彌次 そんなら貴様の所のいくらで泊る 宿引 ハイ夫のいかや共 彌次 夕への宮
の斧屋よ泊つたが。とんだ町寧ました。百五十で燭臺を附て飯を喰せるが。そして酒
も菓子も出したから。コリヤアだまつても居られめ。と別茶代を二百遣るつもり
の所。やつ張やらなんだから大きき安かつた。貴様の所も其つもりで馳走とるがい、
宿引 かしてまりました。ト段々咄ながら打連て行ともなしに四 日市は御坐り升。
コレお泊様じや 宿の女房 おはやうお着なさいました。ト挨拶の内。二人の草鞋をときさな
がら見廻せ。いたつてむさくろ

敷宿にて入口よそ、けかへつて横いぐみた。亭主「今晚の私し方も込合ました。お氣
 る膳棚とこわれ掛りしへつづいのある内なり」
 の毒なぐら奥のお客と御一所なされて下さりませ。彌次「せいぶんよしさ。女房左様な
 ら是へ」ト案内して奥の間へ連彌次「御免なさい。田舎者お早う御座らつせへた。北八ア
 行く合宿田舎者二人有」宿女「直にお風呂召ませ。御案内致しませう。北八ドリヤお先へ
 、草臥た。えいとこな」
 参ろふ。ト手拭を提て湯み行く此内十四。お煙草の入ませぬか。楊枝のはみがさお鼻紙
 五の前髪風呂敷包の箱を提て。久しかぶりて吉田の大竹へ。れたり込でお山も薄柄は煙
 の宜しう御座り升か。田舎者「四文粉はあらまいか。商人ヤイ夫の御座
 草貫ひかつたが。皆吸てまもふた。今一人の」
 りませぬ。是をわかつて御らうじませ。田舎者「ドレ〜ハツ〜〜こりやねからたわ
 いがない。こつちらの〜。せうじやい」トさせるよつめ。商人「夫がよふ御座りませう
 田舎「イヤ是もねから火か附ぬ見やんせ吸ておる内消らかいた。商人「ソレあなたの膝も
 もぬてをり升。田舎「ヤアコリヤ〜。大事は着物を燃らかいたブツ〜。イヤこなひも膝
 の焦る煙草のいらない持いかんせ。商人「ハイ左様なら」ト小言ながら出て。北八「サア
 行北八湯より揚りて」

彌次さん湯に這入らねへか。宿女「あなたお召なさりませ。彌次「イヤ大分あだなやつらが
 ちらつくぜ」北八「小」今のやつを風呂場で。ちよひと契つて置の早かるよ。彌次「ソリヤ
 ほんとうよか。せうして〜。北八「おれが湯み入て居る所へおぬるくは御坐りませぬ
 かど。云てうせれたから。直よそこて約束した。まだ一人い、年増が見へるからお
 めへ湯に入て侍て居なせへ。大方そまへ来るよの違へぬへから。そこで口を掛る
 がい、彌次「承知〜。ドレ入て来やせう」ト彌次郎の湯に「ハイ焼酎の入ませぬか。白
 酒わがりませぬか。北八「チット其焼酎を少しくんな。チト、〜よし〜」ト茶碗よつ
 拂ひかの焼酎「よし〜。是で草臥が安まるだろふ。おなたも御免なさい。ヤアえいと
 を足よ吹掛」ト横よ寝掛る。此内彌次郎の湯に入て女のくるのを待てとめ〜。一向よこぞ。
 こな「手足のゆびを一本〜に洗ひてまばらくの内。待ばらけと成り餘り長湯をして
 湯げよ上り。風呂場のはめよもたれて。ぐにやりと成居る。北八「ヤア〜。彌次
 余り彌次郎が長湯なるゆ〜。風呂場へ覗きに來たり此体を見て。彌次「ヤア〜。彌次
 さんせふした〜。コリヤ大へんだ」ト彌次郎が顔「彌次さん〜。彌次「チ、〜。ウ、
 〜〜。北八「能か〜。せうしたのだ〜。彌次「とうした所か手めへおれを。えらいめ

よ合志た 北八 なぜ〜 彌次 湯入ながら最ふ女が来るか〜と思てあんまり長湯を
 志たから 北八 夫で湯氣に揚つたかハ、〜ちゑのねへ咄〜だ 彌次 手めへのおかげで
 まだ足がひよろ〜する 北八 ハ、〜〜〜あいつのおかしい。サア立な〜トやう〜
 せ。北八が肩に引掛け座敷へ連て歸る 彌次 ア、〜〜今少しはつきり〜た 北八 おめへ
 ど。其ま、たをれてさも力なさそうに
 も。とんだ者だ、かげんよあがればい、よ 彌次 イヤおれも手めへの云たどほり大
 方女めが。来るだろふと待た程は向ふの流しは彼年増ら〜いやつが。何か洗つて居
 るから。コレ脊中を流して下せへと云たら。ハイト云て六千ばかりの婆、アめが。
 たわしを持って来やアがつてお脊中を洗ひませうかど。ぬかしやアがる 北八 こいつの
 い、ト夢中になりぬはらばつていながら。足のゆびにて跡の方よぬころんで居る田
 舎者の耳を引張たり何かして。もちやそびよる此田舎者とんだ氣のい、男よ
 へ頭をよけると 北八 夫からどうした 彌次 聞てくれ。おれもあんまりどう腹だか
 ら。いま〜しい婆、アめだ。たわしを持ってどうしやアがると云たら。ハイ〜と
 ぬかして引込だが。頼て又庖丁の折たのを持ってうしやアがつた。是でお脊中の垢を

こそげおとして上げませうかど。おれを鍋か釜のように思つていやアがるそうない
 ま〜しい 北八 ハ、〜〜こいつのでかした〜ト夢中になつて又田舎者の頭を足よ
 へ兼て北八 田舎 コレ〜最前からだまつておれば。なんぜ此足でわ〜が耳をなぶ
 が足を取て 北八心付て 北八 是の御免なせへ 田舎 インニヤ情御免では承知な
 り者よさつせへた 夫もこなさんぐ夢中よならつせへて咄しつせる。手とぶりにやアあ
 らまいわい。夫もこなさんぐ夢中よならつせへて咄しつせる。手とぶりにやアあ
 らまいとでもないが。こつちで頭を除ようとするど。又足で探回いてハ。なぶり
 ものよさつせる。なんぜ人の頭ア土足よ。つ、掛さつへせた。そまない〜 彌次
 ヲ
 リヤお氣の毒なとだ御免なせへ。此ようよお合宿するも他生の縁とやら。どうぞ了
 簡してやつて下さりませ 田舎 こんたが。と云はつせりやア。聞かまい者でもないが。
 あんまり人を馬鹿にさつせるから 北八 イヤ最ふ生酔だから。堪にしてくんなせへ 田
 舎 イヤまんだ。こなさんぐわしどもを馬鹿よさつせる。最前から見てるに酒も呑な
 いで生酔ひとは猶しやうちならまいわい 北八 はてわつちは。酒を呑やせぬが。此足

○ 一 休
問 答 曰
上 足 曰
下 戸 足
如 何

が生酔だから 田舎ナニ足が酒を呑もんか。馬鹿アつくさつせるな 北八 おめへ大分あつく成の。足が酔たと云は先刻焼酎を吹掛たから。夫よ此足めが酔くさつて。ソレ御らうじろ。ひよろりく。アレまだお前への頭みからかをふとする。コリヤく
田舎 本よこなさんの足は悪い酒じや 北八 左様さ足は下戸の足が能う御座りやすわつちのままとにこまりはてる 田舎 そんなら能う御座る。最ふ寐まらまいか。女中く寐床ろを頼升ト此内女きたり夫く床を取寝かそと田舎者二人は。そこへころげ當る文句も様々有ぞ。此所と飯時の洒浴のぐつとはしよ。彌次郎北八此女共よ小る女共は床を取ていまい勝手へ行と彌次郎小聲に成て 北八 實に手めへ先刻の女と約束をしたが 北八 したたとよ然しこつちへ来ぬつもりだ。此つぎの間の壁をつたわつて行と。いさ當つた所の襖をあける。そこに寝て居ると云居たから。今に行ねばならぬ 彌次 おれが先へ行てやらう 北八 そねまずと。早くねなせへト後ろを振回る。彌次郎も北八がトやまをして遣らんと。寐人し振して考へて居る内二人共。旅づかれよや思はずそやくとト寐人し。しはらくすると。彌次郎ふと目を覺し見ればあんどろ消て真くらがり。あたりもひつそり。しづまりたるに。自分はよしとぬけがけし北八に鼻あかせんと。そつと起き立。さし足にて次の間も出。兼て聞置たる通。



さぐりく壁をつたひて行内。彌次郎兵衛余りに手を上へのばしたるまや。釣たる柵板よ手がつかへると。さうしたはづみやら。かたりといつて柵がはずれたると見て彌次郎大いこのつはへんちさだ。あんなまりおれが手をのばしたから柵板がはづれたそうな。手をはなしたら。落るであろふし。何かがらくたが。こ玉あけてある様子落たら皆なが目を覺たるふ。こいつの難義な目に合たト兩手を柵よて居てもねからつまらぞ。手をはなせば柵が落る柵一ツで塞は成る志。コリヤなさけなる目よ合たさうぞ仕様の無いかと。立はだかつて考て居内。斯く共知ず北八も目を覺しおき出。是も段々壁をつたひくる様を彌次郎。夫と透し見て小聲より成 北八か 北八 誰だ彌次さんだの彌

次 コリヤ静に早くこゝへ来てくれ 北八 何だ 彌次 是を鳥渡持てくれ。こゝだ
 北八 ドレ 次郎へそつと手をはなれ北八は持せて脇へはづしたるに北八お
 ころ コリヤ 彌次さんどうするのだ ト手をはなしそうよる 北八 ヤアヤア コ
 リヤ情なるめに合せる コレ 彌次さん 何所へ行ア、手がだるく成コリヤ最ふどう
 する トらろ 壁をつたひて勝手の方へ出るよ。底の向見ゆる有明の火影のかに透志
 て。見ればかの行常の襖に傍よ一人寐て居る者あるゆゑ。儲ある北八が約束の代物
 志めこれ兎といきなりに手を遣てさぐり見れば。こはいかに石の如くひへこをり志
 人たをれ居たり。さながら生たる者共見へず。是れふ志と。こは 撫廻せば荒
 こもよくるみて有也 彌次郎はつとおどろきよはかき氣みが悪く成て。ぐたぐたと
 ふるの出しやう 北八が居る 彌次 北八まだそこよか 北八 ナ、彌次さんねめ
 所へ這戻りはの根も合ぬ慄へ聲よて 彌次 イヤそこ所ろではないわそこよ死だ者へ捕が掛
 へ何所へ行た。コウ鳥渡こゝへ 彌次 有から最ふ とうそ氣みの悪るひ内だ 北八 ヤ、とんだとを云ふ 彌次 ナコサ本どう
 有から最ふ とうそ氣みの悪るひ内だ 北八 ヤ、とんだとを云ふ 彌次 ナコサ本どう
 よ。アレあそこよア、とんだ内よ泊り合せたねろしや トらろ 彌次 北八 是
 々くこれをして、よ置てどうするエ、夫にとんだとを云アがつて。どうやら氣みが

○石佛
 持込込色
 氣所謂ハ
 地藏馬
 者

悪く成たコリヤたまらぬ トがた 振ゆる拍子に。手がゆるみて上の棚ぐくわ
 ろたへて戸まをひをし。一向わからずまごつく内。此物音に勝手より亭主れ聲と
 してわんどう提て出くる様子。奥の間より田舎者が出てくるていゆる。愈々うる
 たへ。見せの方へ這出る。手元に狐一枚有しをさいはい引かぶり ヤア コリ
 て息をころしかみあると。亭主あかりを持出てきをもつぶし ヤア コリ
 ヤなんぜ棚が落た。膳箱も何もちりこくたいに成た トそこら取片付る内。何事やら
 て ヤレゑら音がせると思ふた。道理こそ。コリヤ地藏様れ傍よ迄箱共が飛ちつて
 かるが。ヤアヤア お鼻が打かけてしもうた 今一人の田舎もの ドリヤ 本
 に地藏様の鼻ア。なくならかひた。そこらよやなめか。イヤこゝよ寝て居るの。だれ
 じやい ト狐をまくれば北八のはつと斗り。顔を上げて見にそばよのこも包し石地藏
 八を ヤアこなさん。あちへ泊らせへたお客じやないか。夫よ今時分。なんぜ此様
 見て なる所に。コリヤ合點がいかんわい。どうじややら。あなさんたちのなりとぶり。
 うさん臭ると思ひれたが。もしや護摩の灰じやなめか。何ぞまだ。しよしめつるつも
 りか。有様云つせへ 田舎 イヤ夫斗しじや御座らなる。大方こなさんが。此棚を落し

たもんで。なんせ地藏様のね鼻ア打かいたコリヤわしどもが村で今度建立せる。地藏様じゃ。きんのふ石屋殿から請取て翌日の早々長澤寺様へ納めよやならぬがね鼻



てうめんの旅人だ 田舎 インチ。そうじゃあらまい。又夫でなければやア。なんせ今時分そこは寝て居さつせへた 北八 イヤ是のウ手水も行どつて 亭主 戯けたとをつく

が打かけての持て行れぬ。元の通りまどわつせへ。是の近在の人々村のね寺は納所ねそなはりしゆゑ。今宵の爰は泊る。と見へたり亭主彌々やつきとなり。ね地藏様のね鼻もね鼻じゃが。ね前方にね荷物何ぞなくなりのせないか。どうでもがてんれいかぬやつらトや。有様よ云れりまいか 北八 イヤわしらそんな者じゃアねへ。めつたなとを云なさんな。しらす

さまい。手水場は座敷の様先にある物を定めし。宵もいいたであるよ。そないな間似合の喰せんわい 北八 そう云れちやア。わつちも面目なるが恥を云よやア。理が聞へぬ。有体に云やせう 亭主 ナ、サ。云るでどうせるもんじゃ 北八 イヤどうもねはづかしいが。今頃わつちがこゝにまど附てれたと。云ふわけの。ツイ夜這にきて此柵の落たに。うろたへたので御座りやぞ 田舎 ナ、夜這よきた。イヤ早こなさんへたわけ者じゃ。何所の國よか石地藏様の所へ夜這に來てどうせる積りじゃ 亭主 いへ。云ば云程ろくなとはぬかしれたらぬ 北八 コリヤとんだ災難に合とだ彌次三〜ト呼び立る。先の立聞して。腹とじをよりの。コリヤア何方もね氣の氣な。ありやアわつちが請合。うたりけるが最ふい、時と立出。了簡して遣てくんせへ。又地藏様の鼻とやらがかけたと云なざるが。どうぞわつちも面じて跡では何共致しやせう。ト色く茶らくら亭主も今の詮方なくさながら悪者共見へぬ手合。ト通の云た者の今のなつとくまで濟しければ。這かけ志地藏の顔も三度等。またかぶりたる首尾れわるさよ

斯即吟の彌次郎兵衛が。狂哥よ各々をどつと笑ひを催ふし。やうくいさくさ納まりけるよぞ。いまだ夜の明るより。程もあらんと各々寐所這入りたるが。志ばらく有て早一番鶏の告げ渡る聲々馬のいななき。表に聞へ彌次郎北八急ぎれき出で支度調へ頓て此宿を立出るとて

やうくと東海道も是から。花の都の四日市なり

夫より。濱田村を打過。赤坂も差掛りたるに。往來殊も賑はま。男女大勢こ、かまあつどお集まりたる何とにや彌次郎兵衛北八も片寄り行つ、ある親仁に向ひて彌次 モシく何で御座りやす 親父 あれ見さつせへ 北八 喧嘩でも御座りやすか 親父 インチ天蓋寺の蛸薬師様が桑名へ開帳に行しやるので。今こ、を通らせるから彌次 ハ、アなるやと向へ見へる。ト此内段々人足繁くなり。講中とおぼま先先にて 講中 なアマアだア 北八 蛸薬師様ア湯でたのじやアねへ生たど見へる 講中 なアマアだア 彌次のぼりを持って行くやつ顔ア見さつし知恵のね顔だぜ 講中 お賽銭

は是へは海の中より芋畑へ出現んし給ふ所の天蓋寺蛸薬師如來御信心の方にお心持次第上さつしやりませう。サアくお心持の能ふ御座り升かな 北八 今朝程の中がさで三膳程たべました 彌次 ソリヤ蛸殿が御座つた。ト此内みずしよ入たる。藥師如蓋寺の和尚。乗物よて來るとこ、かしらに。若侍 お十念。ト云と乗物をあろす。あつまりある婆々喚共十念をねがいけるに。大あばた。若侍 駕れ戸を。引あげれば和尚の湯で蛸れ如き赤ら顔にて。なむあみ 皆々 南無阿彌 和尚 南無阿彌 皆々 南無阿彌 和尚 南無阿彌 和尚 ハアくつしやみ 彌次 皆々 南無阿彌 和尚 南無阿彌 和尚 ト云と皆々十念の跡ゆる。皆々 ハアくつしやみ 和尚小 糞をくらへ 彌次 ハ、と。是も口まねとる事と心得。聲よて 糞をくらへ 彌次 ハ、と。んだ十念だ。アノ和尚のくつ沙彌から長老だ。ハ、講中 なアマアだア 講中 立て行過る彌次郎北八のかかしく跡見送りながら

十念をもふしながらの口慰の。有たら口は風を引せじ
斯よみ捨て打興じ行程よ。早くも追分に至る。此所の茶屋まんぢうの名物あり 茶や女 お休みなさりませ。名物まんぢうの。ぬくといのを上りませ。おぞう煮も御坐



りまアそ 北八ひつぱち 右側みぎがはの娘むすめが美しいの 彌次やじ 銚子ちうしの屋やのち小こぢよくめらも相あひきやうらしい 茶ち屋やは這入こゝろ 女おんなお茶上ちやうじやうりませ 彌次やじ まん中まんぢうも腰こしを掛かる 女おんな今上いまじやうませう 一ひと頓とんてやらかして見みよふ 盆ぼん持もちて來こる此内こゝろ金比羅きんぴら參まゐりて見みへて布子ふしの上うへは白しろき單たんの半はん天てんを引張ひきちがたる男おとこ同どうく此茶屋こゝろは休やすみ煮餅にひを喰く掛かる彌次やじもつと遣やるふか。次郎じやうまん中まんぢうを喰く仕舞しひ 幾位いくばいでも這入こゝろよふだ 北八ひつぱちイヤお前まへへも雨あめ風かぜどらんよ能いかげんよしなせへし 金比羅きんぴら あなた方かたアお江戸えどかな 北八ひつぱち 左様さやうさ 金比羅きんぴら 私わたくしもお江戸えどへ行いつた時とき。本町ほんまちの鳥飼とりかひのまんぢうを掛かとくして廿八にじゅうはち喰くたことご御ご坐まりましたが。又格別かくべつな物ものじや 彌次やじ 鳥飼とりかひ

のわつちららぐ町内まちうちだから。前日まじつ茶受ちやうけに五六拾宛ぶいの喰くやと 金比羅きんぴら 夫おとこのゑらいおとさどや。私わたくしも餅もちぢきで御ごらうじませ。此こゝろぞう羨ねをいさ無志むし五膳ごぜんたべままた 彌次やじ わつちやア今いまこゝのまんぢうを十四五じゅうごも喰くたろうが。まだ其位そのくらゐのいけるだろふ。ねつから喰くたらぬ様やうだへ 金比羅きんぴら イヤ然しかし悪わるあまひ物ものの最もう其様そのやうにの上あがられ升あまい。十四五じゅうごもわがりやア關せきの山やまだ 彌次やじ ナニまだ喰くやと 金比羅きんぴら どう志こゝろてくゝわなた口くちでいそうおつしやるが其様そのやうよの喰くぬ物ものじやて 彌次やじ ナニ喰くぬとが有あるものだ。志こゝろかし費つひだから喰くやせぬが誰たれぞ喰くせると。まだくゝいくらでも這入こゝろやと 金比羅きんぴら コレハ面白おもしろいモシ無妖むしやう乍はなら何なんと私わたくししがお振舞ふるまひ申まをませう。もう夫丈それだけ上あがつて御ごらうじませぬか 彌次やじ 喰くやせう共とも 金比羅きんぴら 若もし上あがらぬどいわたのおたをれじやが能よふ御座ごり升あか 彌次やじ そりやしれたとさ 一ひとつか乗のてまんぢうを取寄とり喰く掛かりしが十斗じゅうとり喰くて跡あとのふふおくびよ出る位くらいな 一ひとつかコリヤたれどおのれ金比羅きんぴら 鼻明はなせてやらんとむりよ押込おしこみ皆喰くて仕舞しふ金比羅きんぴら 參まゐり 一ひとつかコリヤたまらぬゑらいくゝもうく 私わたくしの。かないませぬ 彌次やじ れめへもやらかして見みなせへ。こんなちいさな物もののいくらでも喰くれる 金比羅きんぴら イヤそうは參まゐりませぬ。然しかし私わたくしも餘あま

り残念な。十を斗り喰て見ませう 彌次 ナニ十ヲ位二十喰なせへ。其替り一ツも残さ
 ずくならつたならば。まんぢうの代の勿論外は百文金比羅様へお初穂を上やせう 金
 比羅 そりや有難てんばの皮。道て見ませう トまんぢう廿取寄せ只もじくと見て斗
 十を斗喰て仕舞跡のいやそや顔付よてや ーりめたりけるが頓て喰掛るとぼつりく
 うくと残らる喰て仕舞ふ彌次あてが違ひ コリヤ恐れるく 金比羅 お約束の通饅
 頭代の差引てお初穂の百文下さりませ 彌次 今「やせう。然しあんまり見ごとだから。
 もう二十喰なせへ。今度のお初穂の三百文わけやせう其替り喰ねへど。こつちへ三百
 取つこだがどうだく 金比羅 面白いく何も故徳腹れさける迄道て見ませう 彌次
 アく今度の現錢だ。御前へも貳百をけへ出して置さな ト彌次郎二百文をつき出し
 百文又何を附て取氣になり。よもや。もう喰のれめへと思ひ込で。饅頭をまたく二
 十取り寄せ金比羅へそ、めるやいなや。此度の何のくとなくたちまち二十喰て仕舞
 ひ早くかの三百 金比羅 是の有難い饅頭の代も宜しくお頼申升。ハ、ハ、思ひ掛な
 ゐおさうさ預りました。ハイもるりと足に トお神酒箱を脊なにかひ。跡をも見せ
 て居 北ハ、ハ、大方こんなになろうと思つた 彌次 いま〜い。目に合しやアが

○ 伊勢
 参り預金
 比羅利
 生

つた。初めの百がおしく成て上乘をした。ごう腹な ト此内下の方より駕 旦那方のお
 駕のいらしやりませぬか 彌次 駕所じやアねへ。ゑらるめに合た饅頭は喰つことをし
 て。錢三百只取られた 駕かき ハ、今の金比羅めじやな。てきめはあないな。ふうを
 してあるきあるが。アリヤ大津の釜しと云ゑらる手づま遣ひじやげな。今中も坂の
 したて餅の喰くらで。七十八とやら喰たど見せて錢の手に拂はせ餅をば皆な袂へさ
 らひ込でうせおつたと云こんだが旦那も一盃はめられさつせへたのハ、 此咄の内
 の子供二人饅頭を三ツ四ツ宛手 ーハイ旦那様ぬけ参に御はうしや 北ハ コレ手めへた
 又持て喰ながら此門口に來り ーハイ旦那様ぬけ参に御はうしや 北ハ コレ手めへた
 ちやア其饅頭を誰へ貰た 伊せ参 ーハイコリヤ此跡で金比羅参の人が袂から出してくれ
 ました 彌次 エ、そんならあいつめが。喰らつたど見せやアがつて。おいらをだまく
 らがーやアがつたか。いま〜い。おつかけて打れめそふか 北ハ 能いなおいらも
 神参りだ。かんよして遣りなせへ。皆なこつちが間ぬけだからよ。ハ、ハ、 彌次 夫
 だどつて。あんまり業が羨へかへる 北ハ 夕べの泊でおれをゑらいめよ合した其報い

だと思ひなせへ。やんに能うござらした

盗人又追分なれや餓頭の。あんの外なる初穂とられて

彌次 エ、面白くもねへ。洒落やんな。もしくまんぢうの代にいくらだね女ハイ

残らずめて貳百三十三文で御座り升 彌次 せうとがねへ 〇神風や伊勢と都の分れ道なる。追分

直しよ安く召て下さりませ 彌次 いやく 駕かき 酒手で参りませう 彌次 貴様酒を香か

駕かき ハイ酒のときで一升酒を下さり升 彌次 又酒の香くらしようと思つてか。もう

いやだくサア 北八 出掛よふ 〇神宮道へ這入 〇神風や伊勢と都の分れ道なる。追分

の建場より左りの方の町をはなれて。野道をたどり行程よ。向ふより来る農業の馬

又横乗したる男肝張聲よて頃 見てもぬくとそふなコお方と寝たりや。ナア手織巾

子一枚ねつこにつんぬけた ア、エ 彌次 コウ見さつア、向から乗て来る馬士を

かろして見せよふか 〇脇差をぐつとぬき出して差し。合羽の袖を前の方へ折て刀

行 彌次 ナントどうだく 〇又向より横 〇晩に泊りにヨ。いこととてやめたナアなんぜ行

やらぬ裸でお方と逢りよかへナア、エ 彌次 こいつもおろしてやろうエヘン 馬士 シツ

トにはかにうろ 彌次 北八どうだ奇妙か 北八 二本差を見ると乗打の出来ぬへこ

たア皆しつて居らア 彌次 夫だからおれを侍だと思ひかつて 北八 馬鹿ア云せ跡を見

なせへ侍が二人り参るから 彌次 エ、やんよか 〇トふりかへる拍子 彌次 ハイ是の御免

なさいやし。神戸への最ふとれやと御坐りやと 〇此侍衆の此邊の 〇ツレ向ふは堤か

らずつと空へあがらせると。もふ半道もあらずな 彌次 ハイ有難御座りやと 北八 堤

から空へ上れたア。何のこたは蜷が天じやう。志やアしめへし。ハ、時よ此川の何

と云川だ 橋番 ハイ橋銭が貳文宛出ます。此川の宇都部川と云升 彌次 ソレ貳文宛。四文

よ 抜参りならばぶさをも宇都部川。渡しの銭も假橋にして

夫より高岡川を打渡り。早くも神戸に宿に至る。入口よ寶珠山火除地藏堂有り

安隠に火除地藏の守るらん。爰のあつさも冬は神戸も

○馬士
奈此鬼
鹿毛

斯かくて此宿このしゆくはつ 端はなはれなる茶見ちやみせに寄よて休居やすゆるたるよ 馬士ばし モシお前方まへがたアおまよ乗のつて下くだんせん
 か 彌次やまじ いか様さま戻もどりなら乗のべい 馬士ばし 上野うへの迄まで戻もどる。おまじやわい。荷にを付つけて貳百五十下くだ
 ンせ 北八きたはち 二方にほう荒神あらかみで百五十遣やるべい 馬士ばし 今日けふの粹まじを持もつてこんわいの。爰こゝから上野迄うへのみ
 三里さんりの所ところトヤ。白子しろこへ壹里半いちはん替かりやつて乗のつていかんせ 彌次やまじ 二人ふたり乗のれよア。いやだア
 馬士ばし そしたらお二人ふたり共とも。おまの鞍くらへく、し付つけていこまいか。此この繩なはでしめりや氣遣きづか
 ひのないがな 北八きたはち どんだとを云いふ。夫それじやア煙草たばこも吞のれぬ 彌次やまじ そんなら替かりく乗のふ
 百五十でやるか 馬士ばし ま、よかしや。らへましましよ 馬ト馬ののそうだん出来でて二人ふたりりれ荷に
 彌次やまじ さらアそろく先まへ行いくぞ。ソレ 北八きたはち 右みぎの方ほうへかしぐ様やうだ 馬馬ヒイン 鈴すずの音ねしや
 んくくく 此此内内向向よりきたる男おとこ。紺編こんぺんれせんたくしたる引廻ひきまわしを着きて錢壹貫せんいちくわん斗と
 ヤア主のしやアぬし上野うへのの長太ながたじやないか。今主いまのしがとこへ行いつた戻もどりじや。えいとこて行合いさむら
 た 馬方ばほう ハア權平ごんぺい治様ちさまかいな。コリヤ扱あわしや面目めんぼくがなるがな 權平ごんぺい あろまいく。わ
 る筈はずがなるわい。晦日みそかくくに戻もどす等をを。まんだ。びたせん壹文いちもんもいこさんがな。とふ

一いさるのじや。ソレ聞きはい 馬長ばなが マアくくこちへ來きて下くだんせ 此此馬士ばし借金かきんのとわりと
 の能のき所ところへ伴ばんなる。おのれも 馬士長ばしなが となぬよ業表ごうへいらかいて。くだんとな。マア爰こゝへ
 腰掛こしかけさんせ。イヤそこのねきに。犬いぬの糞くそがある今日けふおいでると。まじ居ゐつたら。
 そうぢして。おこものコリヤく 權平ごんぺい様さまへ茶ちやなど上あんか。酒さけかふてこいと云いふ所ところじや
 だ。こ、は大道中だいどうちゆうで夫それもでけぬくい 北八きたはち コリヤどうする早くやらぬか 馬士ばし ハテせは
 しない。些ちとまたんせ。いんま大事だいじれお客きやくがある。儲たくわマア聞きいて下くだんせ。去年こぞれ冬ふゆか
 ら内うちの噂うわさめが病氣びやうきを煩わづらひおつて。がき共ともは。せちがはれる。雜役ざやくもさへ出でやせん
 者ものを何なんじやると。こうしてくだんせ。四五日四五にちの内うちは。ひゆつとこちからもて參まゐが
 な 權平ごんぺい イヤしやうちならんわい。そないよ云いふても能よふ戻もどしやしよまいがな。大事だいじ
 無なく最なふ三年さんねん越こえ云いふもれ貸かし錢せんじや利りが喰くつて二十貫にじゅうくわん餘あまりと云いふもんじやも
 の。いこぞなく。その替かりわのおまを。取といのかい。ハテまさかれ時ときの。のしごお
 まを渡わたそと証文しやうもん又また書かたじやないか。そーたら云いひ分ぶんありやしよまいがな。サアく

おまの上な旦那様いんま聞んど通りじや
 借銭れ替りよ。受け取つたおまじや。ど
 うぞこ、からありさんせ氣の毒ながら北
 八ハアおいらも先刻みから。じれつ度て
 ならなんだ。ひよんな馬に乗合せた。こ
 つちの不仕合然ーまだ銭は遣らぞ。是迄
 乗たを徳よしてドレかりて行やしやうか
 一トかの權平よ口を取らせて馬
 一からありると馬士かけよつて。モシ旦那
 お前がかりては此お馬を取れる。マア乗
 て居て下んせ。權平 イヤならんわい。馬士ハ
 アどないよもするわいの。旦那をねろし
 ての氣の毒な。サアサア召て下んせ。北八



又乗のかしつかり頼むぞ。ト北八又馬よ乗バ。コリヤ。長太どうしさるれじや旦那
 かりて下んせ。北八 エ、又あるそのか。イヤ貴様たちやアおれをい、ちやうさい棒に
 する。おろしたり。のせたり。足も腰も草臥はてた。權平 夫じやて。わしがおまじや。ど
 ふぞかし。かりて下んせ。北八 エ、面どうだ。ト小むれがきで。馬士長 はて階下さんさ
 ずと能がな。コレ權平様こうして下んせ。わしも途中じや。よしとことかな。せめて
 内へいぬまで待て下んせ。其替り。こ、で此布子を渡そに。權平 そしたらいんでわけ
 つけるか。馬士長 もう能はいサア旦那召ぬかい。北八 ナニ又乗かもふ堪忍してくれ。お
 らア是から歩行て行ふ。何なら少々い銭を出しても乗とアいやだ。馬士長 其云んせ。お
 ど乗て下んせもう能がなサア。ト馬の口を取てぞ、むるゆ。權平 サア約束の布子
 脱まいか。馬士長 イヤそないに云たもれ是も内へいぬまで待て下んせ。權平 イヤおの
 れ。もう了簡ならんわい。サア。旦那又かりて下んせ。北八 エ、此唐人めらア。又
 下りろどぬか。サアがるか。もういやだ。サア早くやらねへか。どうしやアがるの

だ馬士長だんな 旦那だんな そういばやく。かりずと能い 權平けんぺい イヤありぞとゑいと何なんでぬかすト 眞まこと 黒くろなり馬うま取とつきかける所ところを馬士うまつきのけて。馬うまの尻しりを思おもふさまたト ヤアイトくたト き立たると。馬うまのト一ひとさんト掛か出だせは北きた八はち上じやうまで眞まこと青あおになり大おほ聲こゑ揚あげト 權半けんぺん 馬うまをまがしてトならんトチト、イトくトおつかけト らるトごしやうト 大事だいじは馬うまの鞍くら取とり付つても馬うまのやみくもト走るトゆるト北きた八はち飛とりト アト、いたるトくト。だれト 様さまとして鞍くらの繩なはに足あしが引ひ掛かりまトつ逆さかさまに落おつ腰こしの骨ほねを打うつトぞ来てくれト アイト、トト一人ひともがさトてくるトしむでいるト モント旦那だんなおトけがトりなト ゐかなト ドリヤト トト手てを取とりて引ひおトこト内うち。權半けんぺんの馬うまをとらトゑんとトかけぬけるト馬うま北きた 八はちチト、イトまトちやアトがれト。おれをまひトひトとめトに合あしやアトがトつたト トト小言せうごんを云いひトながらトたト さトあトがトりト。腹はらの立たどもト。 詮方せんぽうなく。おつかけんに足腰あしこしがいたみ。やうくト 借かりトの事ことまで踏ふしめくトとろくトとたトどトり行いきトッ、ト 借かりトの事ことをねトふトたトるト馬うまを乗のりト合あせトひんトそトりやトとんとトとトとされトにけりト 行程ゆくほしなく矢場やば瀬村せむらと云いふトにト至いたるト。彌次郎やじらう兵衛べゐの神戶かんとの宿端しゆくはれより先まへ來きたるト。かの 馬うまのいさくさをばト。露つゆしらすト余程よほ先まへなトつたるトをトふしトぎト思おもひトこト、ト待まち合あはせトたり けるトがト。夫それと見みるトよりト彌次やじ ナイトくト北八きたはち其形そのかたちのトどうしたトのだト北八きたはちイヤトもうト咄はなしにもトな

らぬ飛とだめト合あつたトトトさいトぜんトよりトの一ひと五ご一いち十じゆを咄はなしせばト彌次郎やじらうおトかしトくト。さいトはトひト 權五郎ごんごろうならぬトを馬士うまのトいつさんトよト。おつかけてトもく掛取かかけとりの海うみ 夫それより玉垣たまかきを打過うちか。白子しろこれ町まちに至いたり。福徳ふくとく天王てんわうをふト一ひと拜かみトつト。子安こやす觀音くわんおんのトわかトれ道みち にて 風かぜを孕はらむ沖おきの白帆しらほは觀音くわんおんのト加護かごよトやトそトくト海渡うみわたるトらん 此宿このしゆくを過すて磯山いそまと云いふトにト着つきト。此所このところは吹矢ふきやの色いろ々ト飾かけトり付つけたるト。小見世こみよの親父おやぢ往來わうらい を見掛みかけてサアトくトおなトぐトさトみにトやトてかトんせト。外げ道みちは忠臣ちゆうしん藏ざう十一段じゅういちだんつトきト。ソレ吹ふか んせト。ヤレトふかトんせト。お當あてなトさトるとトたトちトまトち替かへトるト。新板しんぱんの上細工のうまづまいの是これじやトくト北 八はちハトアト何なんだ勘平かんぺいおトかトるト。魂こん膽たん夢ゆめのまトくらトイヤトこトらトつトはト。やらトかトして見みよトふト トト吹矢ふきや を入いれトット、引ひカトチトリト トト彌次やじ何なんだトゑトらトいト松茸まつたけがト出でたトコトリトヤトおトかしトいト。ハトハトハトハト、ト與市兵衛いぢ 衛子ゑこゆトゑトのト間まのト夜よのト何なんがト出でるトだトらトうト トトフトット、ト引ひカトチトリト トトガトサトくト トトヒトヤトアト見み越こえ入い道みち ハトハトハトハト、ト向むかふトのト何なんだト。北八きたはち彼方そなたへ寄よりト トト引ひのトけるト拍子はくしは足元あしもとよト トト犬いぬキトヤトアトント トト彌やじ 兼かへト居ゐるト犬いぬの足あしを踏ふむト トトキトヤトアトント



次此畜生めト吹矢れ筒みてくらはし逃
 彌次 アイタ、うぬ打ころそぞトあつか
 みよ。ぞつさりところげ彌次 ころんで
 たそばは落て有の烟草入トひろめ
 も損りいかぬ。こ、に草烟入ダトひろめ
 向側居る子供が糸を引とエ、いま
 烟草入のするくくエ、いま
 くしい一番はぐらかしやアがつた子供
 あほうよワハ、北八 こいつの能業晒し
 だ。サア行やせうト吹矢の錢を拂ひ出掛
 落て有北八ソレ彌次三又拾はぬへか彌
 次 イヤもふ其手は喰ぬ。アレ跡からくる
 親父がひろみおるだろふ。ト行過てふり
 よりくる親父。かきさせるを拾めて彌次
 ふどころに押込さつくと行過る

ハアだましでもなかつたぞうな北八ハ、お前へぞうぎも間が悪いぜト打笑ひ竹筒。
 上野は宿又至るこ、に此邊れ人ど見へ羽織ばつちよて小卒雨ながらあなた方アお
 野郎を供又連たる男跡より來たりて彌次郎兵衛よかけ付
 江戸で御坐り升か彌次アイ左様さかれ男私しの白子の先から。あなた方のお跡よつ
 いて参じたが。道々の御狂詠を承りましておよばせながら。感心致ました面白いと
 で御坐り升彌次 ナニサ。皆出放体で御坐りやぞ男イヤ驚き入りました。先達てお江戸
 の尙左堂俊満先生など當地へおいで、御坐りました彌次 ハア成程左様く男あなた
 の御狂名の彌次 わつちヤア十返舎一九と申やぞ男ハ、ア。御高名受賜はり及びまし
 た。十返舎先生で御座り升か。私しの南瓜の胡麻汁と申升。儲くよい所でお目に
 掛りました。此度の御参宮で御坐り升か彌次 左様さ彼の膝栗毛と申著述れ事につい
 て態々出掛ました胡麻汁いか様われは御妙作で御座り升。是へね越なざる道ぞがら
 も。吉田岡崎名古屋屋邊御連中方。御出會で御座りましたらふ彌次 イヤ東海道の宿々
 残らず立寄所が御座れ共参ると引留られましたして。響應よわひまどるが氣の毒で御坐

るから。皆とく通りは致しました夫ゆる御らんね通り態と鹿服を着く致して。やはり
 同者の旅行同様は心安く何でも氣まかせよ。風雅を第一と山掛ました 胡麻汁 夫ね
 樂みで御坐り升。私し宅の雲津で御座り升。さうぞれ供致したい 彌次 ねばと召有
 がたい 胡麻汁 さまこと御珍客近所の社中共へね引合せ申たい。何れ御一宿をね願申ま
 せう。マアくふーぎの御縁でよい所でね目に掛た。時にこ、が小川と申ところ饅
 頭は名物一ぶく上りませんか 彌次 イヤ饅頭はこりはてた直も参りませう
 を行過
 る迎

から尻の味い名代を旅人は喰附せんと賣れる饅頭

是から行程なく。津の町に至る前に高田の御堂右の方を見ゆる石井殿といふ是なり
 ねまな板直しに鯉のひれ振へ。これ佐用姫の石井殿かも

津の入口左りの方の。如煮輪觀音堂あり。又かうの阿彌陀といへるもあり此所は上方
 筋より参宮の人。落合ふ所まで往來殊は賑はしく中より都方は若き人々。小袖の上に

揃への浴衣をひつぱり藝者めきたる男女打交りて飾り立たるつゝら馬をひきながら

唄 チ、ハ、チン 御座れ都の名どころ見せん。ぎをん清水やれ音羽山ヤア、とこ

なア。ヨウイヤア。ありや、こりや、。コノ何んでもせエ引。チ、ハ、ハ、

引。ちしもの櫻よまく打廻し。霞ぐくれにもれおもはせる。ヤアとこな。アヨウイヤ

さア。ありや、こりや、。コノ何んでもせエ引 彌次 コウ北八見や。さうぎに美く

ひたばが見える 胡麻汁 アリヤ皆京都は衆者あないに。りつばにしておでやつても。ね

つから錢のつかやせんがな 京人 御無心ながら火一ツ貸ておくれんか 胡麻汁 サア

おつけなさい トくはへたきせるを差し 京人 パツパツ 胡麻汁 まんだ附んか

いな 京人 パツパツ 胡麻汁 何じやお前のきせるにや。烟草がついでないかな。

ハ、アきこへた。吸ひ付る振して。人の烟草をのむのじやな。モウよさんせ。ノウ

お江戸の先生京の衆あないに。客ひのねつこじやわい。ハ、ハ、ハ、時に先生も

ぶく下さりませ 彌次 京の者を。しばひと云ふがれめへも先刻よから。わーが烟草

り香で居る。ごま汁。イヤ私しは烟草入を持やせんもの。彌次。忘て出なさつたのか。胡麻汁。ナニわすれもせんが。有様の全体が。なるのじやわいな。其わけの。私し。ゑらい。烟草。草。一日。拾々で。いたらぬ位。じやゆる。コリヤ。自分で。かふて。香では。たまらんと。思ふて。夫から。烟草入の。やめて。させる。斗り。もて。歩行。されり。升。彌次。そこで。人の。斗り。香な。さるの。だ。な。胡麻汁。さよ。じや。わい。彌次。そりや。京の人へ。輪輪。掛けて。ためへ。が。お。だ。じ。け。ね。へ。と。云。も。ん。だ。胡麻汁。ハ。ア。そ。ふ。か。い。な。ハ。ハ。ハ。時。又。餘程。れ。とな。つ。た。ち。と。急。ぎ。ま。し。よ。か。ト。足。を。早。め。て。行。程。な。く。月。本。に。至。り。此。邊。よ。り。鳥。の。宮。へ。参。る。道。あ。る。と。聞。て。照。渡。る。秋。の。月。本。な。ら。ば。い。ま。う。か。れ。参。ら。ん。鳥。御。前。に。斯。て。雲。津。又。至。り。南。瓜。胡。麻。汁。ね。れ。が。家。又。案。内。さ。る。に。是。も。は。た。と。屋。と。見。ゆ。れ。と。折。ふ。し。相。客。も。な。く。奥。に。間。に。請。じ。い。れ。彼。れ。是。と。も。て。な。し。け。れ。ば。彌。次。郎。兵。衛。は。わ。ら。ぬ。名。を。いつ。わり。掛。る。目。に。あ。ふ。も。一。興。な。り。と。北。八。も。ろ。と。も。心。れ。内。み。ね。か。し。く。頓。て。湯。も。入。仕。舞。ひ。ゆ。う。と。座。し。居。た。る。よ。亭。主。胡。麻。汁。出。て。コ。レ。ハ。ね。草。臥。で。御。座。り。ま。し。よ。よ。

ふこそ。ね入り下されました。然し折悪敷此頃は。しけで何もね看がほ坐りません。夫ゆゑ何も御馳走がでけぬくひが。當所の至つてこんややくがよござり升から。ムア是でもしましよと存じて申付ねきました。彌次。もう。れ。か。ま。ひ。な。さ。れ。な。イヤ。御。主。人。此。者。の。い。ま。だ。れ。ち。か。付。よ。な。ら。ぬ。げ。な。胡。麻。汁。い。か。様。あ。な。た。は。北。八。私。し。の。十。返。舍。れ。秘。藏。弟。子。一。片。舍。南。鏡。と。申。升。ふ。し。ぎ。な。御。縁。で。ご。や。つ。か。い。に。預。か。り。升。ご。ま。汁。ナ。ニ。サ。ぞ。つ。と。ね。か。ら。お。か。ま。ひ。は。申。さ。ん。じ。や。て。イヤ。先。生。ち。と。お。く。つ。ろ。ぎ。な。さ。れ。ま。い。か。女。御。膳。が。よ。御。座。り。升。ご。ま。汁。早。う。上。ん。か。い。御。ゆ。る。り。と。召。上。り。ま。せ。女。膳。持。て。彌。次。郎。へ。そ。へ。て。彌。次。ま。ん。ざ。ら。で。も。ね。へ。北。八。い。女。だ。然。し。こ。じ。や。ア。お。前。へ。も。先。生。か。ぶ。だ。お。



どなしくせざアなるめへト此内又十一二斗りれ小ぢよく膳を持。北八よとへる。兩福餅の大ききの如き黒き物れせて出せり。平にのこんにやくを盛。味噌は別よ小皿よ有り彌次郎小聲よて。ナント北八。此皿よある丸の物は何だろ。北八。されば何であらふか。ト箸よてつ、き見るよ至てかたくはさめ共つぶ。北八。コリヤ石だ。彌次。ナニ石なものは。ノウ女中。女。夫は石で御座り升。北八。夫見なせへ女。こんよやくをお替なさりませ。彌次。いか様も少し。トひらを出して女。彌次。コウ何と鹿馬。トい。とらして石が喰れるもれか。北八。イヤ夫でも喰れる仕法がわりやアこそ。出たであらふ。先刻き當所れ名物を上ませうと云たア何でも此石の事だ。彌次。夫だとして。ついで咄しにも聞ねへ。北八。イヤ待なよ。江戸で團子のことを石。ト云から。大方コリヤ團子であらう。彌次。ハ、ア成程そこもあるよもや本とうの石じやア有まい。ト又箸をもつてつ、き見るよ。やはり石也是のふし。彌次。とらでも石だ。コリヤとらして喰物だと聞もとらはらだ。とらもねつから合點がいかぬ。ト此内亭主勝。是の何も御坐りませません。宜しう召上りませ。イヤ石がさめの致しま手より出て。

○喰ニサ美
味ニ賞齧
日ニ於石
語始ニ于
此

せんか。コリヤ。ぬくとる石を替て上申せ。ト云れて二人共吃驚せしか如何にしてうはらと彌次郎兵衛。イヤもうれかまいなさるな。石もはや宜しう御坐る。儲々珍是を喰たる顔よて。江戸表などで折ふし小砂利を唐がらと醬油で煎つけるらしい物を賞齧致しました。か又の煮豆などの様よ致してたべるとが御坐り升。夫よ又石塔なども嫁をいじる。まうと婆なとよ。喰せたが薬だと申してたべ升る。私も随分好物で御坐り升。今度府中で逗留致した時。馬蹄石を泥鰌煮よして。振るまはれま。たが。ツイ私し四ツ五ツたべま。た所よ聞なさい腹がねもく成て起ふと。た所が一向た、れず。仕方なし。兩方の手を棒しりの様よ致してかついで。貰つてやう。と手水に行やした。御借所の石ころは。かくべつ風味も能ふ御坐りやとから。又たべ過たら。御やつかいに成るだろふと存じてお氣の毒で御座りやと。石を喰ると云いけしからんお齒のおべました段か。ごま汁。イヤ夫のめつそふかいな。石を喰ると云いけしからんお齒のお達者などで御坐り升。然し焼のなさりませんかいな。彌次。夫のなせな。ごま汁。イヤあ

○石喰
報ヒ搔ソ赤
恥チ

の石いしの焼石やけいしで御座り升のぼ。そべてこんにやくといふ物もののみづけ水氣みづけの取れぬ物もので御座り升のぼか
ら。あの焼石やけいしにて。おた、さなさると水氣みづけがどれてかくべつ風味ふうみがよござり升のぼ。其その
爲ための焼石やけいしで御座り升のぼ。あがるのでは御座りませんわいな 彌次やじハ、ア成程なるほど聞きへま
した ござ汁ごまじ マアそうしてあがつて御覽ごらんなされ。コレお鍋なべよ石いしがぬくとなつたら持もち
こんかい早はやうく。ト此内皿このうちわ又石いしの焼たるを乗のて女持出にょぢでひき替かて行く彌次郎やじら北八亭きたはちてい
シウ引しうひと云いて水氣みづけ取とれたる處ところを味附あじを付つてくらふ風味ふうみ 彌次やじ まとよ珍めづらしひお料理りょうり
かくべつかくべつかろくしていはん方かたなけれバ大おほきよかんじて 御仕法ごしほかんしん致いたしました。そしてかやうかやう又同おなじ様やうな石いしが早速さつそくよ能よく揃そろひました ぞ
ま汁ごまじ イヤ夫それの兼かてたくわへ置お升のぼ。お目めよかけませう ト勝手たてにかけ入い吸物しつ椀わん
下くだされませ。こないに二十人前にじゅうにんまへの所持しよじ致いたしてあり升のぼと 御らん
てあるゆゑよんで見ればこんよやくのた、き石いし二十 御免ごめん下くだりませ ござ汁ごまじヤ是これの
人前にんまへと曹付そうづたり此内このうち近所ぢんじよは狂歌きやうかよみあひくく來きりて 是これの十返舎先生じふへんしゃせんせい。始はじめてお目めに掛かり
小鬚こひげ長なが元成もとなり様さまサアく。ぞなたも是これへくハイク 是これの十返舎先生じふへんしゃせんせい。始はじめてお目めに掛かり
升のぼた。私わたくしは。富田茶賀丸とんだちあがまると申まを升のぼ。次つぎの反齒そつは日屋呂ひやろ。水鼻みづはな垂安たれやす。金玉きんたまけ嘉雪かゆき。尙なほれもお

見志みり下くだりませ ござ汁ごまじ 時ときに先生せんせいおやかましう御坐ごりませうが といふをかやかま
しうといふ 扇面せんめん短冊たんさふなどお願ねがひ申まをたいが何成なになり共ともお持もち合せれお歌うたをお認しんめ下くだりま
國言こくご葉はなり 扇面せんめん短冊たんさふをつき付つけられ彌次郎やじらかつべらしくどりあげて何なにの出放でしやう体ていやらかし
せト扇子せんし短冊たんさふをつき付つけられ彌次郎やじらかつべらしくどりあげて何なにの出放でしやう体ていやらかし
て暮くんど色々いろいろ考かんがへてもわがよみし歌うたには是これぞといふ歌うたもなく早速さつそくよ思おもひ付つけなけ
れば是これまで聞きおぼへ居ゐたりし人の歌うたを 是これの有難ありがたう御坐ごり升のぼお歌うたの時鳥ときどり自由じゆう自在じざいよ
書かて差出さしだせばござ汁ごまじ是これをいたゞき見みて 是これの有難ありがたう御坐ごり升のぼお歌うたの時鳥ときどり自由じゆう自在じざいよ
さく里さとの酒屋さかやへ二里にり豆腐屋とうふやへ二里にりハ、アなるやど。どうか聞きいた様やうな歌うただ。さぬ
くのなさをしらば今いま一つひとつうそをもつけやわけ六ッむつ鐘かね。イヤ是これの千秋せんしゅう菴あん大人おとなは
お歌うたで御座ごりませんか 彌次やじ ナニ私わたしがよみ歌うた。然しかも江戸えど中大評判おほななひやうはんの歌うた。たれしらぬ者もの
の御座ごらぬ ござ汁ごまじ イヤさよじやあろうが。先年せんねん私わたししお江戸えどへ参まゐじたとき。三陀羅さんだら大人おとな
芍薬しやくやく亭てい大人おとななぞよも。お目めに掛かりまゝ。そなはちお短冊たんさふもいただてて歸かへりましたが
御らんごらんなされ其屏風そのびやうぶに張はつて御座ごり升のぼ トいふゆゑ彌次郎やじらふりかへりて見れば成程なるほど屏
は毒どくな イヤ私わたしの先生せんせいの。そ、つかしひが。くせで人の歌うただの我歌わがうただのと云いふ。しやべ
つ。一向いっこう御座ごりやせぬ。コウ彌次やじさんイヤ先生せんせい是迄これまで道中みちちゆう筋すぢでよみなさつた。お前まへは

○此こ一
九く一いつ句ご
不ふ出しゅ

歌を書なされば能よ
ト氣を付られて彌次郎面目なけれど。押のつよる男なれば。い
けしやア〜として跡の短冊への道中筋の歌をかき此内北八
も手持なけれハ張〜ハ、ア戀川春町の書が有る。モシあの書の上よある賛の何でお座
交ぜの屏風を見



可レ想フ
八之九
六語ヲ又
〇吐テ無キ
せぬガ。あれハ質又取たれで御坐り升
升たごま汁ドレ〜何じや有な
ト此手紙をひらきて
高々とよみて見れば
手紙鳥渡申上候只今東都十返
で御坐りませうなごま汁六か何かしりま
り女立出てハイ髭顔様からお手紙が参じ
ト此内勝手よ

舎一九先生。私宅へ御着有之候。勿論名古屋連中並に。吉田大竹方も書状参り申候。早
速貴公御辱も致置候ゆる追付貴宅へ。同道参上可致候間。右御案内申入置候以上ご
ま汁コリヤとらじやいな。とんと。合點れいかぬ。ノウ先生只今朋友共からかやうよ
申越ましたが。定めてこやつ尊公のお名前をかたつて参つた者と見へるさいはる。
追付是へ参るとあれば。ナントお逢なされて。なぐさんでやろうじや御坐りませぬか
彌次郎。諸々。大變なことだ。いや早横着なやつも。あれば。有ものだ。然し私しは。あひま
そまいごま汁なんせ〜彌次郎イヤとらか先刻から持病の疝氣がおこりました。左様
でなくば其ませ者。致し方が御坐る者を。惜〜こまつた物だ。ト思ひがけ無く。此
彌次郎しよげ返りて居る亭主ごま汁を始め。皆〜先刻より彌次郎が。振舞ひ合點ゆ
かずと思ひし所扱はと心付こいつ。ばけの皮あらりしてくれんどたがひに袖を引あ
ふ茶が丸。何と先生コリヤ面白いとが出けました御不快では御坐りませうが。是非共
其似せ者よはあひなざるが能ふ御座りませう。彌次郎ハテ扱こまつたをまつしやる
垂れ安イヤ助に先生のお宅の江戸表での何所で御坐り升な。彌次郎されば何所か御座

つた。チ、夫く鳥羽か伏見か淀竹田かゆき山崎の渡しを越て與市兵衛とお尋われ
 がおきやアダレハ、ごま汁イヤ慥かなた方のお笠に江戸神田八丁堀彌次郎兵衛と
 書付て有りおつた。其彌次郎兵衛様と云ひ。たれさんのことじやいな彌次ハア聞た
 様な名だが誰でかわつた。チ、聞た筈だ。わしが實名を彌次郎兵衛と云やすごま汁ハ
 、ア常よや参らぬ鳥々渡参らぬ彌次郎兵衛で御坐ると云は。あなたので有たか彌
 次左様く茶が丸時彌次郎兵衛先生其似せ者れ一九をいんま連れてこまるかい彌次
 イヤわしはもう出立致そふごま汁何せ今頃何時じやと思ふて最ふ四ツじやけな彌次
 さればのことわしが痴氣のかはつたことで此様にかしこまつて斗りおると段く悪
 く成。いつも夜分外を歩行て冷さへすりや。直も能くなるからごま汁ハ、ア夫で今立
 ふと云れか。そうさんせく喰こなさんが。居ようと云ても爰にやもう置やせんのだ
 や。早う出ていかんせ。ようも人の名をかたつて。だまさんしたの彌次ナニかたつた
 どのごま汁ハテかたつたわいな。やんまの十返舎先生は名古屋の川並連中から狀が

着てきてありや。ちがひのなるがな。たれ安は初めからこなさんれ不都合だらく。こ
 なるなとであろと思ふた。こちらからはからかー出されぬ内よ。ちやつくと出ていか
 んせ彌次何だやかしだぞコリヤ面白。北八コレサ彌次さん。りきんでもはじまらぬ
 へ全体お前への思ひ付きが悪のサア爰を出て何所ぞ木賃も泊りやせうコリ何
 方たも眞平御免なさりやし。ト北八が段々れわびと亭主の腹の立せもおかいさも
 出行なりを見送り家内の者共手を打た、さどつと笑ふ彌次郎はまじ
 うふくれ顔をして。りさみかへり出行くおかしさ北八跡よしだぐひ
 いとはまし通り一遍旅の恥書捨てゆく扇子短冊
 斯よみて跡の笑ひを催ふし出かけたれど。最早亥の刻過たると見へ。家并よ戸を閉て
 ひそまりかへり。何れを旅籠屋とも。見へ分たず泊るべき方も無しうかくと。た
 どり行程よあはや軒下れ犬共がおき立て吼掛れば彌次郎兵衛さよろくしてエ、此
 畜生めらア悪くふささやアがる。ト石ころを拾ひて打ちつくれ。北八かまいなさんな
 犬迄が馬鹿よしやアがる。チヤ彌次さんおつな手付をしてお前へ何をする彌次イヤ

犬に取巻れた時の宙へ寅と云ふ文字を書
て見せると犬が退げると云とだから先刻
から書て居るがねつから退げやアがらぬ。
此奴らア皆な無筆の犬だそうな
トどうやらこうやら追散かして行
共無しに思はず此町を出はなれて
コリヤつまらぬへ者だ。ま、よ北八夜通
一歩行こじやアねへか。きついでたアね
へ。にらかせく北八 お前とんだとを云
まだ九ツもやア成めへ又何所ぞへ泊りて
へ者だ 彌次 夫だどつて今頃におきて居る
内のな。イヤ有ぞく遙向ふに火が見
へる。アノ火を目當り行て宿を頼まふ 北



八チ、サの夫が能く然し提灯の火じやアねへか 彌次とんだとをいふ。戸の透間よ
りもれる火だ物を 北八 はんゝ家の内で煮火だ何でも是非あそを頼んで泊やいやう
ト足近よまかせて急ぎ行く頼てそこに付きたるにかれ目當 彌次 ヤアくくく
の火のおれれと段々先へあゆみ出して行く休よ。れどろき
あれ家がどうか歩行て行様だ 北八 やんゝなア。こいつのれかしい 彌次 イヤねかしく
ない氣みが悪る何所の國よか家が歩行と云ふは只事じやアねへ 北八 ナニサ是も赤坂
の泊りくらゐで皆な狐めがとる事だろふ。よはみを見せると直附け上りがとる。かま
う事アねへ。さつくと歩行みなせへ
トわさどりきみかへつて足早に件の火にれ
ひつきくら中ぎれよ。すかし見ればいざり
の車なり。小屋の内よて火を焚。茶をわかしなぐら。車を押して行の也。ふたりいれか
しくこゝをすぎ行よ。折節月の出たれども草木もねむる眞夜中のうそ淋しさ。跡に
も先にも只二人。上はべいがまんよつよ張ても心の至てのねくびやう者こわくた
どり行跡より一人来る者あり彌次振返り見れば小山の如き大男長脇差を腰に横た
へ来るは只者ならず我々を目掛け 彌次 コウ跡かられかした奴が附て參る。ちと急
附来るならんど 北八 よさ、やまて
ト足ばやゝ走れば 北八 待なよ呑口がはづれそうだ
ト小便をそれ
ぎてやらかそう 跡は男も又はしる
ト甘男も立留
り待て居るゆゑ モシ前今頃何所へれ出なさる
トこはく云バ彼の男存
ハイ

私わたくししい松坂まつざかへ。もどりねる者ものじやがな。夜よさら一人ひとりりこはふて。モウどういよ
 いなと思おもひねつたとあへ。お前方まへがたが通とほらんとゆゑ。コリヤ能い連つれじやと跡あとから二人ふたりを
 心こころ便たよりよ参まゐつたわいな。北八きたはちイヤおめへ。なりよは似に合あぬよはい音ねを出だしなさる。そ
 てそんな長ながいやつを差さして居ゐながら。彼かれれ男おとこハ、ア是これかいな。コリヤ跡あとで拾ひろふて来た。竹
 切きりじやわいな。ト腰こしからぬいて。彌次やじハ、ハ、ハ、脇わき差さではねへの。わつちらア又またお前
 へがこわくつて。先まづ刻ときにからコリヤひよんな奴やつ見みこまれたと思おもつたが。マアお
 前まへへおくびやう者ものでわつちらも落おちついた。北八きたはちもう。是これから三人さんにんと云いふんだから大
 丈夫じやうぶだ。男おとこイヤ。此この先まづよとつとゑらい事ことが有あるがな。彌次やじ何なにがゑらい。男おとこ聞きんせ。わしや
 今日けふ江戸橋えどはし迄までいて。歸かへりよきつう遅おそなつてな。いんせの先まづ此この松原まつはらよきかつたところが。
 何なんじややら向むかふよ大おほきな白しろい物ものが立たつてゐおつて。夫それが何なん方あつちへいたり。こつちやへ来た
 り。ぶらり。くも。う。く。く。わしやこはふて。コリヤ死しぬかと思おもつたわいな。そじ
 やものどうして向むかふへ。いかれる者ものでコリヤならんわいと跡あと戻もどりして。どうぞよい連つれ

がほしいと思おもひおつた所ところへお前方まへがたは行い合あつたれじやわいな。彌次やじエ、其その白しろい大おほ氣きな者ものが
 居ゐたと云いふ何なん所ところらに。男おとこイヤトつきに此この先まづじやわいな。北八きたはちエ、何なんがでる者ものだ。おいら
 が先まづへ行いふ。ねれよ附つて来きな。ト打う連つて此この松原まつはらを一ひと彼かれ男おとこアレ。向むかふよ。ア、コ。たま
 らぬ。トがた。ト震ふるへる二人ふたりもわやしくはるか向むかふを月つき明ありよ透とほし見みれ。何なん共とも
 是これは何なんだらうと先まづへも。ト、ま。ず。立たち。見みれ。バ。又またき。ゆる。よう。よ。べ。つ。たり。無なく。彌次やじマ
 なるかと見みれば又またそつくりと立たち。成なたり。小こさく。成なたり。其その形かたちちわからず。彌次やじマ
 ア何なんだるふ。北八きたはち裾すそがねへから亡はら魂たまに違ちがへぬ。男おとこアレ。あれじや物ものどうして先まづへ行いれ
 ましよいな。彌次やじ性しやう体たいがわからにやア。猶なほ氣きみが悪わるい。コリヤ行いれぬ跡あとへ戻もどろふ。男おとこわ
 もお前方まへがたを便たよりよ又また参まゐじたが。どうもこはふて行いれぬ跡あとへ戻もどつて又また連つれの人が出で
 来きかつたら又また爰こゝ迄までこうわいな。二に三さん度どもそなるに。いたり戻もどつたりしおつたら丁てい度ど夜
 がわけふわいな。彌次やじ何なんでも白しろ装束まつらふくだから何なんぞの亡はら魂たま違ちがへばぬ。北八きたはちアレ。青あおい
 火ひが見みへる。男おとこエ、どうかこつちへきかふるようじや。彌次やじコリヤどうしよふ迎むかひ先まづへ
 行いれぬ。ト三人さんにん乍はら色いろ青あおざめてがた。く。ふる。唄うた戀こひの重おも荷かをナ。つんだら。お馬うまよ

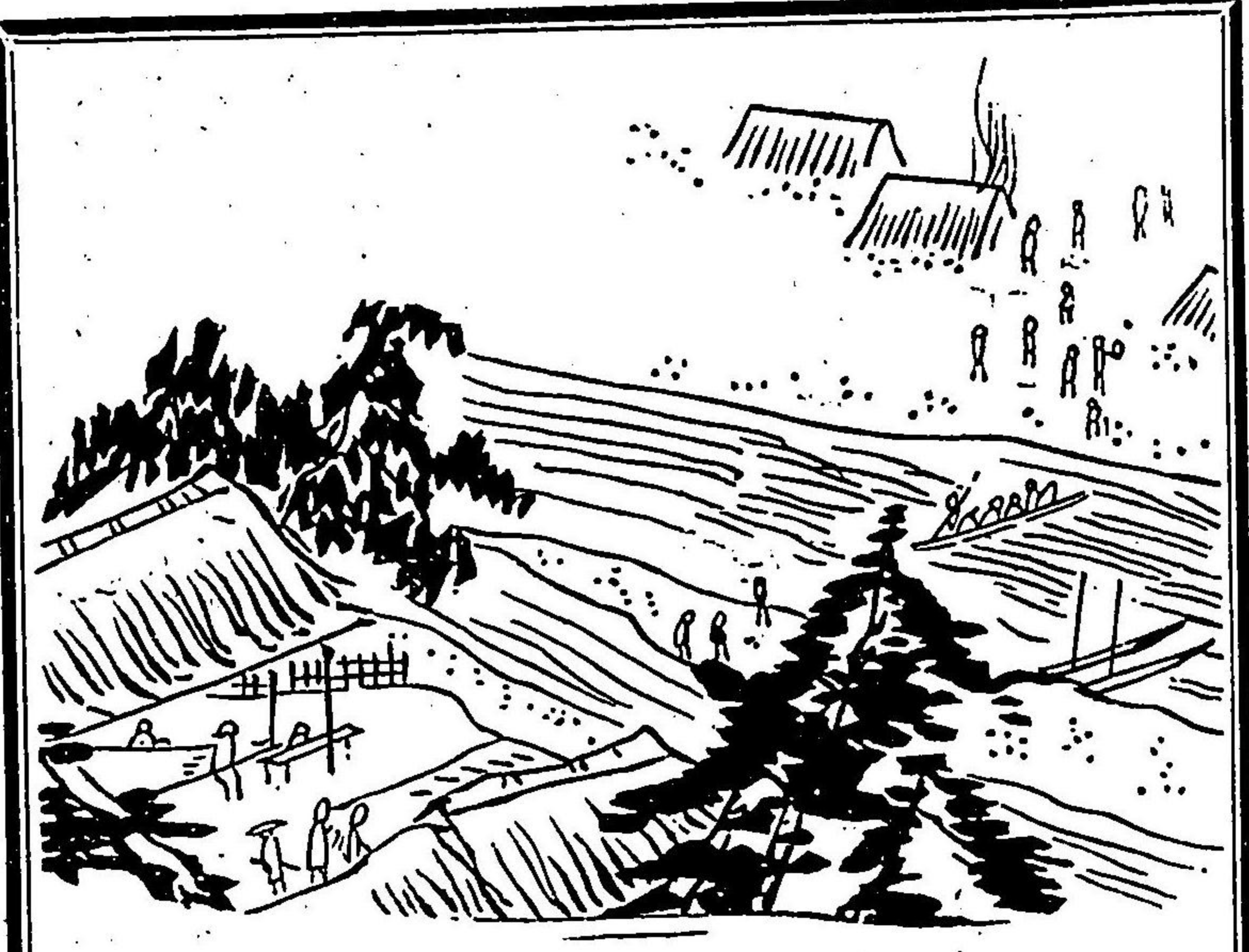
○非_ニ鈴_カ
森_ニ而_シ尿_シ
々_ノ漏_リ

いても手水場_{テラウバ}がどつともうゑらいむさくろしふて〜。私_{わし}や百日程_{ヒツト}ある内_{うち}。とんど手水_{テラウバ}にいたとがないがな。夫_{そふ}から江戸_にを立て_{たつ}。鈴_{すず}ヶ森_{もり}たら云_いとこへ来て_き。ヤレ嬉_{うれ}しやこ、でこそ小川_{せうがわ}してこまぞと。海_{うみ}のなかへ溜_{ため}々_くた。小用_{せうよう}と一_{いつ}きよ三斗_{さんとう}八升_{はつじやう}計_かり。しおつたがゑらふよかつた。わしこは奇麗_{きれい}でゑらい大きな小用_{せうよう}たごであつたわいな。ハ、ハ、彌次_{やじ}京_{きやう}では小便_{せうべん}と菜_なと。とつけへこよそると云_い事_じだから。小便_{せうべん}も大切_{たいせつ}なもんだにめへ海_{うみ}の中_{なか}へおしい事_{こと}をした。其_{その}三斗_{さんとう}八升_{はつじやう}で取替_{とりかへ}たら菜_なが馬_{うま}よ五駄_{ごた}や六駄_{ろくだ}は。くるだろふに夫_{うれ}だから京_{きやう}では。屁_へをひるよも出_でそうも成_{なる}とちやつと。裏_{うら}の畑_{はたけ}へかけて行_いて。はねてゐる。大根_{だいこん}や菜_なの上_{うへ}へ屁_へをひり掛_かると云_い事_じだが成程_{なるほど}走_はもやしし成_{なる}だろふ。上_う方_{かた}そうじやわいな。其_{その}屁_へをひり掛_かた菜_なを。能_よふ刻_{とき}で土_{つち}よ交_まて壁_{かべ}を塗_ぬるがな。京_{きやう}では其_{その}土_{つち}を。へな土_{つち}と云_いわいな。彌次_{やじ}ぞう体_{たい}京_{きやう}と云_いふ所_{ところ}のわだじけねへ所_よよ。前度_{まへど}わつちが行_いた時分_{ときぶん}の三月_{さんげつ}で花見_{はなみ}のさい中_{ちゆう}。てんでんよ幕_{まく}を打_{うち}てけつこうな。高時_{たかとき}給_{たま}の重詰_{ぢゆうぢぎ}なんどを取_とりちらした所_{ところ}の能_いが其_{その}重_{ぢゆう}の内_{うち}よ向_{むか}ひが有_あと思_{おも}へ。かくやの香_{かう}の物_{もの}に。さらぞ

○彌次
不_レ説_ニ解_カ
露_ニ花_ニ取_ニ
江戸_ソ兒_シ
身_ニ遺_ニ憾_シ
多_シ矣

の煮_にた奴_{やつ}つのおそれる〜。上方_{かた}イヤ夫_{それ}よりかお江戸_にの衆_{しゆう}が吉原_{よしはら}の櫻_{さくら}のゑらいと。いこう自慢_トせらるゝさかいで。わしやわぢ〜。吉原_{よしはら}へいて見た_みが。何_{なん}れ櫻_{さくら}のありませんがな。彌次_{やじ}そりやわめへいつ頃_{ころ}いさなとつた。上方_{かた}わしがいいたし十月_{じつげん}時分_{じぶん}彌次_{やじ}なんの十月_{じつげん}櫻_{さくら}が。有_あてたまるものか。上方_{かた}ハアそうかいな夫_{それ}でも京_{きやう}の小室_{おむろ}や嵐山_{あらしやま}の年中_{ねんぢゆう}中_{ちゆう}櫻_{さくら}がらんどあるがな。彌次_{やじ}そりやア木斗_{きぶか}りだろふ。花_{はな}の年中_{ねんぢゆう}有_あアしめへ。上方_{かた}さよぢやわいな。イヤ又_{また}江戸_に衆_{しゆう}の長唄_{ながうた}をよう唄_{うた}ふてじやが。京_{きやう}の宮園_{みやぞん}や國太夫_{くにたけ}の又_{また}格別_{かくべつ}なもんじやわいな。彌次_{やじ}國太夫_{くにたけ}と云_いの。どの様_{やう}も唄_{うた}やぞ。上方_{かた}のこうじやいな。めよ聲_{こゑ}を張_は上げ。上方_{かた}頼_{たの}てわたしが年_{ねん}明_あけて。お前_{まへ}と夫婦_{めうふ}に成_{なる}なら。肩_{かた}を齧_かへはまだな事_{こと}足_{たり}て國太夫_{くにたけ}。を耳_{みみ}よかけて成_{なる}共_{とも}そひませう。彌次_{やじ}イヤ〜。面白_{おもしろ}へ〜。ナントわつちよ一_{いつ}トくさりおしへて。くんなさらねへか。上方_{かた}そりや安_{やす}い事_{こと}トやわいな。わしよついでやりなされ。ト此_こ内_{うち}北_{きた}八_{はち}の細_こ長_{なが}き。竹_{たけ}一本_{いっぽん}を拾_{ひろ}ひて。上方_{かた}者が。あまりにかうまて來_き事_{こと}を。バ知_しず上方_{かた}者_{もの}の。上方_{かた}チンチリツン。やんに女子_{おんな}の。うねんの深_{ふか}いと云_いの。夢_{ゆめ}中_{ちゆう}よなり又_{また}國太夫_{くにたけ}ふし。上方_{かた}チンチリツン。やんに女子_{おんな}の。うねんの深_{ふか}いと云_いの。

うそじやなる死でも呵責の夜叉羅刹杖振わけて丁と打トいふ所まで北八手を延し
 まをび上方ヤアコリヤどやつじやい。人れ頭まへ磔うちおるがな 彌次ハ、もう一ツ
 せん今の文句を 上方 ほんに女子のしうねんの深いと云のうそじやなる死でもかしや
 くれ夜叉羅刹杖振上げて 北八後ろより 上方 アイタ どやつじやい。どめつそうなる
 らふ磔うちくさるがな トふりかへり見れ共北八のちやつと彌次郎 彌次 面白いが
 せうもふしが六ヶしいもう一遍やつてくんせへ 上方 ソリヤ何ほでもやるいやる
 が又つむりをうちやしよまのか 彌次 ナニサわつちが見て居よふ 上方 そんなら。ま
 度やりまーよかい。死でもかーやくれ夜叉羅刹杖振上げて丁とつ ト此度の北八うろ
 たまをびしや 彌次 アタタ 北八 おれた。コリヤどうぞる 上方 ハア先刻から私がつむ
 りをうたんだのも。こなさんじやな何として打んだ 北八 私打た覺へいなる上
 方 ナニ無とい云ーやせんわいな 北八 ハテおいらアしらねへ。いけしつある。野郎めだ
 い 上方 野郎とい何じやひな。こなさんいゑらい。おどがひた、かんぞな 北八 何だ此べ



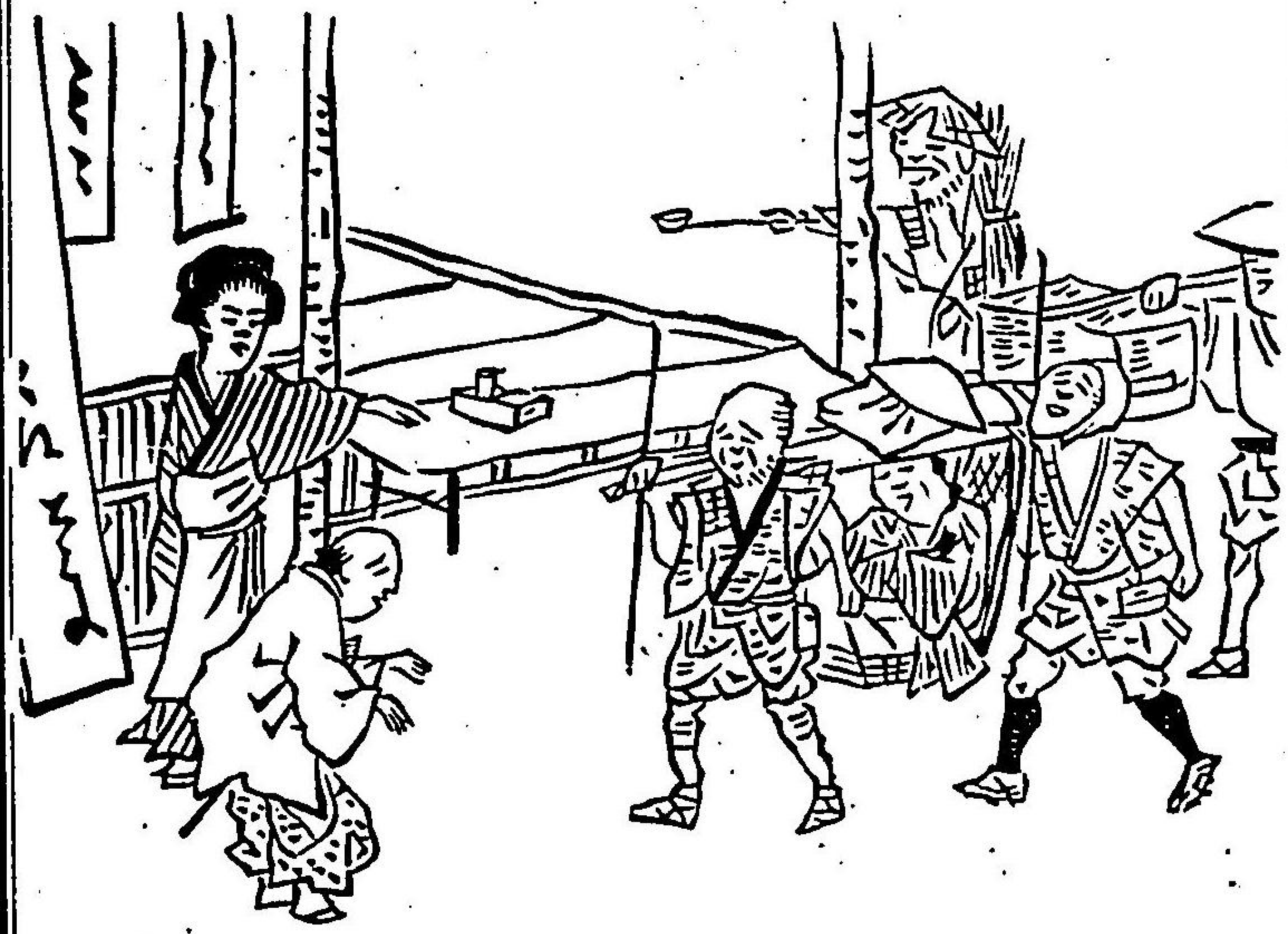
らばうめさつきから。そうてへ氣も喰は
 ねへ野郎めだ。あんまりだは言つきやア
 がるど引ずり下とぞ 上方 面白いサアおろ
 して見やんせ 北八 ム、まつ逆様よおつこ
 としてやろう ト馬け尻をびつーやり上
 方 ヤア たらん何するれじや 彌次
 れもたまらん コリヤ せうぞる 馬
 士エ、畜生めドゥ ト此内新茶屋あ
 幡につく此所より馬をかりて三人 コレ。
 共茶屋に休む上方者北八に向ひて
 おまひい何として。私がつむりをうたん
 した 彌次 もう能よ志なせへ。おたげへよ
 旅じやア色々な事が有もんだ了簡しなせ

へ。わつちが一盃買やせう。モシ女中何ぞ肴があらば愛へ一盃出してくんト是酒盛となりて上方もれも一ッなコリヤゑらふ酔たわいな。コレ彌次さんとやら。わしやおまゐるがゑろふとさじやが。此わろいいかんぞや。どんといかんけれど。お前の連じや志よ事がない。かう志よじやなるかいな。是から山田の妙見町一所に泊つて古市をおごろかいな。わ志やあこでい。ゑろうされるがな千束屋の鼓間。柏屋の松の間私が案内するさかい。いかんせんか。どうじやいなトやたら大とらなと斗りだてわけて遊ぶつもりに。奇妙くどうぞお供致てへの。上方是から世古の松坂屋で支度志て妙見町の祿屋と志よぢやないかいなサアく。もういこはいな 彌次ドリヤ出掛やせうトこ、れ酒代を拂ひ立出る此町のではな宮川や神に奇縁を結ばんと。そくえる水の影のまらゆふ是より中河原を打過。堤世古を打越て山田の町よを差し掛りける

○追加

○啞子
不能言フ
故ニ出シ看
板ヲ示シ之
者ヲ歎呵
々

川崎音頭よ。伊勢の山田を歌ひしは。和名抄の陽田と云るより出たるにや此所十二郷有て人家九千軒斗り商賈みらかを並べ各々質素の莊嚴濃よして神都の風俗自から備り柔和悉鎮け光景は。余國よ異なり參宮の旅人絶間無く。繁昌さらにいふ斗りなし。彌次郎兵衛北八の彼の上方者と打連此入口に至ると兩側家毎よ御師の名を板に書附用立所と云へる。看板竹草け如く。爰よ袴羽織引掛たる侍。何人となく馳達て往來の旅人の御師よ至るを迎ふと見へて一人の侍。彌次郎兵衛よ近附き。お師の手代。モシあなた方は何れへお越で御坐り升な。彌次。志れたと太神宮様へ参りやす。手代。イヤ太夫のぞれへ。彌次。太夫の竹本義太夫殿さ。手代。ハア義太夫と申そは何所元じやいな。彌次。其義太と云はな。大坂にての道頓堀北八。京は四條か江戸の吹屋町川岸に於て永とく御評判預りましたる。手代。かたは者のお前方で有たかいな。北八。たはことぬかそとひつばたくぞ。手代。ゑらいあこじやなハハハ。上方。ちと休んでいこかいな。北八。爰らのきたねへ所だ皆御師の雪隠と見へて用立所と書て有る。彌次。おさやアがれハハハ。ト三人共或る



茶屋へ這入暫く休む此内向ふより上方同
 者大勢い揃ひのなりで女交りも聲張上げ
 唄御座れ夜見世は順慶町の通り筋からソ
 レひやうたん町を〇ヤアとこヤア〇よいと
 さア~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~
 け鳥〇ソリヤサかわひくも〇ヤアレ格子
 先ヤアとさ〇ヨウいとなア〇ありや、コ
 ノなんでもせ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~ト此
 通り過たる跡から太々講とみへて廿八斗
 り何れも御前より向ひの駕又打乗り来る
 が御師の手~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~先
 代先又立て~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~ト駕
 なた様も是で御休足なさりませ~~~~~~~~~~~~~~~~
 茶屋の門は下ぞ此太々講は江戸と見へて
 何れも小袖ぐるみも短いか太刀をきめた
 手合銘々駕を出て座敷に通る~~~~~~~~~~~~~~~~
 此内一人の男彌次郎を見附て~~~~~~~~~~~~~~~~
 イヤ是ハ

ぞうだ彌次殿~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~ト聲を
 れて彌次郎びつくりし見れば町内の米屋
 太郎兵衛なり江戸をたつ時此米屋の拂ひ
 をせず立たる事なれば何ぞ~~~~~~~~~~~~~~~~
 なく彌次郎しよげかへりて~~~~~~~~~~~~~~~~
 衛様か能お出掛なさいました然し爰であ
 なたよ。お目に掛つての面目無太郎ナニ
 サ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~
 と云者だから。よんぞころなく出掛まし
 たが。いひ所で逢た旅へ出ての兎角同國
 がなつかしい奥へ来て一盃やらつ~~~~~~~~~~~~
 ありがたふ御坐いやを~~~~~~~~~~~~~~~~
 アまんざらしらぬ顔でもなるナント貴様
 たち。さいはひれとだ太々講おがまぬか。



夫も飛入と云アちつとヨリ金が出るから無駄ながら。私らか供もなると一文も入らず。大分馳走もなつて。おがまれると云ふもれだから。どうだろ。彌次 夫の願つてもなる有難ことで御坐いやそ。然し夫がでさやせうかね。太郎 ハテわしが講親だ者。どうでもなる。マテ何もしろ奥へ來さつし。彌次 ハイ左様ならモシ上方れ。ちどこ、又待てくんませへ。運の上 能はこれ。いってごんせ。太郎 サア、ふたり共さつ、

兵衛にいざなはれ彌次郎も北八も草鞋を取て奥へ行ど。上方者の。ひとり見世先酒など呑で待て居るうち奥の太々講れとなれば御師が馳走にて。さいつおさねつ大さはぎの最中又表又一トむれれ駕十四五丁斗り是駕。駕かき。ホウよい、

さつさ、茶屋に這入る。手代 サア、御案内、茶屋 お早う御坐ります。奥へお通りなさんせいな。此内皆々駕より下りて奥へ通ると直に酒肴を持出した。余りくた、

所より出と江戸組の御師の手代一はな立て奥より出で。サア、

廻りて 此内皆々駕より下りて奥へ通ると直に酒肴を持出した。余りくた、

○ 此則
太郎兵衛 駕籠

彌次公 貴様己が駕に乗て行ねへか。彌次 イヤとんだとをおつしやる。太郎 ハテわしの是から歩行のなぐさみだ。貴様洒浴も乗て行かつし。彌次 左様なら。へ、こりや奇妙、

ト駕に乗バサアお立じやと兩方の駕が一度にかき上げこんざつして。彌次郎も附すさつさどかついて行掛るどさくさ紛れに人も夫と心附ねバ段々と急ぎ行程も山田のまん中すぢかひといふ所まで江戸方の一ト組の内宮の御師なるゆゑ左の方へ別れ行上方組の外宮に御師にて此所より右の方へ別れ田丸街道の岡本太夫の方へ着く。門前の箒き目盛砂水打清め玄關まき打廻して馳走の役々羽織袴も出向へ。講中皆々駕をおりて玄關より打通る。此時彌次郎兵衛も魚かきのそ、うまて上方組の中へ紛れ込み爰に來たれど十四五丁も有る魚どれがせれやらわからず彌次郎駕を出て同じく坐敷に打通りをこらさう。彌次 ハテ合點のいかぬモシ、米屋の太郎兵衛様の何れもお出なさり升。居た男 向じやいな。太郎兵衛さんとはこちや。まらんわいな。そしておまゐり。ねから見ん顔じやが誰さんじやいな。彌次 ハイわつちのソ

レ太郎兵衛さんの町内の者じやがハテどうか違つた様な。北八のどうした知ん、トむらにうろくさよろくとまごつきあるけ。皆々きもをつぶし。たぐひ、コレ、

と袖引合て荷物などかたよせさ、やき合ふ内此講中の内二三人立向ひて。彌次、

こなさんはみなれぬ人じやが誰トやいな。彌次、ハイ、講中、ハテあなわろの何をさよ

ろくさんすぞいな誰じやと云のに彌次イヤわつちの米屋の太郎兵衛さんよお目に
 かればわかりやす 講中 ハテそないな人。こちの講の内は無もせぬもの。何じや
 やら氣みたの悪人じやわいな 御師れ手代 ハアこな人のあなた方のお連で御座り
 ませんかいな 講中 さよじやわいな 手代 イヤ夫はどした者じや。とつと、出て行んせ。
 ゑらい。へげたれじやな 講中 道中じらでゑろぞいな。やり出してやらんせ。あたけた
 いな 彌次 エ、そんなに云なるとアねへ。はり出とどの何のこつた。途方もねへ 講中
 ハ、アお前のものいひはお江戸じやな夫でよめたわいのいんまのささお江戸の太々
 講ど一ツ所で。落合ふたが其時お前の乗らんした。駕がこららの中へ紛れ込で御座ん
 したのじやな 彌次 なるほど左様そんならわつちのいく御師殿の何所で御座いやとな
 手代 ナニお前のいくことを誰がしろぞいな 講中 めんくのいく御師殿をいらんと云
 事があるかいな。コリヤ我さまの。態どこちの仲間へすり込で太々講を喰たをし。ま
 ようでな 講中 エ、けたいな奴トや。のうてん。ぞやいてこまそかい 彌次 イヤ悪く酒
 天窓打

落らア手めへたちの太々講。丸ツきり喰倒したとある。たかがまされてゐる。あんな
 り安くしやアがるな江戸ッ子だけは。おれひとりで太々講打て見せよう トどつさりそ
 手代さもを ナニお前がおひとりでかいな。こりや。でけたくみんとお前が彌次し
 つぶして 多少にやア依めへ。是で頼み升 出せばおーの手代二度びつくり ハ、ハ、
 れたことよ。多々講の安うて金拾五兩もださんせんけりや。でけんわいな 彌次 ナニ是でいなりや
 せんか 手代 さよじや 彌次 太々講がならずば是で蜜柑講でも頼み升 講中 ハ、ハ、べ
 つか講にさんせ。ハ、ハ、手代 イヤおどけたお方じや。ハアよめたお前のいくところ
 の慥に内宮の山莊太夫殿じやわいの。先刻の手代があれじや程。是から妙見町を
 直る古市の先へいて尋ねさんせ 彌次 ハアそうか。コリヤありがてへ。ほんよれやか
 ましう御座いやした 講中 ゑらいあはうじやハ、ハ、 ト手を打笑ふ彌次郎はらたて
 所を立出 此
 鉢植のだい 講中 ゑらね共の宙もぶらりとなりし間違

夫より彌次郎兵衛の元の筋違も出。妙見町を差て行く道すがら北八のいかせしや。米屋太郎兵衛と打連て御師の方へ行しか但しの上方者と妙見町に泊りしかと思ひわびつ。たどり行程に廣小路に至ると宿屋。若お泊りかいな宿を取てかかせ。彌次コレ妙見町と云の未よつほど御座いやそかね。宿屋の女。イエいんま少し此先じやわいな彌次ソノ妙見町にアノ何屋とか云た道連の上方者が泊ると云たの、夫よ。ト色く藤屋と云をわすれて。ハテ口へ出るような何でも柵からぶら下つたような名であつた若々妙見町よぶらさがつてゐる宿屋の御座いやせんか。そこに。ナニぶら下つてゐる宿屋のこちやしらんわいのそないなと云てのしれやせんがな。彌次。成る程こ、らでたづねての忘れめへ。最ふちつと先へ行てたづねやせう。ト夫よりこ、を過て急ぎたかんばん妙見町山原七右衛門と云るを見て借こ。彌次。モシこ、らに何でもぶらさがそ。爰が妙見町ならんと思ひ往來の人を呼留て。彌次。なんじやいな。ぶらさがつて居つてゐる様な名の内の御座いやせんか。往來の人。其家名のいな。彌次。家名をわされたからの内との何屋じやいな。彌次。宿屋。往來人。其家名のいな。彌次。家名をわされたからのと

往來人。イヤ夫いふて。かんせにやアしれぬくひわいれ。何じやると。ぶらさがつた内と云てのハ、アむこは門に人の立てれる。内へいてとよて見やんせ。あこの去年首縊りがあつてぶらさがつた内じやさかい。彌次。イヤそんな者の。ぶらさがつたれじやア御座いやせん。往來人。ハテマアいてとよてかんせ。あこも宿屋じやあるわい。彌次。ハイヤ左様なら。ト走り行くうち。彼家の門も立て居た人もどこへか。つゝと行て。彌次。モシ。ちんちんものがたづねたら御座いやそ。去年首をわく、りなさつたの。あなたで御座いやそか。此内の亭主居合せ。イヤ私や首つたといな。彌次。そんならどこで御座いやそ。亭主。こ、らよ首つた内はしらんがな。此二三軒先も柵から落た牡丹餅喰て。咽をつめて死だ内が有が。若夫じやなわかいな。彌次。いか様なア何でも柵からぶらさがつた様な内で有た。ト又二三軒先へ行。モシ柵から落た内は前へじやア御座いやせんか。トとんだ事をいふ此。イヤエナわたしが内は。元から爰でつゝあしか柵へ揚て置たとはなませんわいな。彌次。ハア外よの御坐りやせんか。女房。コリヤれ前さ、ちが

ひじやあろぞいな。山から落た内じやあませんかいな。夫トやと相の山の。與次郎は小屋が此間此風で谷へ吹落されたと云とで。お升がな。大方それじやあろいな。彌次イヤ



夫でもねへが。コリヤ困つた者だ何だかだ。だがさつぱり分らなく成て。もともこもうしなつた様だわつちも先刻から尋ねあぐんで。もうぐがつかりと。くたびれやしたぞうぞ。一ふく吞して下さりやせ。此見世さきよ腰を掛る亭主氣は毒。亭主さそうは煙草盆を提て奥より立出。ア一ふくあがらんせ。一体お前。何處を尋ねさんすのじやいな。參宮じやあろが。おひどりか。但しのお連でもお升かいな。彌次さ道連ども三人のところ。わつちはその連にはぐれてあんなさまつたとア御坐いやせん。亭主イヤ其おふたりはお連の

おひどりの江戸らーい。が今おひどりの京のお人で目の上にこのくらいな痰癩のあるお方じやあませんかいな。彌次さやう。亭主それじやとこちの内よお泊りなされたさかい直よお前様へのね向ひをだしましたわいな。彌次そりややんどうにか。ヤレうれしやそしてお前様とこい何屋と云やす。亭主ア御覽なされ掛札に藤屋と書てね升がな。彌次ホンニ夫々柵からぶら下つた様だと思つたが其藤屋よ。そうして連のやつらのどこにのやと。亭主ツレ奥へれ連様がれ出たと云てかんせ。ト此聲を聞くより奥から出る道づれの上方者と。コリヤようごんした定めて。そこらうち尋ねさんしたで有こちもあらう尋ねまふた事ちやなわいのマア。奥へ。彌次是。お世話成やと。ト直よ奥へゆ八の江戸組の太々講も附て御師の方へ行しが彌次郎見へざるゆゑしらぬ人ばかりにて手もちなく色々聞合せても。わからずせんかたなく其御師の方をいで。尋度も當どなく兼て妙見町の藤屋へ泊らんと云たことも承知のことなれば大かた尋て參るであろふ。諸こそ此所よ泊りて待受しなり彌次郎の太々講の駕が間違ひたる一五一十を物語り大笑ひと也ける北八の髪結。まア。かたげへは別條無て目出たひ。彌次イヤもうとんだ目よ逢たと云ふは己が事よ時に髪結さん其跡でわつちも一ツや

らかしてくんなせへ 北八 お前マア湯に這入てきなせへ 彌次 そんならそうよ 一ト彌次
 又入行く北八 一ト又髪結さんおいらが髪いづつと根を詰ていつてくんな。なんだか
 こつちのはらの髪いたばが出て揺があつよ長くてとんだ氣れ氣かねへわたまつさだ
 そして女の髪もどうせへに大きく結てなんのまといねへ筑摩の鍋かぶりといふもの
 だ 髪結 そのかばりお女子のとつときれひでおまじよかな 北八 奇麗い、が立て小便
 そるに誤る 髪結 イヤお江戸の女中も大きな口をわかんして欠びさつすにねから
 色氣がさめるがな 北八 それでも女郎又江戸のとだ江戸のいさばりが有から面白
 此方の誰がいつても同じとでねつからふると云ふ事がねへから信仰がうそひ様た
 髪結 イヤ此方のはうではお前の様なお方が行んしても。ふらんさかい夫でゑいじや
 おませんかいな 北八 貴様己れを安く云なコレやんの事だ 髪結 ヲツトあをのかんす
 とされ升がな 北八 イヤさらなくつてもどうせへに痛へ髪剃だ 髪結 痛ひはづじやわい
 な此髪剃のいつやら研だま、じやさかい 北八 エ、めつそうな。なぜ剃たびことと研

ねへの 髪結 イヤそなるに研と髪剃がへるさかいハア人さんの頭まれ痛のい。あちや
 三年もこらへるがな 北八 どうりこそ痛くて。一本宛ぬく様だ 髪結 なんぼいたい
 とて。たかで命よさはるとい。無がな 北八
 エ、そりやアしれたことよもうく月代
 の能かげんにしてくんな 髪結 おまへ逆ぞ
 りのおきらひかな 北八 エ、其剃刀で逆剃
 よやられてたまるものか頭の皮がむける
 だろう。もうそこいひからぐつと髪を
 つめて結てくんな 髪結 ハイ、コリヤ、えらい
 ふけじや此ふけのどれる事がお升がな 北
 八 どうぞと、れる 髪結 存ん様ならんすとゑいがな 北八 エ、いめへましひとをいふ
 髪結 根のこなるでようお升かい 北八 イヤくもつと引つめてくんな兎角此方の方へ



くると髪かみのへたくそだ根ねを堅かたくつめてゆふとをしらねへ無器用ぶきような髪結かみむす さよなら是これで
 のどうでお升しほト此髪結かみむすこれ見たかといふ程ぐつと根ねを詰つると月代つきしろは三ッ程ひだが
 程痛いたけれ共ともまけおしみ出来できて目めの上うへの方かたへ引釣ひきつりるくらゐ堅かたく引詰ひきつられ北八きたはちの毛けが抜ぬけ
 る顔かほをしかめながら是これでよし〜ア、能心いこころ持もちだ髪結かみむす ナント夫それで。好御よろこ坐まりまし
 よがな北八きたはち あんまりよすぎて首くびが廻まらぬ様ようだト此内彌次郎湯このうちやじらうゆ 髪結かみむす サアあなた髪かみな
 されませんかいな彌次やじ イヤどうか湯ゆ入いたらぞく〜して風かぜでも引ひた様ようだ私わつちのママ
 あしたのとよしやせう髪結かみむす さよなら御機嫌ごきげんよふトでてゆく此内女膳このうちにょぜんを持もいで名々
 び居いたりしぐドレ飯喰めくをかいな女にょ 今日けふのしけでお肴さかなが何もおませんわひな彌次やじ 是
 の御馳走ごちそうサア北八きたはち どうだ彌次やじさんわつちが箸はしのどちにある彌次やじ エ、此男このおとこのソレ膳ぜんよ
 つみてあらア北八きたはち どつてくんどうもうつむく事がならぬへ彌次やじ なぜならぬへチャ
 く手前てまへへの顔かほのどうした目めがひきつめて狐きつねつさを見る様ようだぜ北八きたはち あんまり髪結かみむすめ
 がどうぎに根ねをつめて結むすやアがつたア、ア、ア首くびをいごかそ度たびよめり〜と髪かみと毛けが
 抜ぬける様ようだ上方かたがは ソレお前まへお汁じゆが灑まれるわいの。のアレ飯いの上うへにお汁じゆ椀わんを置おくすさかい

アレ灑こぼれたわいの。コリヤもうとつとやくたいじや北八きたはち 彌次やじさんどうぞふめてくん
 彌次やじ いめへましい男おとこだ。そしてママうつ向むかれぬ程ほどよ。なぜそんな堅かたく結むすはせた。も
 うちつとゆるくすればいい、又手前てまへへ大方おほかた髪結かみむすをいぢめたるふから上方かたがは そじやさかい
 そないなめあはんしたればやあろぞいな北八きたはち イヤもう物を云いふさへわたさへ響ひびけ
 てならぬ彌次やじさんどうぞ此難義このなんぎをたすかるしよういあるめいか彌次やじ ドレ己おれがちとゆ
 る〜てやろうト髪かみの根ねを持もていやと北八きたはち アイタ、アイタ、どうぞる〜彌次やじ 是これで宜よろかる
 う北八きたはち ア、ちつと首くびが廻まつてきた。エ、とんだめに。あはしやアがつた
 わなどりしむくひは罰ばちが當あたりまへ。油断しゆだんのならぬ伊勢いせの髪結かみむす
 自らみづか斯かよみて打笑うちわらひつ、支度しやくどしまひは膳ぜんも引ひけたるに何いれも打うちくつろぎて咄はなしの
 序ついでよ上方かたがは ナント今宵このよひ是これから古市ふるいちへいこかひなまだ宮巡みやめぐりもせぬ先さきにもつてへねへよ
 うだぐの儘ままの皮かわ。やらかしやせう上方かたがは 行見いけみやんせ私わしやあこで。年々ねんねん捨すた金かねが千せんや貳千にせん
 のこつちやなるさかい何なんぼなぞ。わーがうけこむじや。サアはやういかんせんかい

な彌次エ、そんなら己も髪月代をればよかつた上方御亭さんへ鳥渡きておくれんかいな 此宿は亭主ハイ御用でお升かいな 上方お江戸のお客が是から山へ登るといな 妙見町のつうげんよ古市亭主 能御座りましよ。ね供まで参りましよ 上方アノ牛車樓か千束屋よしよじやなるかひな 北八太鼓の間とやら何所も有りやと 亭主太鼓じやおません鼓の間は事かいなソリヤ千束屋でね升がな 上方其千束屋が能御座りましよ ト皆々仕度するうちはや日も暮て時分は好と亭主を案内として三人とも出の三味線いさましくうかれトて千束屋と云るよ至れば女共皆々走り出 よふ御座んま直まね二階へ 藤屋のね連申てもいひかいなサア御案内致しませよ ト亭主を先に各々二階へ上り座と 上方時に彌次さんこうしよトやなるかいな。ね前方をね江戸であらう大きな店の番頭衆に。まよじやなるかいな 藤亭 そんなら能御座りませよ 上方然し訛らんしてわかんわいの上店と云もんじやさかい京談で遣んせよや。工合が悪かるが。どうじやいな 彌次 そんな事持てこいだ。とつぱりとわつちが上方でやらかしやせう。コレへね女子衆へ鳥渡さ



てねくれんかいな私やなんじや、ら。とつともうはや。あろう咽がかわくさかい茶々ひとつ。持て来てねくれんか 女ハイ彌次 ナント京談をらいかへ、畜生めが 上方イヤさよどる者じや。でけたト此うち女酒肴を持出し進める藤屋初て段々廻ると上方人引請てコレね仲居れ山さんいどうじやいなコレ方いな。ね江戸はえらい。ね店ね番頭さんじやさかいなんじやるとねやまさんをおりたけ出さんせね氣入と百日も二百日も御逗留でお金のあると根からはから。とつとおかまひなるお方じや 藤亭さ

屋與太九郎が先刻なるく引合て置たアノ美く可可愛らしひ辨才天女のお辨女郎
 といふお山さんの則ち京都千本通中立賣彌次エ、やかましひ千本も百本もゐるもの
 かへ何でもから初手つべんよ己が酒盃を差て置たト云ハ江戸よてハ女郎の座敷よ
 むれ共。此邊よてハ左様のとの無く只内々よて茶屋れ女房ゐるひは女なまよさ、や
 きてわれハ誰。是ハ誰と相方を極めて置ゆゑ京れ人先刻仲居へ渡りて此中にていつ
 ち上志ろ物を自分の相方と定め残りて彌次郎北八と己がさりやくして極めて置志故
 彌次郎ハ其事を一向しらせ江戸のかくよて盃を差たるお山を我が相方と思ひ居たり
 しゆゑ儲こそ此いさくさおこ。是ハいさアノお山さんハ。此人さんハ相方お前さんハ
 りたり仲居彌次郎をなだめて。此中ではアノおやまが目につゐたから
 こちの島田詣さんじやわいな彌次馬鹿ア云な。此中ではアノおやまが目につゐたから
 夫で己が酒盃を差したよ違ひハなる。そこでわしがお山かひな上方ハテ悪ひがてん
 じやわいれこなさんハアノ江戸ハ何所じやいな彌次江戸ハ神田の八丁堀枋面屋ハ彌
 次郎兵衛様と云ちやアちどひねくつた奴様だア上方其ハ江戸ハ神田八丁堀枋面屋の
 彌次郎兵衛殿と云ひねくつた奴様ハ京都千本通中立賣ひよひと上る處邊栗屋與太九
 郎が相方ハお山勢州古市千束屋の彌次エ、何を扱しやアがる邊栗屋の與太九郎もわ

○北八 無聊

きれらア上方イヤ此ハお江戸神田八丁堀枋面屋の彌次郎兵衛殿京都千本通中立賣上
 る所。邊栗屋與太九郎を京都千本通中立賣上る所。邊栗屋與太九郎殿と云ばまだしも
 夫を京都千本通中立賣上る所。邊栗屋與太九郎と呼捨よさんしたのそこで持てから
 又京都千本通中立賣彌次エ、喧ひよくーやべる野郎だ北八ねらアそんなとより太鼓
 れ間が見てハ太鼓の間ハ何所だ女太鼓れ間といなんじやいし鼓の間のとかひな
 北八チ、其鼓く上方イヤ鼓じやあるが。なんじやあるが。此邊栗屋與太九郎が
 相方じやわいの彌次コレ悪く洒落るな。なんでも鼓の間の己がのだ。悪の敵さ役じや
 アねへが。いやでもおふでも抱てねる藤亭ハ、あの廣の鼓の間をかいな彌次ヲ、
 廣くてもせまくても願着はねへ己が者だ上方イヤくくくそりやさ、んわい彌次
 さ、んとも有ものか誰が何と云ても京都千本通中立賣枋面屋彌次郎兵衛様が相方だ
 ハ上方イヤ此ハお江戸神田八丁堀上る所邊栗屋與太九郎が買ふたれじや北八ハ、お
 前へ方は何を云やらどつちがどうだかさつぱり分らなくなつたな女をとして此お方は

○彌次
 憲中京
 談所カ歟
 非常戲
 一生懸
 命俱不
 戴カ天之
 仇耳

京のお方じやと云んしたまものいひぐいつの間もやらお江戸じやわいな 彌次 べら棒
 め此いそがまひよ京談がやつて居られるものか 女 あんまりお前さん方がいさかふて
 じやさかいソレ見さんせお山さん方は皆逃ていかんしたわいな 彌次 いめへましひも
 ふ歸るべい 女 マアようお升がな 藤亭 モシこうまよかひな是から柏屋の松の間をお目
 につけふわいな。但し麻吉へお供しよかいな 彌次 いやだく己らア是非歸へるく
 藤亭 能御座り升 彌次 イヤどめやアがるな。いめへましひ
 色々あゐさつし留ても留らざふりはなし 是いしなんじやいし 彌次 とめるなよせへ
 出かけるどころへ相方のお山初江立いで 初江 お前さん斗りをなるもやア歸るく 云はんすがなわしがお氣もゐらんれ
 かいし 彌次 イヤそうでもねへが愛をはなせく 初江 わしやいやいし 又かけたま
 引とらへむり無体 彌次 イヤ羽織をどうするよこせく 草入を取られる 彌次 コレ
 又羽織をぬかせる 初江 じやうのこわぬ人さんじや 物をぬかせ様ととる彌次郎の垢
 サ己らア歸るく 初江 じやうのこわぬ人さんじや 物をぬかせ様ととる彌次郎の垢
 じみたる越中ふんごーをまめて居たりし故裸にされて 彌次 コレくもうかんに。志
 いたまらぬど大きにへさるさ若着物を兩手に押へて

てくれ。初江 そじやさかい。こゝよ居さんぞか 彌次 ぬるどもく 仲居 初江さんも堪
 忍してやらんせ 藤亭 サアく能御座り升是へく 彌次郎が手を取り 北八 ハハ
 面白く 彌次さん斯もあろふ
 ひくつけき客も今宵の持るなり。古市のおやまなれども
 此一首に皆々笑ひを催ふし藤屋は亭主仲居共がそこら取片付て夫くよ坐敷を設け
 酔倒れたる上方者を引立て案内するよ北八も俱も出行けバ跡は彌次郎一人残りたる
 に 女 サアくお前さんも。ちと彼處へ 彌次 ド行やせう。どこだく 立てゆく此彌
 次郎至て見へものよて彼のよしめたる如き。ふんごししめたるが殊の外氣よかり。
 ひよつと見付られたら恥れかき揚ならんとふんごころの内よそつとはづれんじの窓
 より庭の方へはふり出し跡先を見廻し人 斯て夜も更渡るよ奥の間の川崎おんども
 の見ざるよ安堵して仲居跡は附そひ行 斯て夜も更渡るよ奥の間の川崎おんども
 おのづから鎮り旅客のるびさけ聲かまましく鐘の音もはや。セツ響て鶏のこゑ。上方
 よ鳴ひ夜もしらみか、る明り窓の障子に驚き起きあがりて目をこどりながら 上方サ
 アくどうじやいな。起さんせもういのわいな 北八 彌次さん日が出たア歸らぬへか

あつちらの新造しんぞうが懸かへぶつ、けてやるふト錢二三文なげるとちトベラベラト北八
 ドレ已すでが當あてて見みせようハア是これのしたり 上方かた 何なんとしてお前方まへかたがどなるはり附つけさんし
 ても。的てきらぐ當あてさともんじやなるわいの 彌次やじ 今度こんどの見みなせへハア是これわいな 北八や
 〳〵差さくるみやらかしたな夫おとこでも當あてらぬコリヤ仕し様が有ある。あんまり顔かほが憎にくいトちい
 ころを拾ひろひてなげ付つるとかの女おんなばちよてちよト彌次やじ アイッ、北八や 〳〵ハハハ、こいつ
 ひと受うなげ返かへせば彌次やじ郎らうは顔かほへびつしやりト彌次やじ アイッ、北八や 〳〵ハハハ、こいつ
 のおは笑わらひだ 彌次やじ、いてへト

とんだめに相あれ山やまとや打うち附つけ。石いし返かへしたることぞおかしき
 斯かて爰こゝをうちすぎ中の地藏ぢざう町まちに至いたる。左ひだりの方かたは本ほん誓せい寺じといふ勝景しょうけいの地ちわり又また寒風さむかぜ
 と云いる名所めいしよもあり五知ごちの女おんな來きた。中河原なかつがはら。様さま々々しるそ又また追おひなし。夫それより牛谷坂道うしやまかみちは掛かれ
 の女おんな乞食こじき共ども。けはひ飾かざりたるが。往來わうらいは錢ぜにを乞こふ又また十一二三じふいちふたさんの女おんな共ども。紙かみよて張はりたる笠かさの
 色いろどれるをかぶりて。やてかんせ。お江戸さんじやなるわいな。先まへな島しまさん花はな色いろさん
 頬ほかぶりさん。やてかんせ。ほふらんせ 彌次やじ やかましひ附つけなく 乞食こじき アノいはんすと

いなお江戸さんじや。ちやと下くだんせ 北八や エ、ひつ張はるソレまくそトよいかげん
 錢ぜにをゆふり出だせば 〳〵よう下くだんしたや 〳〵トひどり〳〵禮れいをいふ此こゝ先に又また七八はちやう歳さい斗とりの男おとこ
 乞食こじき共ども拾ひろひて 〳〵トひどり〳〵禮れいをいふ此こゝ先に又また七八はちやう歳さい斗とりの男おとこ
 きたるが手てよさいはひ扇あふぎ子こなどを持もつ 〳〵ヤレふれ〳〵十鈴川じゆりやがわふれや〳〵千早振神ちはやぶらの
 庭にわのわさ清きよめざるやさ、らのゑいさら〳〵ゑいさらさソレ天中てんちゆうじや張はりひぢじやや
 てかんせ〳〵 北八や ソリヤやてかんせぞ。しかも四文錢しもんぜにだ 乞食こじき 四文錢しもんぜになら釣つを。三文下さんもんくだ
 んせ 彌次やじ をむつ虫むしのいひとをいふ時に此橋このはしの宇治橋うぢはしと云いのか 上方かた さよじやアレ見みさ
 んせ網あみで錢ぜにをよう受うてトヤ 北八や ドレ〳〵 〳〵ト橋はし上かみより覗のぞき見みれば竹たけの先さきよ 上方かた 彌
 次やじ さん小錢こぜにがあらばちよとかさんせ 〳〵彌次やじ 郎らうが錢ぜにをかりてさつ〳〵 上方かた ゑろふ面おもて
 白しろいなよう受うくさる。もちつとほつてこまそかい。コレ北八やさんお前まへもちとかさんせ
 ソレ又またほるぞ〳〵 〳〵ハハハ、ゑらい〳〵 彌次やじ コレ京きやうのお人ひとお前まへ人ひとは錢ぜにばかり取とりてなげ
 るちとかめへの錢ぜにをもなげなせへ 上方かた よいわいなお前方まへかたの錢ぜにじやて、〳〵私わがが錢ぜにじや
 て、かはりやせんわいの 彌次やじ それだどつてあんまりあたじけねへ 上方かた ナニ私わがが此こゝ前まへ

参宮した時はな。さかんせゑらいあやじやあつたわいなこ、で錢五貫か拾貫やつたわいのあんまり面のにくる程よう受けおるさかい何じやると今度の綱やぶつてこまそと。ふとこころよ丁銀が一枚あつたを。つひとやつてこましたら。矢張。綱で受くさつたさかいコリヤとウトやいな。丁銀はつたら綱が破りよかと思ふたよ。ぬからたわいとや。ぶとして綱は留りくさつた。しらんと云たりや。下におるやつめダソリヤ留るはつじやとぬかしくさる。なせじやと云ふと、テ綱の目に金留るじやと。ゑろらわしをへこましくさつたわいの。ハ、ハ、ハ、サア、く、いこわいな、

なげ錢を綱に受つ、往來。の人を茶よそる宇治橋元
 是より内宮一の鳥居より四ツ足の御門猿頭の御門をうちすぎ御本社にぬかづき奉つる是天照皇太神にて神代より神鏡神劍を取て鎮坐したもう所なりと
 日よままして光り照そふ宮ばしら。吹いれ玉ふ伊勢れ神風
 爰は旭の宮。聖の宮より初めて河供屋。古殿宮。高の宮。土の宮。其外末社。悉く。記と

よ暇なし風の宮へ掛る道よ。みも裾川と云ふあり
 引ずりて幾代かあどをたれたまふ。御衣裳川の流れ久しき
 すべて宮巡りの内自然と感涙肝よめいじて有難さにまじめとなりて洒落もなくむだも云ねばしづらくの内よ。順拜おはつて元は道またちいで頓て。妙見町は歸り爰にて。かの上方者と別れ。彌次郎北八兩入のみ藤屋を晝立として外宮へ参る。是則豊受太神宮なり。天神七代の始め。國常立の尊と申せし御神なり。神璽は宮。寶劍の宮。其外數多の末社を拜み巡りて天は岩戸に登りたるに彌次郎いかガしけん。しきりに腹痛みて。なやみけるゆゑ早々に此所をかりたち。かたはらに休みて丸薬など用ひ兎角とるまたえがたければ急ぎ廣小路に至り宿をからんと其所此所を見廻り内ある宿屋は亭主 モシ、くお泊じやおませんかいな 北八 アイ連の者が少し出ががふりそうだから宿をお頼み申やせ 亭主 サアお這入りなさんせソレか鍋奥へおどもせんかいやいな 女能うお着でお升 北八 サア彌次さんあがんなせへ 彌次 アイタ、北八 エ、きたねへ

顔をすゝるお前へコリ何ぞの罰が當つたのだ彌次ナニサ罰を喰た覺へはねへ大方今朝の飯が當つたれだろ亭主お飯も。あがりつけなさらんと當る事がおまじよわいな北八エ、コ、いくちのねへ事たサア、彌次ア、イ、タ、ト北八にかわゆる通る亭主もさぞ御難儀でおまじよお薬でもあがりまいたか。さるわひわたくしのと荷物運びころの妻が今月臨月でお升がな。昨日からちとそぐれませぬのでいんま醫者様を呼よ参じたがあなたも見てお貰ひなさんせんかいな彌次夫はさうぞお頼み申安亭主かこまりましたト勝手へ立てゆく彌次郎北八さうだ湯でも茶でも酒でも呑たくいねへか北八馬鹿ア云なアイタむせうら腹がごろくなる北八雪隠の何所もある尋てくりや北八お前何所も置た袂までもねへか彌次あやうつくぜナニ雪隠が袂もある者だ何所もあるか見てくりやといふ事よ北八ハアさうかドレ見てやろう。あつたくアレ様側の先も落てある彌次まだぬかしやアがるアイタト漸々の事立上宿れ女勝ハいお醫者様がお出たわいな北八サア、是へト此内近所の醫者は手より出

茶は木綿紋付は黒縮緬の肩エン、是は不順な天氣あひで御座るドレおみやひけたる羽織を引掛たる坊様ト北八のそはよせわり北八イヤ私しでの御座りませぬ醫者ハテ達者な人くをト北八のそはよせわり北八イヤ私しでの御座りませぬ醫者ハテ達者な人の脈から見くらべねバ病人の脈がわからんわいの。まづ貴様お見せなされト北八とりしバハア成程貴様はなんともなる様じや北八左様で御座り升醫者お飯のさじや北八ハイ今朝程飯を三膳汁を三盃食ました醫者さうである。平は大方一ッ盃じやあろ替てり参るまい北八左様で御座り升醫者さうじやあろ。この脈体でいさうも何んともなるよふじや北八左様で御座り升醫者ナントよう當りまいたるふ凡そ醫の意なりと申て脈体をもつて勘考致す所が第一で御坐る氣づかぬなひ最早お暇致そふ北八モシ、病人を御ろうじて下さりませ醫者やんよさうじやあつた。私のかはつた癖で兎角病家へ参つて病人の脈を見ることをさうもわされて成んわいの然し見ずとも一れた事じやが。次手に見て、んじよ病人のいづこに御坐る北八ハイ只今雪隠へ参つてわたり升コレ、彌次さんね醫者様がお御坐つた早く出なせへ

能 自然良 醫者是 而有三此 ○彌次

ト大きな聲をすれば「イヤ未出られぬね醫者様どうぞ是へれ出下さりませ 北八
 彌次郎雪隠の中から」イヤ行れる者か無駄なことをいふ 彌次 そんなら今で
 エ、めつそふなれ醫者様がそこへ行れる者か無駄なことをいふ 彌次 そんなら今で
 〳トやう〳雪隠よりいづれば醫者 〳ハ、ア貴公のコリヤ血の道じやわいの兎角
 〳しかつべらしく彌次郎の脈を見て 〳ハ、ア貴公のコリヤ血の道じやわいの兎角
 臨月なぞにのれこるものじや 彌次 イヤ私の孕んだ覺への御坐りませぬ 醫者 ナニ懐胎
 で無ハテめん様な 〳イヤコ 〳わーが師匠が悪い廣小路の伊賀越屋から呼にれよこした
 〳ガ〳おこの病人の産月じやさかい大方血の道がねこつたのじやある。其つもりで藥
 盛がい、とれ教てれこしたが〳そりや貴公の事でのなかつたわいの 北八 左様で御坐
 りましよ血れ道の爰れ内儀の事で御坐りませう。此男のそれでい御坐りませぬ 醫者
 さよじやコリヤわしの間違ひじやわいの。然しなんなら貴様も夫よして置かんぞと
 藥盛にも一所にして面倒になうて能がな 北八 成程コリヤね醫者様のねつしやる通り
 彌次さんね前へも血の道よして置がい、ね 彌次 どんだ事をいふ男よ血の道があつて
 たまる者か 醫者 イヤ〳〳外の病氣も面白かる。何も私に稽古の爲じや一體貴様は何

病ひじや 彌次 私は先刻から虫がかぶつてなりませぬ 醫者 大方コリヤ腹の内をかぶ
 るじやある 彌次 ハイおつしやる通り腹の外では御坐りませぬ 醫者 どうじやあるコレ
 〳女中〳供の者よ藥箱をこせと云て下んせ 女 ハイ〳〳かーこまりましたイヤもー
 お供の人は見へませんわいな 醫者 見へん筈じや連れてこんさかい藥箱のわしごもつて
 来たわいの 〳トさげてきた風呂敷包 〳女 ナ、おかし。あなた竹のじで煮豆盛様に
 てじやわいな 北八 ハア聞へた敷醫者様だからそこで竹のじをね遣ひなさんと見へた。
 〳としてあなたのを藥袋 〳ハア繪が書て御坐り升がどう致した事で御坐り升 醫者 イヤ
 〳ね尋で面目なひが生得手習を致した事かなるさかい 北八 ハアアあなた無宿者なア
 醫者 左様〳〳かあもく字がよめぬ無宿じやさかい夫で此様よ藥の名を繪よ書て置升
 〳トやて 北八 是の面白い左様なら其道成寺の繪いなんで御坐り升 醫者 コレハ桂枝じや
 〳て 北八 へんま様の大方大黃で御坐りませうがコノ犬が火に當つてれるの 醫者 陳皮
 〳 北八 コノ産婦の傍に小便して居る 醫者 したらと山梔子 北八 印判に毛のはへた

ト是より悦びは酒汲かはして取り揚婆々の間違ひやら何やらかやら咄しわひて大笑ひとなりける目出たし〜

○六編

云ふ旅の恥の書捨てゆく落書の國所の欄干よ。とまりおのづから往來同國の
人れ目を慰さめ袂り行篋れ笠印の態と己れひとり心をよろこばしむるも智ともよ
驛路の業ぐれ相ひ宿の木枕と結ぶ縁の帳外。二方荒神れ隣り同士の長屋附合
の外にして其心〜と出る儘をーやべりあくまでに喰ひ掛取道連にせざれば晦日の
愁よわはせ米櫃脊負て出ざれば鼠追ふ世話もなく。名よしおふ東男も薩摩芋に髯を
なで。花まだき京女郎も團子れ串と頭りをかき。しらぬ火け盡とたはけに欠け落し
て走るわれば雲井路の道草喰ひ。遊山旅の。れろつくわり並松の根と腰打掛けて金比
羅参りれ樽を開き。街道の真中に。ひよくり出して諸社順拜の鈴口を振る霧中れわ
り様まよと命の洗濯もの引ばり股引草鞋は何國迄も足にまかせる雲水の樂しみゑも
云れず爰に東の都神田の八丁堀邊んに住む彌次郎兵衛北八と云る二人連のなまけも

○悪量

○着想

妙

れ神風や伊勢参宮より足曳さの大和路を廻り青丹よし奈良街道を経て山城の宇治よ
掛り。爰より都もねむむかんと急ぎける程に。やがて伏見の京橋と至りけるに。日も
西にかたむき。往來れ人足早く下り船の人を集める船頭れ唇々やかましく。サア〜
今出る舟じや乗んせんか大坂の八軒屋船じや。乗ていかんせんかい 彌次 ハ、ア是が
かの淀川の夜舟だナント北八京から先へ見物する積で来たダ。いつそのこと此舟
に乗て大坂から先へやらかそうか 北八 夫もよかるふモシ乗合も有りやすか 船頭 そふ
さかゐの。乗なら早う乗んせ。いつきに出すさかい。コレ〜草鞋どゐて乗んせ。ゑら
いへげたれじやな 北八 エ、何をぬかしやアがる氣のつゑ、べら棒だ 彌次 コレ北八手
前の包も一所に己が風呂敷と包でおこう 北八 船頭さんコリヤア何所へそはるのだ 船
頭 そこな坊様のぬきへ割込んせ 彌次 御免なせいヤアゑいどな ト二人ながらどもれ
乗合 コリヤゑろふつめくさつた船頭さん布團一ツかささんせ 船頭 ソレどらんせ。サア
〜皆ゑいかひな下ゑ居て下んせ苦ふくさかい 商人 錢買なされ錢はよせざり升かな



商人 水からさとう餅く 商人 かん酒よご
 ざり升かいなわんべいよし 船頭 此内
 も舟も苦をふめて 舟の追風も帆掛て。走
 仕舞ひ掉差出て 唄 我のこがれて身をわせる ソウレソレ
 なんぞいコリヤゑろふ空ダ悪る成たふる
 かしらんわい 乗合 船頭さんゆふべのちう
 ーやう島じやあろ。精進が悪るい。さかい
 コリヤ雨トやあろぞいの 時よ何方
 もじよらかゐて居なさらんか今の内味能
 せんと後又工合ひが悪なるさかい 商人コ
 レお前ちと退てかさんせ粽の上にいしか
 つてじやわいな 大坂の人 コリヤ無綱法鬼

かく乗合のお互ひは何じやろとふしやうしてくれなされ 京都 能わいなお前大坂の何
 所じやいな 大坂 私や道頓堀 京都 かいな道頓堀の衆は皆藝子じやナント爰で何なと一
 ツやりなさらんかいな 長崎の人 コリヤよかたい。船中の寝ふり目覺しにわなた衆。
 一ツ宛藝能やらしやつたらよかたい。うんども長崎の者じやガ。能毛川島の南瓜枕
 で。筭さしぼつさりでもやるふはいよヲ 越後の人 コリヤゑいとんじ。わしども。越
 後れもれだが長崎の兄やさが。やらしやつたら。わしも國風のおけさ松坂でもかたる
 べいと事 北八 こゐつり面白へマア長崎のお客から始なせへ 長崎人 よか 是しこや
 ろふはい 手を打た。唄 お前よかばた。わしよ振とて、大分 色女とちざらんすコ
 リヤ蛙が飛なら桶かぶせ夫でも飛ぶならきねおけ。コリヤ 何じ
 やいな 乗合 イヨくゑらでけトや 越後人 私どもやるべい皆な夫から トコト どはや
 してくれさつしやい 長崎人 よか 合點あろふ 乗合皆々手 を打た。越後人 お長
 な良久かんだ豆出たかお長な 乗合トコト 越後人 新瀉一番水牛の櫛を 乗合トコト

越後主よさつくれべいと六百文で求めた乗合トコ彌次ハハハ面白へく京都
 イヤ江戸は客も何ぞ所望しよじやなみかい彌次ソリヤもう琴三味鼓弓何んでもち
 ど宛のやりやそが爰にやアそれな物のぬへからはトまらぬへ京都お前へのこうせき
 では。聲色がでるじやある誰なと江戸役者やりなされ彌次聲色も二十や。三十ばかり
 は遣ひやそが誰よしよふ源之助か三津五郎かイヤ高麗屋よしやせう然し江戸役者は
 お前へ方よやア。分らぬへからのつまらぬへ大坂ハチゑいわいの一ツやりなされ彌次
 味増じやアぬへが聲色の江戸でも一番といふ男さ誰ても後ろを唄ふ人があるとそつ
 ぱりやつて見せるがなア京都後ろ唄ふとは呼出しのとかいな私がやるわい口三絃じ
 やチンツヤン。是はお江戸の堺町や吹きや町も名も高き役者聲色のどうじやいな
 誰じやいな松本は幸四郎でせへチン。乗合イヨ松本チ彌次まんまとうばい取た此
 一巻。是さへありやア出世の手掛り大願成就添じけなる京都コリヤやくたいじや。私
 や江戸は五六年居て此間。戻つたわいな高麗屋はそなみな。こうせきじやなみせん

○彌次
二十八
番

もれ大坂わし一ツやろわいな京人。是のぬつからでませぬ儲又次の役者名の誰じや
 いな大坂やつぱり今のじやト此大坂者の江戸にも居て聲色もまんま。まんまと奪ひ
 取た此一巻。是さへありやア出世の手掛り大願成就添じけないト無調法乗合イヨ高麗
 屋ア京都コリヤきよといく大坂のお方が。お前のお高麗屋との聞へ
 んわいな彌次さこへん筈だコリヤア信州松本の者で幸四郎が弟子の胴四郎が聲色だ
 京都そんなあつちやあるぞいなハハハ。ト船中彌次郎のへこんだのをおかしがり
 内船の早彌次時。北八飛んだ事をわされた船。乗前に小便とれば。よかつた者を例
 淀を過て。は通り船でいどうも。あぶなくつて。しよくるこまつた者だコレ船頭さん鳥渡船を附
 て貰ひてへの船頭あがるのかいの彌次小便。船頭。船べりへ。ちよく。こ。なつ
 て。ひよぐらんせ。彌次夫が。出さきりやア云分。ぬへア。もう。出そう。成て。來
 た。前借切。よして。十二三の前髪連たる。隠居らしき。おみ様宵より彌次郎北八と咄。とな
 として。居たりける。先刻より。布。隠居。モシ。お前。小用。に。お困。り。なら。ぶ。と。付。なが。ら。わ
 團。か。ぶ。り。て。寐。ころ。び。居。な。ぶ。ら。

○桑名
船中有

のト樽の酒をーびんよの隠居長松とこな茶碗をこせ。サア、ほんまの酒じやソ
 けて火鉢の上に掛て。ト茶碗を差出と彌。いただきやせう。隠居虫のゑいお人じや肴わけ
 レお前方さそかい。次郎ちやつと引取。ハイ、是は何で御座りやと。隠居ワリヤ鯨の油取た
 よかい煮殻あがるかいな。彌次ハイ、是は何で御座りやと。隠居ワリヤ鯨の油取た
 跡れ身じやさかい煮殻と云わいな。彌次い、物で御座いやとね。サア北八さとうか。ト
 八へ茶碗を廻ししびんを取てつぐ新らしきしびんと對て。北八小便の交らぬ酒は又
 なるはどだいじもあるまいと一杯引受ぐつと呑で仕舞ふ。ト小便の交らぬ酒は又
 格別だ。ハイ上やせうか。隠居皆乗合のお衆へ一ッ宛上て下んせ。北八左様ならお隣りの
 ト次に居た越。越後ヤレふとつ。いたくべいとと。ト茶碗取おる北八。ト越後ソリ
 後の人にさそ。ト小便のそる焼たごじやア御座らなるか。北八ナ。此しびんの新しひから奇麗さ
 いでやれバ。越後ア、ゑいとん。サア長崎は貴兄飲つしやるか。ト茶碗を廻はせ
 つどほして。ト小便のそる焼たごじやア御座らなるか。北八ナ。此しびんの新しひから奇麗さ
 ナイコリヤ氣のどんくうなとばよ。隠居だん。そつちやのお方へ上て下んせ。長崎
 然らあんだへさんじ升たる。ト其次の人へさそ。是は病人と見へて色れ青ざめたるわ
 斗り借切にしてかゝるはうれ。病人か。私や酒のいかんさかゝるこなん。一ッ頂戴かんせ。ト親
 親父と二人り連にて居るが。

○因果
應報

父よめづり先刻よりしびんの奇麗なる親父モシ、のバかりながら其しびんこつ
 ことも聞めたる事なれば一向かまひず。ト此親父酒をきと見へつ、けて二盃やら
 ちやへ下んせ手しやくにやりましよかい。ト此親父酒をきと見へつ、けて二盃やら
 郎兵衛取。彌次サア隠居様わけませう。隠居イヤお前ま一ッ呑でおこさんせ。彌次ハイ
 りつぎて。ト此親父酒をきと見へつ、けて二盃やら。ト此親父酒をきと見へつ、けて二盃やら
 ト息まぐつと呑て茶碗を投出と。ト此親父酒をきと見へつ、けて二盃やら。ト此親父酒をきと見へつ、けて二盃やら
 八彌次さんどうした。彌次どうした所か。コリヤ酒じやアねへ小便だ。親父ハ、ア是
 したたりそ、うしましたわしら。が所れ御病人のしびんと取違へましたサア。酒の
 の爰あるソレ取替て下んせ。北八ハ、是つ大でさ。彌次エ、もうどうしたら
 よからう此位へなら己が小便を呑のまだしもアノ病人めがエ、わる喚るゲエイ。ト
 ペッ。北八ハ、ハ、ハ、ハ、の病人れ顔をみな瘡と見へて頭から首筋の當り迄じ
 く。彌次エ、もう云てくれるな咽がさける様だ。ア、くるしひゲエイ。ト北八
 兎角お前の小便がた、る舟ではもう禁便よするがい、そこで一首浮だがどうだ。

小便を人に吞せし其むくひ。己も吞でよいきびしよなり

此騒動は船中各々寐むりを覺し。大笑ひとなる内。舟にはや平方と云る所ぢかくなり
たると見へ商ひ船。爰よあぎ寄く。商人。飯しくらわんかい酒呑んかいサア。皆起
くされ。ようふさるやつらじやな。ト此舟に附て。遠慮なく苦引きひろげわめき立る
人のしるところ也賣言。乗合。此商ひ舟は。ものいひがどつに云を名物とする
に買こと。乗合。コリヤ飯持てうせい。ぬい酒が有るかい。北八。いか様腹が
へつた爰へも飯を頼み升。商人。我も飯喰かソレ喰へ其所やのわろは。どうじやい。ひも
じそふな顔してけつかるが錢なみかひ。彌次。イヤ此べら棒めら何をふささやアがる。乗
合。此汁の無味替りぬから。ぬるうていかんわい。商人。ぬるかア水廻して喰ひぬれ。乗合
何ぬかぞぞい。そして此芋も牛房もくさつてけつかる。商人。其筈じやぬい所内皆内
焚て喰て仕ふたわい。長崎。イヤこやつ。太膳奴よテ。いかな。ちうつるべつてん。その
ぬしかよふべい。越後。頭部。よやして。やつくれべいか。商人。ちよこざいぬかさぞと。早
う錢おこせやい。コレそこな親父錢どうじやい。親父。此奸盜めら。たつたいま取く

○蒲鋒
目之食
小屋

さつてコリヤ早ういぬやい。定めしれどれが女房妻の晝の袖乞して生米かな喰らふ
さかい今頃のふつくと腹ふくらして白い泡吹て居よぞい。商人。我れが内の大方
四條の蒲鋒トやある雨が降そふじや氷の出んさき早ういにくされ。彌次。イヤこいつら
ア云はせておきやア途方もぬへやつらだ。楯頭。張飛ばすぞ。乗合。コレ。お前腹立
さんそなアリヤ爰の商なひ舟であなるに。ものをぞんざいよ云のが。名物じやわいれ
彌次。夫だつてあんまりな。商人。ワアイおほうよ。トこぎ出。彌次。コリヤまちあが
れあほうたア誰がこつた。ト一人。りきんで思はずおがるひやうし。アイタ、
わらが膝頭ふんだ。長崎。うんどもが頬。ふう。大分うつた。アイタ、彌次。コリヤ御免な
せへ。トやう。斯て船のひら方過たるころ雨催ひの空。俄又暗くなり降出しあは
やと見る間も様をつく大雨となり。どまを漏ば乗合の上を下へ。と。さわぎ立船頭も斯
ていはたらき自由ならず頓て堤に船をこぎよせ。しづらくか、りて見合せけるが。爰
の伏見と大坂の半途よして登り船も降り船も皆落合混雑し。がたびしと。岸よ寄て今

やと露を待居たるよ。凡そ一時余り過たるとればしき頃、漸く雨やみ雲されて月の影
 八幡山よさし出たるよ船中各々勇みたち彌次郎北八も苦ひさわけ顔さし出して。此
 景色をながめ居たるが彌次ハアもう何時だるふな時に北八又こまつた事が有わい雪
 隠へいきたくなつた北八エ、きたねへ事ばつかりいふ彌次どうも舟ではできぬ。イ
 ヤさいはひ爰よか、つて居る内。ちよくり上手へ上つてやらかしてこよふ北八ホン
 ニ余所の船でも人が手水よ上るようそだ。早くそうしなせへ。イヤわつちもれ相伴が
 したくなつたモシ船頭さん鳥渡上つて来たいが能かねへ船頭用たしになら早ういて
 こんせわしら今飯くて仕舞ふと直し船を出ささかい彌次草鞋何所だ北八ナニサ
 はだしてあがるう乗とき足をど、げん能よト兩人般より彌次ナントい、景色だな
 何所らでやらかそふ北八チャットそこに水溜りがあるもつとそちらへア、なるはど
 い、月だ
 一刻を千金づ、の相場なら三十石の淀川の船



斯口ずさみて思の勝景よみどれ居たるが此内岸よか、り居たりし舟ども追々漕出
 と様とよ北八彌次が乗たる舟も今でると見へて船頭共。もやひ綱をとき棹差れべて
 二人を呼立るよ何れの船も乗合のうち土
 手よ上りたる者ども一度さにおりたち混雑
 し彌次郎北八やうくのよとよ人を押分飛乗
 たるは大坂八軒家け登り船也 此二人余り
 られて大きよ。狼狽。今迄乗て来りし。伏見
 の船と心得其次よならびて掛り居たりし大
 坂の登り舟に飛乗たるが苦の内くらく間違
 たる舟とも。心附ず此殊更舟よも。乗合の内
 堤に登りたる者ども二三八あれば夫らかと
 思ひて舟の中にもたがひよ顔も容ちも。知
 れされい足をどむる者もなく其内舟の出
 るよ任せ。各々宵ひより咄しつかれたる
 紛れそこらさぐり廻して手さわりよく。似れいどて人の風呂敷包を我が包と心得引
 寄て直よ夫を枕として打ふし夫よ
 りの前後もしらすたかみひさなり 去程よ舟は右に棹さし左よ綱ひき登るよ早くも

八幡山崎を跡まな一淀堤を打過夜も明ク近くなつたる頃伏見よこそは着たりける苦
もる影も白く鳥の聲告渡るに船着たりと乗合皆々目を覺し立さわげの北八彌次郎も
苦打ひらきて笠風呂敷包を手引提船頭が歩板を渡を打渡りて岸登り舟宿に至
るも乗合れ人々つゝひて爰も来るを見れば見しりたる顔一人もな一是のふしぎと。
そこらうろく見廻しながら彌次ナント北八おめらる酒を呑ませた隠居殿のどらし
たれ北八さればれ。そしてアノ長崎者や。越後同者ども。來そらなものだが大方爰へ
よらぞに行たと見るおめらりゆると爰で支度して出掛様さ。ト元伏見よつゝ
舟宿の女どなたもお支度あざよかいな彌次ナイ爰へ二膳頼み升女ハイ。たての
飯も八配い豆腐の平を付て持て來る是の伏見の舟宿れお定り也此兩人彌次 今日
初めてなればこんな事知らず素より大坂へ着たとど心得平氣も成て
かう致そ是から長町の分銅河内屋とやら云ふ宿屋へ行てあれも大和の初瀬の茶屋で
よこした書付の所だからあそこへ泊て直に芝居でも見ようじやアねへか北八おめら
アまだ新町とやらを早く見てへ彌次ナイ夫もまんざらでねへのアハアツ業的きに

○伏見
 千万所
 洒落

あつ汁だベツくく。此傍も舟上りの三四人。太兵衛さんお前虎屋の饅頭のと
したぞいれ。太兵衛六兵衛さん聞かんせけたひなこつちや。昨日態々あこへいて。買て
來てどんと大佛屋もわそれたわいの。連人つゝ一ト走り行取こんぜ爰からわずか十里
やかなるもせんもの。太兵衛ハ、ハ、そう云てもくれんがよハ、ハ、ハ。此咄を
次郎ふー。モシあなた方が今云なされた虎屋といふは。随か大坂で御座いやとね。六兵
衛さよじやわいの。彌次其虎屋の饅頭わそれたどかつしやつた大佛屋とやら何所で
御座いやと。六兵衛コリヤ新町橋西詰を南へ行とこじやわいの。彌次其新町橋南へ行所
迄の爰からいくら程御座いやとね。六兵衛爰からの十里じやわい。彌次はてな。大坂
の思ひの外廣い所だ。ノウ北八北八ナニサイ、かげんに聞ひて居なせへ。わつちらを
ひやかすれたいな爰から十里あつてたまる物か途方もねへ。太兵衛イヤお前此を何所
じやと思ふてじや。爰の伏見の京橋じやがな。彌次ナニ伏見だコリヤ北八がいふどほ
り貴様たちやア人を。はぐらかそな。おめらア夕べ伏見から。船も乗て來たのいな

太兵衛 何いはんぞやらの桃山は狐にかなつまつま、れた。もんじやあろぞい。皆こち退て居やんせ。北八 けひて居ろもすさまじい。そしてあめらを狐付たア何のとだ。江戸つ子だぞ。つがもねへ。トいさくさ半ば此大坂者の何じやい。何せりあふてじや。そんなことより。こちやどゑらひめに合たわいの。こつとらが包を舟でうしなふたさかい。いんまの先まで。其せいらくしてあつたが。根から。葉からしれんわいの。ト云ふ内ひ郎が傍もある。イヤ權助さんあこよ有わいの。そじやさかい。わしがいふまひとか先包を見付て。ト云ふ。ト取れへ上つた衆を問ふて見やんせと云たじやないかい。權助 ホンニ是じやわいな。ト取れば彌次郎ちや彌次 コリヤ何ひろく此包のあめらがだ。權助 ナニぬかしくさる。おどつどひかへて。れら。やがなとはたらきくさるな。コリヤ見の風呂敷のはしよ。こちの名が書てあるわい。ト云ひれて彌次郎びつくりしよく。彌次 ホンニコリヤ間違がつたソレもどすぞ。あめらぐの。何所もある。權助 あんだらぐせナニおどれらが包を誰がしろぞい彌次 こめつ。つまらねへ北八どうした。北八 お前へ己がれも。取て一ツ所に包んで側

よ置たトヤアねへかどうしてあめらがしるものだ。彌次 ハテめんよふなモシいよ。爰の伏見は違へねへか。皆々 ハ、ハ、何ぬかしくさるやら。アノ頬見やんせ。けたいな頬じやな。北八 イヤこいつらは。ふてへ奴らだ。權助 太いも。細いも入ることぢやな。わい。かたでおどれらア。奸盗もの包み。別條なるさかい。ゆるしてあます。とつと、出ていにくされ。彌次 コリヤアとんだめあふが。さつ張わからぬ北八どうした。だろ。北八 さればわつちもわからぬ。せんでへ夕べは何日だ。彌次 ム、こうと夕べあれ自分。月が出たから大方廿四日あたりだ。北八 今月の大か小かきのふは何の日だ。彌次 さればこうと此間ソレ何所か泊た時。甲子だ。云たじやアねへか。北八 ソレ。あの茶飯は味かつた。彌次 平の牛房は大き。あいつは珍らし。皆々 ハ、コリヤどうでも。てさらは本氣じやな。わい。ハ、ハ、ト腹筋をよつて大笑ひ。太兵衛 ば、ア聞へた事が有わいの。成程あんまりかしこ。うも見へん。わろ達じや。さかい。人の物を。てまへるやどれ。働らきありやせんわい。コリヤこうじや。コレ

其なわろたち夕べ伏見から乗んして途中で
 舟のか、つたとき用達まかな堤へでも上ら
 んした事があるがな 彌次 左様で御座りやと
 大兵衛 ツレ見やんせ。あつとらが乗た船に
 もわれ時あぶりおつた人が大分ありつた
 が頓て舟が出るど云と皆うるたへて乗あつ
 た。其時。こなたたち下り舟と上り舟を取
 違へてめんく、れ乗て来た舟と心得こちの
 舟へ乗んしたものでかなあろぞい 北八 ホン
 =左様で御座りやせう。わつちらも。舟に乗
 た時くらがりでの有し取違へたといしらす
 せうやら居所も違うた様で御座いやしたか



○不シ包
 隠疑惑
 判然

乗合のとだからま、れ皮とそれなり又草臥紛れよツイ寝てしまひやした今朝爰へ來
 て見りや乗合の衆の内見しつた顔が一ツもぬへいふしぎなどだと云ていやしたの
 さ彌次 そういへば成る程今のさき舟の上り場へハテ見た様な所だと思ひやしたが見
 た筈だやつぱり初手の伏見だ者ハ、必竟夫ゆるお前方の包をわつちらがのだと思
 つて鹿相致しやした 北八 是でもれがさつぱりわかつた 彌次 イヤわかるこたア。わか
 つたがおゐら包のせうしたるふ 大兵衛 夫もわかつて有わいなお前方の乗んした下
 り舟又包斗り残つて今頃ハ。おさかハ八軒屋に。風呂敷包がうろくどね前方を尋て
 居よぞいなハ、北八 どんだ目にあつたいめへましい 彌次 ま、よせうするもんだ金
 の胴巻に入れて持て居るから高が包の手めへど己が替替りだ。うつちやつて仕舞
 へそこらは江戸ッ子だハ 馬鹿く、いひとそぐに京へ行つのもり又相談ん極めてたち
 出れば此人々も夫く、よを立出けるに北八彌次郎
 氣ぬけした顔付にてぶらりくど京街道又差掛り
 伏見出て淀の車がまたあとへ廻り廻つて来たは何事

夫より伏見の町を打過ぎ墨染と云る所よ差か、りける。爰は少しの遊女あつて軒毎
 ん長簾かけ渡したる内より顔のみ雪れ如く白く。青梅の布子よ黒天鵝絨れ半襟まで
 かしろい。べた〜付たる女走り出て彌次郎が袖をとらへ。女もしな這入なされ。ちよ
 どわそびんかいな 彌次 なんだよせへ〜
 北八 こうじやいな トべつかこ 女 ナ、そかんこちやいな 北八 いやいな三郎義秀で
 も泊らんのだエ、はなしやアがれ 女 ナ、こは トおつばなし 彌次 ハ、ア爰が跡でさ
 ひた墨染だな

墨染のおやまの顔の眞白さの石灰藏のねづみころもか
 深草の里の家毎よ。焼物土物細工を。商なふ見ゆれば

やき物れ牛れ細工よ買ふ人も。誕たらして見とれこそそれ
 斯て藤の森よ。至りけるよ

稻荷山松のふぐりにか、れるのふどしれさがり藤れ森かな

爰は稻荷の社をふし拜みつ、北八 ナントそこらで一ツぶくやろうじやアねへか 彌次
 能かるふ〜
 茶見世よ這入て彌次郎
 ぬくう〜てあぎよわいな 北八 コウ彌次さん爰れ婆アさんご前へよ氣か有と見
 へてアレこつち斗り見ておかしな目付をとらア 彌次 馬鹿アいへ婆アさんどうだ早く
 くん。婆々 まちつと待ておくれんかいな。ト、此婆々彌次郎れ顔を見て
 彌次 婆アさんどうぞしたかお前へ目が悪いのかね 婆々 わしやお前れ顔を見ていこう
 かなしふてならんわいな 彌次 ソリヤどうして 婆々 ワアイ〜 北八 あつつかかしひ
 婆アさん何がかなしひ 婆々 わしや此あひだひとり息子をうとなうたが。其息子よア
 ノお方が似たところ云へ〜 彌次 ハアおめらよ似たとかへ夫じやアお前への息子も
 い、男であつたらふよれしひとをした 婆々 ソレ其どうまん聲のもの云からお前の様
 よやつとわらいみつちやが有て色が黒うて鼻の獅子鼻どやらで目のいつかい所迄が
 其ま、じやわいな〜 彌次 夫じやアわつちが顔の悪い所斗りがよく似たれ 北八 悪

いとこばかりも氣がつゑ、いゝところのトつもねへもせんものを 婆々 それ斗りじや
 なるわいの。アノ片小鬢の元さんしで所までゴ。あないにも似るもれかいな 彌次人
 顔の店おしろが濟んだら其醜酒を早く呉な 婆々 ほんよわそれたわいな 一ト茶碗二
 汲で差だそふたり 北八 どうぎようどうも醜だ 婆々 うどうもなりましたじやあろ。わし
 ながら是を呑で 一 婆々 涙を其中へおどしたわいな 彌次 エ、とんだとを涙ばかりならま
 やかなしうてッ 一 婆々 涙を其中へおどしたわいな 彌次 エ、とんだとを涙ばかりならま
 だしも。見りやアお前へ水鼻をたらし居るが夫も此中へ落やせんかね 婆々 わしや
 見なさる通り三ッ口じやさかい鼻水とよだれを一トッに其中へおどしたわいな 北八
 エ、コリヤなさけなるとを云こつのもう呑ぬ 彌次 ちからアつる呑で仕舞たいめへま
 しみサア行ふ 北八 婆アさんいくらだ 婆々 ハイ六文宛下んせ 北八 水鼻のおまけだの
 イお世話ペッ 一 ト爰を立出てふ 一
 一 婆々 縁事よ涙を交て水鼻もす、りこんだるうばがわまざけ
 斯てふたりは足よまかせてたどり行程は段々都近くなつて往來殊は賑敷人の風俗

も自然と温順よしして然も衣裳の花やぎたる女の衣裳よりつゝぬかして見とれ行うち
 早くも大佛前に至りて 北八 チャ、くごうせへなお寺だアレ山門の上から佛様が覗み
 てゐる 彌次 ハ、ア是が彼の大佛だはへなるはぞ咄しに聞たよりのごう敵な物だそし
 て此石を見やれらるいゝ

大佛の御堂は雲よ入とてや。是の大きな者の天じやう

斯よみて山門の内よ入やがて御堂よ登りける。大佛殿方廣寺本尊盧舍那佛の坐像御
 丈六丈三尺堂の西向にして東西廿七間南北の四十五間あり彌次郎北八爰に法施し奉
 つりて 彌次 ナント咄に聞たよりか。ごう敵なもんじやアねへかアノこうして御坐る
 お手の平へ疊が八疊敷るげな 北八 狸の金玉と同一事だな 彌次 もつてへねへ事を云そ
 してアノお鼻の穴から人ガ傘を差て出らるゝと 北八 ソリヤアまだしも人が差て出
 るからいゝが已らが方の棒だら八が鼻の穴からの瘡かひとりでも吹出したの 彌次 馬
 鹿ア云なお後ろへ廻つて見よふチャお背中よ窓が明ひてみらア 北八 あれの大方沙を



吹ところだろふ 彌次 ナニ鯨じやアあるめ
 へし北八 ヌヤ〜 アン皆なが柱の穴をく
 ぐつて居るは 彌次 ホンニこゝつり奇妙う
 〳 此御堂の柱の元への参詣人のく
 ぐる丈の切ぬきし穴あり田舎同者
 共たはむれよ是をくぐり コリヤ面白い
 拔る北八も同じくぐり 然しれゐらぬぐられるが彌次さんは太
 つて居るからぬけられぬ 彌次 己だどつ
 てナニ是が 〳 北八を引けけ四ツバひよ
 程はゐり掛て一向ぬけられ半程
 ふとするに脇差のつばが横腹につかへて
 痛みこらへられず彌次 アイタ、コリヤ
 次郎顔を眞赤なした 北八 チャせうした拔ら
 ひよんな事をした 北八 彌次 コレ手を引ばりてくりや 北
 れぬへか

北八 ハ、こゝつはおかしひ 〳 彌次郎が両手 彌次 アタ〜 北八 よはひ男だ。ちと
 しんばら。すれぱい、彌次 あとれ方から足を引てくれろ 北八 承知〜 〳 後へ廻り兩
 ヤアゑんさア〜 彌次 あひた〜 北八 ちどころへなせへよつばと出かけた様だヤア
 ゑんさ〜 彌次 ア、まつてくれ〜 腰骨がぬれる様だ。コリヤやつぱり前の方から
 引出してくれ 〳 云北八又前へ廻り 北八 ヤアゑんさア〜 ソレ又こつちへよつ程出
 て来た 彌次 コリヤたまらぬ アイタ 北八 是でいかぬ初手の様に又後へ引戻して
 れ 北八 エ、色々などを云 〳 又後ろか ヤアゑんさア〜 彌次 まて〜 コリヤど
 うでも前の方から引て貰をふ 北八 エ、そんなよ前へ廻つたり後へ廻つたり引出して
 の引戻しいつ迄も果しがぬへコニヤい、さんだんがある 〳 参詣の人を頼んで 北八
 モシせうぞこつちからお前へ引ばつて下さいませわしがあつちへ廻つて足をひきず
 り出し升から 彌次 馬鹿ア云な兩方から引ばつてい出る瀬がぬへ 北八 てる瀬がなくて
 も兩方から引ばると前へ廻つたり後へ廻つたりする世話が無て能わな 〳 参詣人 〳 イヤ兩

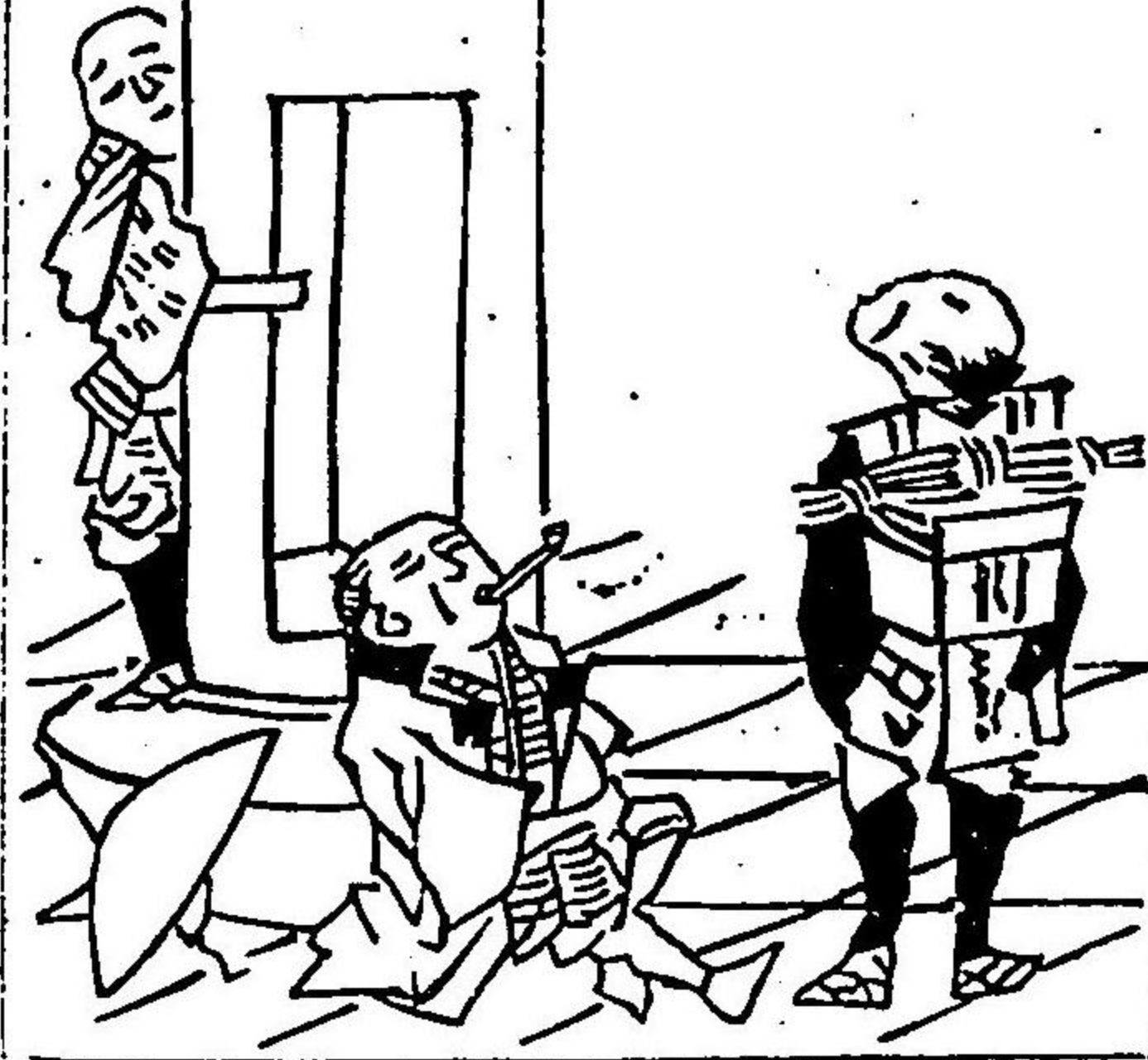
○空耻
敷ノ舉動

方からわれさんれ體を引延したらツイ出られそうな物トやあるぞい 北八 コリヤい、
とがわる酢を一升も買て来て彌次さんお前ノよ呑せよふ 彌次なせ酢を呑とどうぞる
北八 ハテ酢を呑と瘦ると云とだから 〔參詣〕ハ、ハ、くそなるなといふたどていん
まは間合ふこつちやなるさかい。こうさんせ何所ぞへいて權借て來さんして頭を
跡の方へ打込んしたが能わいの 北八 成程あるつが早い理屈だ然し夫でハ命が有めへ
參詣さればそこはどうも請合れんわいの 〔ト此内田舎〕コリヤハア氣の毒なこんだア
れし。わしはハア遠國のもんだアから。あにもしり申さねへが人の難義さつせるこん
だア愚意れう云つて見升べいか 北八 どうぞわれ人のたぞかる事が有なら云て聞して
くんなせへ 同者 ハア夫だアからのこんだアよ。あんでもあの人の足れ先さを切割つ
せへて。山椒粒のう。はさまつせへたら。ふとり出につんぬけべいのし 北八 ハ、ハ
、そりや蛇が女よ見込んだ時の事だろふ。どうせそんな事であろうと思つた 參詣コ
リヤ私がちるかそわいれ。何じやるとあのさんの體を和らかにして引出すがよかる

さかいこうさんせ土砂とて來て掛さんせいれ 田舎 すんだら土砂ノウぶつ掛ずと一番
の桶さア買て來なさる。手足をちと。べしれんまげたら。這入べいのし 彌次 エ、いめ
へましひ事を云。むだどころじやアぬへ。北八早くどうぞしてくれぬか 北八 待なよハ
、アお前へ脇差の鐔が横腹へこたわつていてへのだ 〔ト手を差入てひねくり廻し。〕
彌次 いか様是でどうかくつろぎが有ようだ 北八 ドレ〜イヤ時よとどなれど前の方が
ら押出して下さるませ。わしが足をもつてこつちへ引出し升から。ヤアゑんさア〜
〔參詣〕ソレ出るわいの。まぢとどじや。いかません 彌次 ア、ウ 北八 出る奴がい
けむから大笑ひだ 彌次 ア、いてへ〜 北八 しめたぞゑんやア〜ソリヤ出たぞ〜
〔トやう〜の事にて引出せば彌次郎大あ〕ヤレ〜有難へコリヤ何方も御苦勞で御
せをふき〜ほつと溜息をつきなごら 座いやーた。わつちやア伊勢の泊りで。産をしやーたが産むよりか生れる身よつ程
せつねへ。コレ着物が摺切てあばら骨が今にひり〜とる
かさ差一て出るお鼻より柱なる。穴おそろしや身をそばめても

斯よみ興じて大笑ひとなり夫より御境内を廻り蓮華王院に三十三間堂に

いや高き五重の塔に競べ見ん。三十三間堂は長さを



ゑつこらぶつさホウホよい〜ゑつこらぶつさ彌次 何で御座いやすね 向より 来る人 わこよゑ

是より此御門前を北へさへて行ふ往來殊に賑しく。げよも都の風俗の男女共に何所もなく柔和温順よして馬士荷歩持迄も洗濯布子に糊こはきを。折め高き着なして。あのおしやんと事わいなと。なまめきたるもおかしく。二人の興よ乗じ目に見る物毎に。珍らしと。たどり行うち俄に往來。騒立て。老若うちまじり走り行人毎に。ホウホよい〜。

○ 不知 魚之置 腐

らる喧嘩が有わいの 北八 京の喧嘩も珍ら〜 如く往來もならぬ位なるよ二人の押し分けは是を見れば彼の喧嘩の一人の肴屋と見へてそこに半臺なぞおろもうちやうよして喧嘩と見ゆれどさのみ頭からた 肴屋 コレイノわが身は方から行當りくさつてそなるなこといふもんじやなるわい。己れ。のうてんぞ打てこまそかい

〔相手〕 おきくされこなんが手のうごくのに。こちやじつとして居やせんわい 手ぬぐひをてぬぬいよ 肴や ようおとがひならず。わろじやな 一体わりや何所のもんどや折て鉢巻をとる

い 職人 おれかい。おりや堀川姉が小路下ル所じやわい 肴や 名の何と云ぞい 職人 喜兵衛と云わい 肴や 年はいくつとや 職人 廿四じやわい 肴や おきくされ己れ廿四にしちや。ゑらう若い虚つきくさるな 職人 なにいふぞいやんまじやわい前厄でことし噴めを死な一たわい 肴や ソリヤゑらい力落し折たじやある。ゑい氣みさらしたな 職人 イヤそればかりじやなる乳のみくさる。がきめがあるさかい。ゑらい何んぎなめよ合ふたわい 肴や こじやあろわい己やわれに二ツ上じやわい 職人 そふぬかしくさりやわれも若

い内何所じやぞい 肴や一條猪熊通り東へ入所じやわい しょく人 かいやい。あこよ
 盲で目の見へん寸伯といふ針醫があるがな 肴や ナ、針醫がありやぞうそりや 職人イ
 ヤこちら一家じやさかい己れ歸くさるなら云傳してこまそ 肴や いやじやわい。何の
 われが云傳誰が云をぞい。ゑらいわはめじやな 見物の人欠 びしなぐら 十兵衛さんもういのか
 い 十兵衛 またんせ今に打合ふじやある 見物 イヤわしや内に容やつておゐてきたさか
 い 十兵衛 そしたら其れ客連てごんせ序よ。うすべりなご一枚くさんせんかい 又こち
 に居る見物軒下につ 見なされ。あつちやのわろが。おしてもゑらい。やつじやわい
 くび髭をぬき 見物 イヤこつちやの男もゑらい。願じやわい 見物 ホンニ其願で。思ひ出たれ家のぞう
 じやいな痛所のゑいかひな 見物 ハイねかたじけなふ御座り升。とんどゑいようで有
 たがな昨日からゑらう悪なつてツイ夕べ死まましたわいな 見物 ソリヤね前御愁傷ふ
 である御葬禮はいつじやいな 見物 今ま出一れへ升とこじや。あつたが。ゑらい喧嘩
 があると人が走るさかいわしもツイいて見て戻る程に夫まで待てと云てまたして置

まいたわいな 見物して居ると。かの職人の男 コリヤ、イ まちと。こつちへ據く
 され日向がなふなつて寒なつたさかい 肴や ナ、よつたがどうすりや 職人 ねのれいま
 己が事をわやふど。ぬかし居たが。何で己がわはじやぞい 肴や あはじやさかいわやト
 やわい 職人 なにぬかしくさる。そう云われが。わはじやわい 肴や イヤこちやわやじや
 なる賢じやわい 職人 我が賢なりや己も賢いわい 肴や ナ、我も賢いか。そーたら此喧
 嘩やめにせうわい 職人 サアひよつと。互ひよせり合て着物でも引さるたら損じやさ
 かいやめよして。こまそふかい 肴や ゑらい遅なつた。もういんでこまそ 職人 己も我
 がいにくさる道じや程よ連立ていんでくりよわい。今日のゑい天氣じやあつたな 肴
 や あた、かうてゑいわいわい 肴や トたがひよわひさつして此ふたり連立て歸る。見物も
 か、彌次ハ、成程上方者の氣が長あわんな薄のろひ喧嘩が何所に有もんだ 北八
 あれ中で損徳を考へてやめよしたから大笑ひだ
 公卿衆れ居まそ都の自から喧嘩止るも歌とよみなり

斯打興じはやくも清水坂に至るよ雨側の茶屋軒毎にあをぎ立る田樂の團扇の音喧
 ときまで呼立てる聲々モシナれ這入なされ茶々上りておいでんかいな名物難波うどん
 わがらんかいな休なされく彌次なん何ぞ喰てもい、がもつと先へ行てからの事よし
 よふトはどなく清水寺よいたり境
 内をめぐり音羽の瀧を見て
 名よしおふ音羽の瀧のあるゆるか登りつめたる清玄の戀
 本堂は十一而千手觀世音也。昔し沙門延鎮が夢中よ得たる靈像よして坂の上田村丸
 の建立とぞ。北八彌次郎しばらく此の寶前よやとみななら
 境内に植し櫻のそきまなく手も澤山な千手觀音
 傍らの小高き所よ机をひかへたる老僧參詣を見掛て當山觀世音の御影の是から出升
 ぞ。誠よ靈驗あらたなる事は皆がものいひ啞の耳が開へあるいて來たいざりがなほ
 る一度び拜とる輩のいかなる無病達者なり共。たちまち西方極樂淨土へそくひ。取
 んとの御誓願じや。何なたも頂戴てお歸りなされ。冥加錢を澤山よか心持次第御信

心の方の御座りませぬかな 北八 よくーやべ
 る坊主めだ時よ彌次さん彼のうはさよ聞ひ
 た傘を差て飛といふの此舞臺からだな 僧昔
 しから當寺へ立願の方の佛よ誓ふて是から
 下へ飛れるが怪我せんのが有りがたるとこ
 ろじやわいな 彌次 爰から飛だら身体がみぢ
 んよなるだらう 北八 ねりくいの飛人が有り
 やすかね 僧 さよじやわいな。ゑて氣のふれ
 た。わろ達が來て飛びれるがな。此間も若い
 女中が飛れたわいな 北八 ハア飛でどうしや
 した僧 飛で落たわいな 北八 落て夫からどう
 したぬ 僧 ハテ根をひとるわろじや此女中の



舞臺から飛だ咄の清水よ。冷かされたる身こそくやしき。此山内を下りのゆくさきに清水焼の陶造り軒を並べて往來の足をとむ此所の名物なり

天道の恵みもあらん陶物師。大日山の土を製せば

斯て其日も早や七ツ頃とおぼしければ急ぎ三條又宿をとらんと道を早め行向ふより

小便擔と大根を荷なひたる男大根小便しよく北八ハハハ唐茄子が笛を吹いた見

世物の見たが大根の小便するのつゝみに見たとがねへ彌次あれが。かの大根と小便

とどつけへよするれだるふこゑ取ねつきな大根と小便しよくト呼でいくこなた

しみたれれコリヤハハわしら二人が愛で小便してやろが其大根三本ねくさんかい

男が二人りト此所の辻へ二人を連れてゆく辻は江戸でいふ

なこゑ取マアこち来てして見さんせ新道なり彌次郎北八星を見てとふとるのだし

らんと跡より付てこゑ取サアやらんせんかいなト小便たををろしコリヤわし

行き立留り見ればト此たどの内へ二人ながら小便しもうこれぎり出のかひな仲間うちどめ

○撒小便
便を買大
根是是非
直小便

尻が出たからもう小便の夫切じやわいなこゑ取コリヤあかんわいま一度よう骸を

振て見さんせ仲間ハテ小便くすねて置いて何せうぞい有りたげーたんでのけたわいな

あゑ取それ夫じや大根三本はようやれんわいな。二本もてかんせ仲間コノ小便のすくな

ふても。あちとらがの品物があいわい。餘所の茶粥ばかり喰て。れるのとの違ふて

こちや肉斗り喰てあるがなこゑ取それ夫じやて、あんまりじやわいな仲間ハテやかまし

う云んぞな。内へ持ていんで水交りや三升斗りには。なるぞいな。早う三本くさんせ

こゑ取そなみにくせくと云たて、是でくさるもんじやなわいな。そこら

へいて茶なぞ呑で来てまぢとやらんせトもつかへしつ云て居を二人北八もし

く幸ひわつちが小便仕度なつたから無疑ながら。ね前へ方に上やせう是をたして

大根三本取なせへ仲間お心ざしはおかたじけなふ御座り升ダ。夫じやお氣の毒様じ

やわいな北八ハテい、わなごせうせわつちも有合せた者だから。餘り輕少なれど仲間

左様ならふ小便頂戴まじよかいなト小便たをを北八の北八イヤハハやつぱり夫に

ね置なせへわつちぢのり。二二間つ、向ふへ走り升こゑ取コリヤ。きよとい〜。イヤれ前は地ではなぬわい。兎角小便の關東が能御座り升。地の薄ふて直打がなる北八もちつと早いとまた出た者を。わつちは生れ付て小便近いから不斷小便桶を首又掛て歩行た男さ。仲間そりやおうらやまーひこつちや。こゑ取さよならお前此桶を首又掛てお出んかいなわしや何處迄もれ供していこわいな。北八イヤ近頃は其様もぬへのさ。こゑ取ね運様も有そうじやモシお前も序も手水してね出んかいな。彌次イヤわしの前方の一度に小便は壹斗や貳斗を分ねから苦も思ひなんだ者だがどうしたとやら近年の小用迫りですつぱり出ぬにこまり果る。こゑ取ハア小用づまりならぬいとが有わいな。いつきよ。ようなるあつちや。彌次どうすると能くなるの。こゑ取ア酒屋などで酒の樽の香口から思ふ様酒の出んところが。あるもんじやわいな。そなるな時の樽の上の方へ錐もみして空明ると直下からシウ〜と酒がはしる者じやさかいお前の小用の。つまらんしたのも。ひたへくちへ。錐もみさんしたら。直に小用が



通じるとやあろぞいな。北八ハ、ハ、こゝつゝ出来た時におそくなつたサア行やせう。ト二人の引き分れゆく向の方よりカツギを着たる女二三人連れ流石に都女。ヒヤア郎の風俗しなやかに何れも色白く透き通る斗りの代物北八現をぬかして。ヒヤア〜生た女が参る奇麗〜。彌次串戯な女共だ皆な着物をかぶつて参る。北八あれが被と云者だの。アノ美しくしめ奴に己がもれを云て見せよふか。ト頓てかれ女中のがお尋申たい是から三條へは。どう参りやぞね。ト聞よ此女中御所方と。我身三條へいきやるなら此通を下りやると石垣といふ所へ出やる程に夫を左りへいきやるとツイ三條の橋じやわいな。ト一体御所方の女中の人を何共思はずちときいたふうの。北八ハイ是のありがたう御座りやぞ。ト向もしらねば禮をい。彌次さんアリヤア何だろふ

どうてきよ大風な女どもだ 彌次 ハ、ハ、とんだやそく取扱はれやアがつた。どうさ
 らしめト夫より頼てかの石垣と云るを打そぎ左りの方へと敷へられたる道筋モシ
 三條へ行と心得早くも五條の橋に至り一あるはや日暮て往來のひと
 くしる谷れ方へはどう参り升な 北八 ハアわが身しる谷へいきやるなら此通を直に
 いきやるどツイしる谷へ出やる程よソレころんだら起ていきや牛の糞を踏附たら遠
 慮ないにふいて行やれ 往來の人イヤ此奴ぞんざいなもののぬかし様じや爰なわんだ
 らめが 北八 ナニわんだらたア何のとだ道を聞かおしへてやるのだい 往來イヤ細言
 ぬかそない。どたまよやーてこまそかい ト此男れ連と見へたるが二三人たち掛るを
 脇差を横たへものい、かつかういかさまよも各々角 見れバいづれも見わぐる如き大男共腰よ長
 力取らしき者共なれば北八たちまちしよげかへりて 一ハイ御免なせへ 彌次 こみつ
 生酔だから何方も了簡してくんなせへ 角力取 イ、ヤ了簡ならんわい。ねどれらうち
 の何所じやぞい 彌次 イヤ旅の者で御座りやぞ 角力取 旅れ者なら宿があるふソレぬか
 しくされ 彌次 是から此三條よ宿を取ふといふれで御座りやぞ 角力取 何ぬかそぞい此三
 條よどの何のさつちやら。こつこつとは。今三條の編笠屋から出て来たものじや爰の五

○ 蔭辨

慶彌次

五條之

災難

條の橋じやわい 彌次 ヤア爰の三條での御座りやせぬか。ソレみや北八先刻の女共が
 とんだすつばかしをれしぬやアがつた 角力取 貴様たちの何所から来たれじや 彌次 消水
 の方から 角力取 ハ、ハ、てつきり。けつぬよかな。つま、れくさつた者じや。あろぞい。
 ろらい隙費しな。ほつてれけ。さり迎わうな奴らじやな ト打笑ひて行過る。彌
 らせ五條の橋に来りいましくしる。ばんくるはせせな目よ逢た。小言云乍ら橋を向ふ
 渡り其處此處とまごつく内、往來の賑やかなるようか。思はせも橋のたもとを
 左の方へうかれ行と何かしら。兩側に掛提燈軒とよてらし三味線の音。にぎは
 く。ぞめき歌よやうか。ふりせし男共の。ちら付にやぎれてのぞき歩く此所の五條新地
 とて少しの流をくむ遊女也家毎門の戸を立てたる。くぐり斗を開きて門口よ立
 たる女れさ、やかなる聲して。モシナと彌次郎が袖を引よふりかへりてくぐり
 戸れ内を見れば見世付の 彌次 ナント北八爰ぞお山屋と見へるがいつそのくされよ
 お山並居たりけるにぞい 今宵の爰に泊りのぞうだ 北八 いか様何も荷物無。まんなやしとんなども。やばで
 ねへ 女 サア這入んかいな 彌次 這入とははるろふが爰のいくらだ 女 ヲ、かたやのお泊
 りなはるかいな 彌次 もちろんさ 女 まだ初夜前じやさかい七夕宛れくれんかいな 北八
 上方のお山の直切て買ふといふとだ半分にかからね。か 彌次 何かなし四百宛なら泊

○彌次
切大平

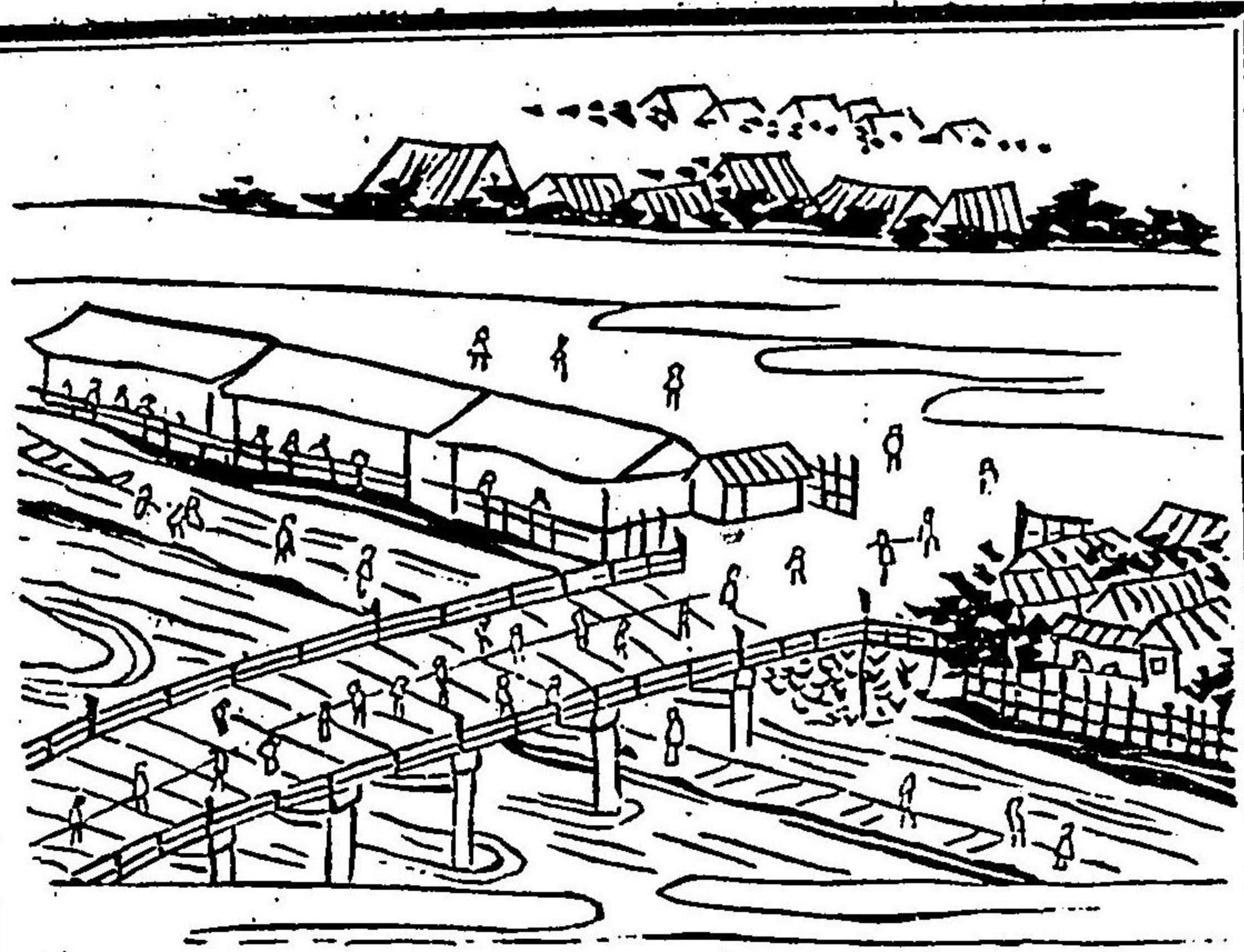
つて行ふ夫で出来れば御縁が無とのあきらめようさ女
 北八夫でい、の丁度おやまさんも二人りわらア
 頭をこゝあいた、と北八どうした女
 つつり二人り一人名の吉彌。今一人の金五。いづれも太織細編やうけ着物も黒天鵝絨の半襟
 梁りのつかへる程ひくき二階を。しやんと立て歩行くしろもの片手に着物の裾を横
 の方引あげて来りお北八。とんだ暗のあんどんだサアもつとこちらへよりなさら
 、しんぞ、云てとほる
 んか吉彌。お前さん方の何所トやいな彌次。されば何所やらであつた金五。六角の
 朝市よこなるなな方方がよう見へでじやが訛てじやさかい大方旅のれ方じやあるぞい
 な吉彌。六條様へ御出たれかいな彌次。マアそこらの者よ吉彌。モシナさ、一ツあがらん
 かいな彌次。そうさ酒が早く呑てへれ吉彌。そう云ふて遣かいなな肴の何よせうぞいな
 金五。角の酢もトグおいしひとやなぬかいな吉彌。わしやナ。かちなんんバが。能わいな
 彌次。餅でも家賃でも。とんぢやくのねへ早くしてくんな吉彌。いつきに参じるわいな
 ト此れやま酒肴をい、つけよ下へねりる跡も残りしれやまの此うち帯のわひだか
 ら鏡を出し。おんどうの側へより頭を直を頼て下より銚子盃持出し大平が一人前よ

一ツ宛廣ぶたにせ持
 出す彌次郎肝をつぶし。なんだ大平を。人別割どの珍らしい京はあだじけぬへ所だど
 聞たが爰らは又どうせへだ北八。四百に。安ひ物だ。ト此二人りの酒も肴も揚代の四
 とや金吾。サア一ツ上りなされ北八。始め様ト、平は何だ、ハア葱又半へいの。聞へ
 たがこつちでい半べいを焼と見へて眞黒よこけていらア吉彌。ソリヤ。哥賃じやわ
 いな。ト是の上方よてそる難波餅とて葱を入たる雄煮餅也此おやま下戸と。ハア哥餅
 見へて己が好物ゆゑ客よと、めて取寄たる也北八。哥餅と云とを知らず。ハア哥餅
 と云の聞たともぬへ。とんな肴だれ吉彌。チ、せうし。餅じやわいな北八。ハ、鯉かド
 レ〜ヤアありや餅だ〜彌次。れきやアがれ上方者の氣が氣かぬへ酒の肴よ餅とは
 どうだ是で酒が呑るものか金吾。外のれ肴云て。参じやうわいな。トそぐに下へねりた
 物を持ってくる。中よの上方よ。はやる鳥貝のすしなり。北八。なんだコリヤ馬鹿れむき
 此おやまときと見へて此そしを云つけ。やりたるなり。彌次。出物も〜へんちき
 みをとしよつけたのだな金吾。とりがひの鮓もじじやわいな彌次。出物も〜へんちき
 なもれ斗りでもう酒も呑ぬ〜ト此内むだも色々あれ共略す。交に布團を敷並べ腰
 の女房と見へてつとめを。おゆるしな彌次。チイたれた女。ハイお勤をいたゞきよ参じ

ました。ト書附を出し彌（彌）何だ四夕宛八夕の揚代（揚代）の聞へたが四夕哥餅（哥餅）ならば貳夕餅壹
 夕八分御酒五分蠟燭（蠟燭）べて拾六夕三分コリヤとんだはなした雑用（雑用）の別（別）も取れかからア
 又酒（酒）も肴（肴）も揚代（揚代）の内かと思つたコレ（コレ）北八此通りだ北八ドレ（ドレ）何だコリヤお前
 へ方アわつちらを他國者（他國者）だと思つて酒代（酒代）を別に取さへあるよ。どうてきよたけへ物
 だ此四夕哥餅（哥餅）なんばと云ハアノ大平（大平）のとか。餅（餅）ならたつた三ツ四ツ入と葱（葱）のちつと
 斗りさらへ込（込）だ物を壹夕宛（壹夕宛）とい成（成）を京（京）の物のわだじけねへ氣（氣）のしれた根性骨（根性骨）だ蠟
 燭（蠟燭）までつけるこたアねへ。こんなものいまけよして置なせへな女（女）ホ、ホ、京（京）の者を
 悪（悪）うおしやんとお前（お前）さんがしゆみじやわいな五分斗りの蠟燭代（蠟燭代）まけいのなんれとお
 ーやんとことい。なるわいな。そして皆食（皆食）りなされた跡（跡）で高（高）ひのやそひのどおしや
 んしたて、。わかんとつちやなるわいな彌次（彌次）エ、めんどうなソレ壹分持（壹分持）て行な端（端）した
 くらゐのまけなせへし（ト金壹分をふり出してやる女房。ふしゆらうに取て下へ）
 ありると彌次郎（彌次郎）。あつけ取られし類付（類付）。ぐまやりと成り
 ア、とんだ目（目）もあつたノウ北八（北八）かしおらアおしくねへどうかおつよもてそふ

○逆カ捨

なわんばいだ（ト此内北八の相方吉彌きたりて）チ、しんきやの。あこに私（私）し一人り。おかんして爰（爰）も
 何してじやういなサアやすみんかいな（ト手を取て己が）北八コリヤ（己が帯を解
 てどうする（トわざと彌次を聞へる様に）こいわいな今宵（今宵）のいこふぬくひじやなる
 かいな。お前はん。じつとして居（居）なされ私（私）があぢようするわいな（トすべて上方筋の
 ら帯（帯）ひもをといてうちとけたるてゐに客（客）をもてなすと定（定）まれるおきての如（如）し中（中）にも
 此吉彌（此吉彌）の大年増（大年増）にてぢよさいのなき代物（代物）北八（北八）も着物（着物）をぬがせてふり出し己（己）も帯（帯）を
 解（解）て北八（北八）己（己）が着物（着物）を打（打）かけ。さながら深（深）きなじみの如（如）く打解（打解）たる体（体）ももてなしけ
 るゆゑ北八（北八）うつ、をぬかして打（打）ふしける夕夜（夕夜）も次第（次第）ふけ行（行）ま、又大（大）れ遠（遠）ばゑもの
 淋（淋）しく時（時）れ太鼓（太鼓）も早（早）丑（丑）れ刻（刻）斗（斗）り（モシナ）くよう寐（寐）てじやな北八（北八）ア、ム、何だ（何だ）く
 吉彌（吉彌）わーや手水（手水）も行（行）てくるぞへ（トおきあがりたるが枕もとよほふり出）お前（お前）さんの
 着物（着物）ちよと借（借）ておくれやわしやこれ着（着）て。殿（殿）たちの振（振）して下の衆（衆）を。だましてこまそ
 わいな北八（北八）よく似合（似合）た奇妙（奇妙）く吉彌（吉彌）つむりが是（是）じやわかぬわいな（ト手拭を取てう
 りたるが北八（北八）の夫（夫）より寐（寐）もやらすで待（待）て暮（暮）せせ。かの吉彌（吉彌）の一向（一向）よ來（來）たらす扱（扱）の
 外（外）も客（客）でも有（有）るよやとじばらく待居（待居）るに早（早）七（七）ツれ鐘（鐘）も程（程）なく夜（夜）も明（明）クなんと。とる
 北八（北八）こらゑ兼（兼）てむしやうよ手（手）どなたぞね呼（呼）なされたかいな北八（北八）チ、爰（爰）だ（爰）くコ



レ私ちがおやまの先刻下へねりたが夫なり
 で顔だもしもしねへ。ちよくり呼でくんなせ
 へ女房 サア其とで下り大さはぎて御座んす
 わいな 北八 なせく 女房 アノおやまが男の
 さりもの着てはしつたさかい 北八 ナニはし
 つたといふげたのかッリヤ大へんだく 其
 男の着物と云は己がのだ 女房 かいなッリヤ
 又何としてお前へさんのを着ていたぞいな
 北八 イヤ下へいつて皆んなをだましてくる
 からかしてくれろと云たによつて 女房 夫で
 貸なさつたのかいな 北八 そうさ時よ其おや
 まの欠浴したのこつちやにアしらぬへこの

たから何でも爰の抱え違へいあるめへ着物はせひども爰の内からどうぞしてもらは
 めやならねへから下へそういつてくんなせへ早くく 女房 マア何よ致せそなるも申
 ませう 下へねりて行と程なく此の亭主と見へて鬼太りのとてらを着たるでつく
 りとせし大男料理番共三三人引連とやくと二階へ来り亭主北八が枕もと
 だかり コレ吉彌も着物貸たといふ。わろいこなはんかいな 北八 サ、己だく 亭主 お
 ぞれかい。はてくろしひ事さらしたなマア。起くされドレ顔みせさせ 北八 イヤ。此
 さいろくめらり。何で己を其様よぬかしヤアがる 亭主 ぬかしたかどうぞりヤア。おど
 れ吉彌めも着もん貸て欠落させおつたからはゆくさきい。しつてけつかるじやあろ。
 わりてあろ。やどさ出くされ 北八 とんだとをいふ。なに己がしる者か 亭主 イヤくそ
 なるも。ぬかしさらしてもわれが人よ頼まれて糸ひきくさつたに違ひは無わい 北八
 コリヤ貴様だちのねつに。い、が、りをとるな 亭主 あそた、かずな。しよびされろせ
 ト皆々立か、り北八を手ごめよとる此とさくさ 亭主 コリヤ己が連だが。うぬら此男を
 よ目を覺し此てみを見てはね起飛で出で彌次郎 亭主 コリヤ己が連だが。うぬら此男を
 うとる ト亭主をつきの イヤこなやつも同盗ぢやあろ。二人共にひつ絞れ ト何れも

者共。彌次郎北八を州方から引たて下へれるしやをびきをもつて。つゝふも二人をぐ
る。巻にしぱりたる彌次郎は一向台點ゆかきいさのしとを聞てぎやうてんじし
北八も今さらおやまよ着物と負たるあやまりをこらくはいし。うたかひうけたる上
か、る目よりひくやしけれ共並れとうせんよ云わけた、す。臺所の柱よつなかれた
る面目なさ。殊に夜も明ケはなれて近所の者共追々見舞に來る内に。わーや今さひた
是も此商賣の亭主と見へて少々小口でも聞ふといふ男右は十吉。わーや今さひた
が吉彌めがさよどのとをさらしたげな具手引一た奴らはどしたぞいな。亭主。あここに
、つて置たわいの。十吉。店主呼で預さんせ。亭主。旅の者じやて、虚つささらしてやんま
れ家を。エいわんわいの。十吉。ソリヤ氣の毒なもんトやわい。トふたりがしばられ。コ
レこなたちの悪い合點じやわい。ソリヤはて友達づくなら頼まれまらもんじやな
ゐが。最ふこなるに。ばれていしよとが無有様よ云てめんく。れ。みぬけとるがゑい
わいの。彌次。イヤ私らは。かたつきし何もしりやせん只此男が。本の洒浴よ着物貸た斗
りであたがひ受たといふもんだから。どうぞ。あなたのとりにしのでわつちらを助て
下さりませコレ手を合せて拜みたいでも縛られて居るから足を合せて拜み升コリヤ
く北八もね頼み申せ。北八。ハイ南無金比羅大權現様此災難を免れ升様に南無奇妙頂

來く。亭主。コ、なよをぬかそぞひ。金比羅様。いのるなら。そなななこつちや。聞んわ
いさいはひおどれ裸で居から水あびせて。こまそ。垢離とつていのりくされ。北八。イヤ
わつちの。全体命比羅を信心して、御座りやと。是迄願を掛やすに人との違ひて水を
あびて寒ひ目一ていさ、やせぬ何んでも着物を。たんと着て。汗汁あつがんを。ひき
掛た上へ巨燧へ首つ切のたくり込で願ふと直し御利生が御座りやと。責て着物
ひきまとも一盃あつくして下さりませんか。亭主。エ、尻ぬすりくされ。彌次。イヤ御尤も
で御座りやと。わつちこそこの此男めがまきぞへ。ほんの災難としてこんな目よあひま
そと持病の瘡が差込でアイタ、。亭主。瘡が痛いなら胴中の繩をまらつとどかたう。め
てやろかい。彌次。イヤエ。わつちが瘡のじん句踊とおさまり升からどうぞ此繩を解て
下さりませ。十吉。ハハ。コリヤねからやくたいな奴らじやわい勘太さんゆるして遣ら
んせたがて。的等のゑらひあやじや成程吉彌めにたらされくさつて。さきりもん貸か迄
のこつちやあろぞいな。亭主。サイナそなるに云んぞりやいかさま賢ふも見へんわろた

○裸不
道中之
語至此
屬不用

ちじや。別してのとも有やせまい。いなてやるかいな 北八 夫のわりがたふ御座い
やとがわつちやア此裸のま、でい。歸られやせん 亭主 いなれざ。いなんすなく。こち
にもい、ぶんがあるさかい 北八 イヤそんなら参りやせう 十吉 サア、いなんせ。あ
だわやらしい乗じやわいな 〔ト二人りぐ繩〕彌次 北八 手前へのおかげでとんだめにあ
つた 北八 お前へよりか知らア此通り着物を取られてハアくつさめマ、さむく 亭
主 ハハ、あんまりかはひそうじや何なぞ一まひくれてやるかい 北八 有難ふ御座いや
すぞんなものでもどうぞ頂戴かして。下さいやせ 亭主 エ、乞喰めがいふやうなどぬ
かしけつかる。てきよ似合た様又納屋の菰一まひ持て来てやれやい 下男 イヤ爰よき
のふの俵があるこれ着ていかんせ 北八 ナ、夫をさるとかエ、情なるとをいふ 亭主 せ
つかくれ己が心差じや着ていなんかい 北八 ハイ有難ふ御座いやすが私し。やはり
裸が勝手で御坐りやぞ 彌次 げへぶんの悪い男だれいらが合羽を貸て。やるふ 〔ト彌次
綿合羽を取て北八
は打着せながら〕

愛まーやかゐたる恥も赤はだか。合羽づかーき身とり成たれ
果の大笑ひとなり二人りのやうくのとにて此所をのぐれ立ちいでけるとなり

○七編

或人の句よ。花尊都本寺くかなど。詠たりしは實も寺院堂塔も。廣大無邊よ
して其莊嚴靈秀なる。云も更なり殊も花の春。紅葉の秋の東西南北に名だ、る勝景
の地有て加茂川名酒の樽と。ともよ人れ魂を飛ばしめ商人の。よき衣着たるは他國に異
よして京れ着だをれの名の益々西陣の織元より。いで染色の花やぎたるは。堀川れ水
よ清く釜元れれしろい。川端のふしの粉の。雪をあざむさ。御影堂の扇。伏見の團扇に
風匂ふ草堂前の粽。丸山かる焼。大佛餅。醍醐の獨活芽。鞍馬の木芽漬の庭訓往來にい
ちじるく東寺の蕪。壬生の菜の名物。選に鼻高し其外名産。奇製の物品あまた有。都よ
たま〜いりこむ騒客れ兩人彌次郎兵衛北八とて。拔参りの刷毛。序よまぐれ出たれ
ども淀川れ下り船よ門違ひして荷物を失ひ五條新地れ一盃機嫌に早吞込して丸裸と

○ 非北
八北 恥

なりたる北八の名にも似ず同行の彌次郎兵衛が木綿合羽を借着せし程に仕合なればかゝる洛陽の地も面白からずうかゝと新地戻りの朝風身よしみ渡り。五條の橋に差掛りたるは此所の古しへ牛若丸の千人切り仕給ふ處と有ば北八しやうくと打かたぶきて

かゝる身の牛若丸の裸まで。辨

慶綱の布子こひーき

斯て東へ渡りて河原院の舊跡。門出八幡も直通りとなして高瀬舟の綱を引れてたどりゆく道とがら北八思へばくつまらねへと



なでも綿入が一枚やーぬが彌次さんい、ちゑのねへかの彌次ナニ買はずともい、よしたがいひ。江戸ッ子の抜参に裸に成て歸るの。あたりめへだは北八夫だどつて寒くてならねへ彌次そんならさいはひ爰は湯屋があるナントちよくりあつたまつて行かねへか北八ホンニこめつ奇妙く彌次さんお先へわがりてへトいちもくさんよは暖簾をくつてそつと這入りかけわがつて裸なならふとそれはその亭主モシくこなさん誰じやいな。何さんそのじやくを身廻し見るは湯屋でなしエ、いめへましい湯屋かと思つた亭主ハハハこの暖簾はゆの字があるさかい。それで洗湯かと思ふてじやのアリヤ養生湯といふ振出し薬の名じやわいな彌次ホンニ此奴の大笑ひだ北八又一倍寒く成た。いめへましいト小言云ながら行くさきに。しみたれれ古着屋一軒あり見世先にふるぬのこ古ひねくり廻して紺モシ此布子のいくらだね古手やれハイくこつちやハお掛なされ。コレお茶持てこんかいな。お煙草は火もなぬわいな。赤いれ一ツちやと。くさんせ北八イヤ茶も煙草も入やせんコリヤアいくらだと云ふ亭主ハイくそりやきやう

どう御坐り升。お安うしてあげふわいな 小僧 ハイお茶上りなされ 亭主 長松そりやおぬるのじやなるかいな。なぜ暖かな。ちや〜上んぞい 小僧 イヤお家様今朝茶がゆじやさかい茶〜焚などおつしやつて、御坐り升。夫のきのふ焚たまんまの茶〜で御坐り升わいな 彌次 いか様きのふのお煮花をどあつて。頼と河童の屁の様だ。イヤ屁の序尾籠ながら御亭主さん手水にいきたいお裏をちよとと 亭主 ハイ〜雪隠へお出かいな 小僧 雪隠ぬるうの御坐りませぬ。ようわめてじやあるぞいな 亭主 ナニ雪隠を誰が沸したぞい 小僧 夫じやて、。いんまのささわたしが参じたさかいすぐいて見なされぼつぼと煙が出てじやある 亭主 エ、むさるとをいふ奴じや 北八 そんなとより此の布子いいくらだへ早くきめてくんねへ寒くてこたへられぬ 亭主 お寒くのもつとそつちやへよりなされ。そなるよ。い、日がさしてトやわいな。きれふも着物買もお出たお方がコリヤきようとする。ぬくる内ぢやて、。そこよ一日ひなたぼこしていなれましたが。其お方が。もう着物買ふて着居でもだんなる毎日爰れ内へ。日向ば

○布子
是に壓高
着物

こしに。來わいなと。こなるに。いふてじやあつたわいな 北八 エ、じれつてヘコリヤア賣らねへのかどうだな 亭主 ハイ〜どうじやわいな 北八 安くしてくんねへ 亭主 ノ紺のおひゑじやな 三拾五匁と。ぎり〜じやわいな 北八 高い〜わつちらの江戸ものだが古着の商賣柄で。いくらも取扱ふてゐるから。やるもんじやアねへ本とられどころを云ふなせへ 亭主 ハア御商賣柄とあれば前様も古着屋なされてかいな 北八 イヤわしの質商賣さ 亭主 質とあれば何かいなお取なさるのか置なさるのかいな 彌次 置のが此男の商賣さ 北八 夫だから質は置時計算用からして掛らよア買れやせぬ。此布子のどうして壹より外の貸めへから貳朱斗に買にやア損がいく 亭主 なにいふじやぞいな後家は質屋へ持ていても金壹分のもれ云ず貸とわいな 北八 どんだどを云ぞうして壹分かされやしやう 亭主 ナニ壹分つけんといありやしよまいがな 北八 夫ともお前へ直に受なさるか 亭主 受るわゐな 北八 そういつてもあてよやアならぬへ。夫よりか此間の股引の出入のどうしなさる。そして裕の時貸もあるし夫

お前へ子供衆が瘧胃腹してわづらつてゐるうへ。腫様が疫病で。死なれたければ。佛抱へて葬禮を出し。工面が山來ぬと。達ての頼みゆる。貸てあげたものを義理の悪ひいつそのと此布子の其裕れかたに只取て置やせう。亭主、是申し。どつともう厄たにもなる事云ふてじやわいな。わしは喉のいつ疫病で死だぞいな。あたけたるな事いはんすわいな。腹彌次郎あかし。どうも此男の口が悪くてなりやせん了簡一なせへ。そして何角どめんだうな其布子も尋貫にまけてやりなせへし。亭主、よう御坐りませ朝商ひじや。まけてあぎよわいな。ンヤン。北八、まづの布子もありつゐた。彌次郎、彌次郎、錢を拂らはせか。れ布子を着て木綿かつばを彌次郎にかへし。此の内である。のれんを見れば虎屋と有るに思ひよりて。和藤内三貫あまりれふる布子。老一貫もどめこそそれ。夫より北八のたちまちも元氣をえて。ント彌次さん。すさまじかるふ。古着屋めをちやらばこで。はぐらかして尋貫に見たとし。安い物だ見なせへし。まだ襟垢もつかぬへものを。彌次、紺は阪看と見へてゐるら。お供の様で丁度い。の北八、時よこらひ

○紫帽

野郎曰
申童

何と云どころだの。どうてきよいな。たばがちらく。そる。彌次、ハ、アむらさきばう志れ野郎どもが見へるから。おやかた宮川町と云けん。どうだ。北八、來ぞ。美く。ひ媚どもがくる。能時れ。めらア着物を買てよかつた。まんざら。はだかの上。其木綿合羽じやア。あつらよ。それ違ひても外聞が悪ひ。トにはか。襟かき合せて見へば。りな違ひ通れば。一人れた。娼。初音さん。見なませ。彼人さんの着りも。ん。大きな紋が付て。じやわいな。ナ、おかし。初音、ホンニ。あはらしい。人様じや。ナ、好んやの。ト打笑ひ。うちすぐる。ゆ。ナヤ。北八手前への着物を見や。春中の横つちよ。大きな紋所が。くつ。あていら。北八、どこよ。トふりかへりて。能見れば。のぼり。紺に染あたりへ。出るとい。は。き。な。紋。北八、コリヤ。大變。彌次、ハ、裾は。方。よ。い。鯉の。淵。登。り。所。あり。く。ど。と。ひ。て。見。ゆる。北八、エ、古着屋めが。どん。だ。め。に。あ。は。し。や。が見へるから。こ。あ。つ。織。は。は。ぐ。ら。か。し。物。だ。な。北八、エ、ナ。ナ。う。つ。ち。や。つ。て。置。や。れ。皆。ア。ダ。つ。た。ど。う。り。で。安。と。思。つ。た。ふ。ん。の。め。て。來。よ。彌次、ナ。ナ。う。つ。ち。や。つ。て。置。や。れ。皆。手前へ。ダ。べ。ら。ば。う。だ。か。ら。起。た。と。だ。先。は。商。賣。だ。者。を。仕。方。が。ね。へ。北八、エ、い。め。へ。ま。し。

○着恥

トまじ目よなりてつぶやきながら四條通に出れば名にあふ川東のきつすい。いん町の繁昌ハ兩側の芝居、搦太鼓を打交へてでんからくけ音、いさましく狂言の名代。看版花やかに對のはでもやう着。サア、訂判ぢや、今が三郎の腹切じや飾たる。東西れ木戸番志やがら聲よて



引連て芝居へ這入一階へ上ると棧敷番きたり二人をむかふ坐。ト二人を兩方の前の前側へ入れる。もつとも幕の内にて中賣り商人ハ聲々。水から宇治山、彌次、んぢうい、かいな茶アあがらんかいな茶々をどうじやいな番附繪本、彌次、どうきに

此跡が嵐吉と友吉が所作事評判

トよびわたる江戸で火なほといふ

は京大坂にての皆女なり北八彌次

郎兵衛が女モシナお前さん方一ト幕のみ

袖を引て

てお山んかいな北八いか様ナント彌次さ

ん京の芝居も一きりみやうじやアねへか

彌次面白かるふ女中いくらで見せる女よ

う御座り升わいな。わたしが。どうなぞそ

るさかいマアね出なされ

の手に引ばり

ト二人を兩方

の手に引ばり

水から宇治山

彌次

何だ手づからうつ

ちやる勝手よさつせへ商人 饅頭どうじやいな

北八こわつがいつちわのつて居るコレ

饅頭三ツ四ツくんなせへ商人 ハイ、三文宛て御座り升

隣座敷 コレ饅頭やさんど

した者じやぞい。こちの辨當。へしつぶしじや商人 ハイ、お許しなされ 彌次 アイタ

タ、どうさよ足を踏だ商人 ハイ、足ハモシちとおゆるしなされ 北八 コリヤどうしや

アがる人の頭のうへを。金玉を引つて。通ヤアがるニ、きたねへ、隣りざしき

兵、權兵衛さん何買ふてお山だろい 權兵衛 太郎兵衛さん。まつてじやある私や今あ

この棧敷でな氣味。味の物喰てじやさかいソレ見ておて。おる成たわいなサア、こ

なおなもん下ヤト竹の皮太郎ハア餅此酢もじかいな。コリヤ氣味い、其飯は辨

當の替りよして肴ハ、かして酒の肴よさんせ夫がい、わいな 權兵衛 さよじや竹の皮

ぞ。持いんで草履の鼻緒たてゐわいな。イヤ時よ一盃やろけいな 取り出し風呂敷を

○ 權兵衛
下 卑
兩個 避
三 舍

○天命
湖而謀
反忽書
塀

包し徳利よりつゝで飲む 彌次さん見ぬへ味とらふ香あるがうらやましい 彌次
 北八是を見て小聲よなり コレお坊さんお饅一ツあげやせう した饅頭一ツ隣
 いめへましいとをいふ男だ 北八 酒を呑ふといふした心なり 太郎 酒を呑ふといふした心なり 太郎
 り機敷の子供よやる是よて足を付て コレハおありがたふ御座り升。わいな 北八 お前
 酒を呑ふといふした心なり 太郎 酒を呑ふといふした心なり 太郎
 方はい、物を上りなざる 太郎 お前も御酒はお好かいな 北八 左様く飯よりの好物 太
 郎 ソリヤい、お頼みみやいいな コレ權兵衛さんモ一ツ頂戴こかいな 太郎 コリヤ
 能酒じやな 權兵衛 さよじやホンニお隣のお客御退屈じやある是など一ツあがらんかい
 な ト茶碗を差だす北八手 ハイありがたふ御座りやす 太郎兵衛 然しさめはせんかい
 な又取るより早く頂いて ト茶屋の土瓶を北八は渡せばもつけ顔 北八 エ
 なモシお銚子と夫へあぎよわいな してうけとりつゝおて呑いふる茶なり
 、茶だそりなアベツ 太郎兵衛 おぬるがつたじやある 北八 とてもぬるい序よどう
 ぞ是へ其徳利のをうめて下さりませ 太郎兵衛 是はしたりコレ見なされこなおよなつ
 たわいな ト徳利をさかさ彌次 ハ、ごうさらしな 北八小 いめへましい饅頭一ツ
 棒に振た トぶつゝ口の内よ小言云乍らふ カッチ 見物 イヨ口上様ア 口上 東西

拍子木 カッチ 此の内口上も濟
 大鼓 テン テン テン テン 拍子木 カッチ
 チ、チ、三味 ツ、テン
 ○芝居の四條鴨川の東に在り永祿年中よ
 江州の浪人名古屋三左衛門と云者出雲
 のお國と云ふ風流女と話し合ひ歌舞妓
 と名付て男女立合の狂言を仕組北野の
 森祇園の南の林五條河原よて興行し其
 後中絶して承應二年よ村山又兵衛と云
 者四條河原中の嶋よて再興し又繩手四
 條の北に移し遂に寛文年中今の地に移
 して常芝居となる
 幕あくと。はなみちより仕出し 役の者。大勢出ると見物悪る口 イヨ大根ウ



十抱一トからげじや 北八なほ大根といふ 役者の事か何のとだ 見物ヨウ。でけ升の
 北八有難とややすト此北八いたつて芝屋すきゆる。幕があくと夢中になり何もかも
打忘てむしやうよ。おほきな聲して。ほめるゆゑ見物皆々あかし
 く北八の方を北八コウ 大根めを大根といふ。北八其わけを。しらす人が大
見て居ると
 根くと云を。開た風は役者を見る。大 盲祿ト北八を笑ふ上方にて盲祿
根くと呼立るを見物北八を小馬鹿よし 盲祿といふ。江戸にていふ折
と云者北八紺の布子を着て居るゆる見物看版きたると 北八彌次さんきいたかこ
おもひてかくいふなれど北八もうろくのわけを知らねば
 つちの役者は色々。へんちきな名がある大根だの盲祿だのと。よとや併名じやア
 有めへ 彌次おほかた役者の仇名だろふ 北八ろんなら今でた役者か盲祿だなヨウ
 盲祿有難へトいふと見物よとつとあちがきて狂言の見 見物イヤ向棧敷の盲祿様大
すよ北八の方斗見てとつ 見物おほよ 向棧敷の盲祿のあやア 北八何た向棧敷の盲祿ア何のこ
 つた鼻つ垂らしめら 彌次ハハ 鼻つたらししたア手前へのとだは 北八何せ 彌次上方で
 盲祿と云の折助のとだは手前へ紺此看版を着て居るから夫て皆なよひやかされるの
 だは 北八エ、そうか。そんなら疾くよ。そう云てくれればいよ 見物あやよ 北八

イヤおつらひふてへ奴らだトむしやうよ。りきむと見物皆々さわきたち喧嘩よ々
 引出ん 北八コリヤどうする 棧敷番お前狂言の邪けは成るわいなまちごんせ 見物そ
どする
 いつ早いなせヤ 北八何ぬのしやアがる 棧敷番ハテ能わいな 彌次コリヤ貴様たち
此男をどうする 棧敷番イヤお前もごんせ
 や。まるめられてのぼせ上りせんかたなくト二人を中よつりわけ下へかきあろ
なと兩人小言たら 芝居を出て祇園町の方 面倒う 北八エ、業晒しなハハハ
 木戸銭を棒 古手の布子 芝居も紺の大 赤しませし
 夫より行々て祇園の社 参る御本社 の中央ハ大政所牛頭天皇東の間 八王子西の間
 は稲田姫聖武天皇の御宇吉備大臣唐士より 歸朝の時 播磨の廣家 垂跡し給ふ を崇め
 奉れりといふ 其外攝社 未社。まるすよいとまわらず。参詣日々に群集志。茶店あまた
 祇園香煎の匂 高く齒磨賣の居合 拔賣薬 のいひたて浮世物 ね。能狂言。境内よと
 ころせき迄みち たりこいよもさま の方言あかしみあれ ども其おもむき感
 入悉く皆順拜して南の方櫻門 を出ると二軒茶屋といふ。でんがお休みなされ
 くの名物にて赤まへだれたる女 ども大勢かど立てしやべる

是へお遣入なさらんかいなコレナお支度なさらんかいな 彌次ハ、アこ、が川柳点よ豆腐切る顔に祗園の人だからと。云たどころたなアレ北八見やこつ妙だ。のどおて見れば女トント、北八ホンニ面白へ。イヤ時よ爰て一盃のやらかしのどらふ切る音トント、北八のどらだちと腹が北野の御神木だ女サア奥へお遣入なされ奥へ通る。北八田がくで飯よまよ酒も少志女ハイ。彌次京ていなんでも他國者と見とませ。途方もなく高く取といふとだから汕断のあらぬ。北八ホンニろれ。三文でも割を喰ちやアどうはらだ。此内女盃を以て口取に菜一。女只今おでんがでけ升マア一ッ上りなされ。彌次よし。モシ女中酒のいくら宛だの女ハイ。わたし所の御酒の能御座り升六拾分替で御座り升といふ。彌次エ、夫志やアわからぬへ此どんぶりのいくら夫かいな色々で御座り升わいな。北八飯を早く頼み升女ハイ。かこまり升た。を二膳は飯鉢で。ハイおでんが山けました。彌次こつ。變な田樂だ。女ツリヤ葛引じやわいなおむしの。只今。彌次。田樂の幾ら宛だ。北八ハ、いかよ先へ直を聞がい、と

つで田樂の聞かずと。い、じやアぬへかサア一盃はじめぬへ。彌次チット。なるほと能酒だ水ぼくてぬから呑ぬ。もラ一盃つ、けよ。北八コレお前へ。小言を云ながら獨で呑の。ちとこつちへよこ志ぬへ。彌次時よ是でハ。いのぬモシ。何ぞ肴を一ツ女ハイ。ト頼て硯蓋彌次。此硯蓋はいくらだ。女ハイ。貳分五分で御座り升。北八このつの高へ。彌次エ、うつちやつておさや。あんまりわたじげなく志やアがると。已がこまらせてやる仕法がある。トだん。肴を出す度に其直段を。彌次サア。女中勘定を頼み升。女ハイ。夫へ。ト書付を秤に。彌次。トレ。北八見や。さつとした所が此書付だ。北八。ヲヤ。拾貳分五分たア。どうせへ高へ。貳朱くらぬの物だ。彌次さんまけて貰ひなせへ。彌次。イヤ。安い物だソレつりを持って來なサア。北八荷物が出きた是を皆持て歸るのだせ。ト硯蓋大平井杯皆鼻紙。北八。彌次さん夫をどうする。彌次コレ女中。ヤア。皆持て歸りやす。女。エ。夫ハ。彌次。ハテ先刻よ此どんぶりのいくらだ。と聞たら五分だ。と。云たじやアぬへか。そして硯蓋ほど。云ハ。二分五分だ。と。云。よし

大平が三匁よししか此鉢のど。聞たら是が三匁五分と貴様が云たよ違へい。あるめへろ
 こてめた。ところが拾貳匁五分渡きたから云分を有めへ女ヲホ、よう。ぢやらく
 ど。てんごういふお方じゃいな。ヲホ、彌次イヤ。ヲホ、じやアねへ本どうよめて
 けへる。トまじめなつて風呂敷よつ。モシナわたしの云たハお肴のどて御座り升
 もうとするもゑ女肝をつぶし。此硯蓋に盛てある肴いくらだと聞やす夫を此
 わいな。彌次ハ肴の直段さく氣なら此硯蓋に盛てある肴いくらだと聞やす夫を此
 硯蓋はと云たら二匁五分だと云たぞやアねへか。女をじやて、夫がまア彌次ナニいさ
 くさが有もんだ。トやつ、かへしつゝいふ所へいさを。ハイ是はわたしの御尤もよご
 ざりますお持なされませ。其代り道具の代物のいさ、さましたがる物のお拂ひの
 まだいた、きませんでいな。夫を御勘定下さりませ。彌次なるほど、喰た物の高が
 してある拂ひやせういくらだ。男ハイ七拾八匁五分で御座り升わいな。彌次途方もね
 へとをいふおめを盲だと思ふか。コレエたつた五百が六百が物を喰せて置て大そ
 れたことをぬかしやアがる。男イヤわくしめたてい。何じやあるとお肴は大坂から



歩行荷で。取よせ升さかい。駄賃がゑろふ掛
 り升わいな。彌次肴の夫もしてやろふが青
 物は高がしれてある。アノ初め出した菜
 のまたし物はいくらよつ。男ハイあれはな
 七匁五分。彌次ヤアあれが七匁五分だアあん
 まり人をうつむけよまアがる。三文か四
 文がものだ。男そなわよかつまやり升な。あ
 りや京の名物で東寺菜とヤ升わいな私くし
 方では別よつくらせまろて虫の喰た菜の
 け升わいなきして莖も太い細いのなやう
 よ撰出して上るわいな。むざいおはなじじ
 やが糞も絹越にして掛ますわいな。彌次どん